

十月九日

一今朝六時伏見出立淀に五十丁壹里同所なる人馬繼立枚方へ五十丁三里枚方なる晝支度ぬし夕七時前守口宿へ着止宿之事

守口驛宿本陣

吉田八兵衛

一明日常宿の大坂に通り夫の西之宮に通行之積之處大坂は黒船渡來^(カ)なる人足不自由差掛候るハ賃錢何程出候るも人ハ無レ之ニ付大坂に出浮候義ハ不都合ニ可^レ有^レ之段宿主申聞當所の神崎迄川船なる可^ニ相越^ニと相決宿主へ申談百石積を一艘借切此賃金壹兩之約束取極メさせ候事

一此宿亭主大阪黒船渡來中彼地罷越居候由にて委細嘶申聞候事

一茶代^(調字)□□遣候

十月十日

一今朝六時過守口宿出立宿の船場迄六丁程行昨夜借切置候船に乗組早速出帆ぬし神崎に川筋三里九半時着船同所なる晝支度ぬし候人馬之義ハ當所の西之宮迄手雇ニ相成西之宮迄人足壹人ニ付銀四匁馬壹疋ニ付銀九匁問屋場に拂候尼ヶ崎通り夕六時前西宮に着止宿尤宿間ニ付割宿ニ相成候事

西之宮驛宿

樽屋新兵衛

木津屋勘助

寅次郎其外宿也

一守口の神崎迄三里神崎の西之宮迄五十丁三里此間昆陽川アリ

十月十一日

一今朝六時前西ノ宮出立兵庫なる晝支度ぬし七半時大藏谷に到着止宿ぬし候

脇本陣

石井五郎兵衛

一此宿之儀ハ先年御一門衆定宿之由相聞候事

一今日ハ西之宮惠美須社阿保親王陵楠公碑須磨寺等其外舊蹟見物所有^レ之候へ共此度ハ付添之義ニ付見物ハ不^レ致候尤敦盛之石塔に者參候事

一寅次郎の番之者に申聞候ハ川崎宿なる可^ニ申聞^ニと存候由宿々なる重之助と一ト間ニ被^ニ差置^ニ候ハ如何哉と申候由大肝煎仙吉か申聞候ニ付右者一ト間ニ可^ニ差置^ニ譯^ニハ無^レ之都^ル之事重之助とハ取扱も違^ヒ候義ニ候へ共泊り宿之義ハ間取彼是差間も有^レ之別間ニ相成候るハ番人之都合も不^レ宜候付勞々之趣を以勸辨ぬし候様可^ニ申聞^ニ旨相授候事

十月十二日

一今朝六時大藏谷出立加古川なる晝支度ぬし夕七半時過姫路着止宿ぬし候

宿 和泉屋九一郎

一當所産物革細工物見合たはこ入(ムシ)革類等買得代銀〆三步貳朱百文拂候牧屋金兵衛也

十月十三日

一今朝六時姫路出立鶴龜新田播磨之箱なる鶴屋千藏方晝支度いふぬし宇彌峠根といふ此所〆夜二入六半時三ツ石宿着止宿候事

脇本陣宿

三村清兵衛

十月十四日

一今朝六時三ツ石出立一日市二なる晝支度いふぬし夕七半時岡山西中島町二着止宿いふぬし候尤宿間二る割宿二相成候事

宿 西屋領右エ門

一當所之義ハ御大名様御泊り之外本町通り二止宿二相成二由候事本陣田原屋與右エ門二掛合一札取置候事

十月十五日 小雨

一今朝六時岡山出立河邊二なる晝支度いふぬし七半時矢掛宿着止宿尤手狭二付割宿二相成候

宿 白根屋善八

寅次郎其外 藤屋善兵衛

一當所名物のをし買得貳朱ニ付十一包之事

十月十六日

一今朝六時前矢掛出立神邊問屋場二なる晝支度いふぬし候彼方床之一軸ハ茶山芳野山之作也亭主を尋候へモ風雅人二付茶山ハ當所之人なる由何歟所持候ハ、所望いふぬし度申談候處半切一枚持合候分可レ任二所望一との事二付金一方小半價レ之候事

脇本陣

平岡屋(ムシ)作

一重之助事今日之寒サニ手不レ叶之由二付醫師二に見セ吳候様申出候付當所醫師栗田梅村二に見セ丸藥爲二差出一候事

十月十七日

一今朝六時前尾之道出起本郷二なる晝支度いふぬし暮六半時過西條着止宿尤手狭二付割宿二相成

宿 尾道屋五十郎

寅次郎其外 白銀屋源吉

十月十八日

一今朝六時西條出立一貫田二なる晝支度いふぬし候同所二る出府之八木甚兵衛二出會過ル十五日御國出立之由夕八時海田着止宿

十月十九日

宿 猫屋彦五郎

一今朝六時海田驛出立今日ハ歸府之長崎奉行廿日市泊りなる通行廣島なる行逢裏町に除通り無レ支相濟廿日市なる晝支度いゝし且仙吉其外一杯相催し夕七半時過玖波宿到着止宿いゝし候尤今日雪天ニ相成一同難義

宿 岩國屋三右エ門

一明日ハ御國ニ之注進飛脚岩太郎差立候ニ付御用所衆中に左之通申遣候事

一筆致啓達然者吉田寅次郎并重之助御國被差下候付差添被仰付去月廿三日江戸出立道中無滞今日玖波驛到着致止宿候尤重之助事御引渡之砌ハ重病なる道中ニ相成候ハ動靜も有レ之食餌も給へ兼候付於所々一醫師相頼煎湯丸散藥等爲レ致服用一療養無疎致手當罷在候内伏見到着之砌者衰弱も強何時變症之程も難計醫師申分ニ御座候ニ付一同心配罷在候處其後少々快方なる先是迄無難罷歸申候寅次郎ハ聊無別條付添之面々下々迄相替義無御座候左候る來ル廿三日明木泊りニノ廿四日早朝同所出立萩着之積ニ御座候右ニ付寅次郎重之助孰ニ引渡可被仰付哉此段御國中に入候ハ、及御乞合候様 御留守方ハ御投有レ之候付態ト以飛脚得御意候間旁々之趣報負殿に被仰達御答被仰知可被下候爲其如斯御座候 恐惶謹言

十月十九日

武弘太兵衛

尙々本文道中泊^(測カ)之儀廿五日ニノ旅行候様 御留守方ハ御投相成候處全弊網掛り駕籠之義ハ於泊々差間

斷之趣も有レ之難澁之次第其上短日之時ニて且病人之義立場も多く積り通ニハ相運兼候付無據泊り割線替候付彼是延日相成申候此段御承知被成可被下候已上

内藤 兵衛 様

中井次郎右エ門 様

周布政之助 様

一表書返答左之通

御面書御端書旁致承知候報負殿申達候處寅次郎義者直様野山屋鋪に連越福川岸之助に引渡重之助義者御客屋申達揚り屋番人に相渡候様被仰付候間右様可成御心得候 恐惶謹言

十月廿一日

周布政之助

中井次郎右エ門

内藤 兵衛

武弘太兵衛 様

一花岡留守にも書狀遣候事

一萩着之上止宿之儀定宿佐々木吉右エ門方に通達之義岡川に頼遣候事

十月廿日

一今朝六時玖波出立柱野ニテ晝支度ハムシ候七時高森ニ着止宿

脇本陣

か免屋市之進

一重之助氣分相、當所醫師三戸文庵ニ診察爲レ致候服藥差出させ容躰書をも取置候事

一拙者義ハ着之上早速夕飯相認候る花岡へ先越ハムシ候付手附甲吉小使文吉下人等一同七半時過高森出立夜九時前花岡着ハムシ甲吉文吉下人ニ夜先越候付鳥目百孔ツ、手當遣候事

覺

從ニ江戸ニ御連下之囚人繁之助容躰診察仕候處瘡毒全身ニ蔓リ殊ニ肺中ニ侵刺之症ニ相見ニ乾咳荏苒疲勞手強脈微細數最早壞症ニテ臭氣も有レ之勞甚手重キ容躰ニ御座候則千金内服散加ニ麥門・五味子ニ兼用硫黃花ニ散劑等調合仕候處相違無ニ御座ニ候 以上

嘉永七寅十月廿日

御本陣醫

三戸□庵(カ)
(書判)

十月廿一日

一今日一達中七時花岡ニ着晝支度ハ呼坂ニテ相仕廻候由

止宿脇本陣

野村又右エ門

一達中着ニ付宿爲見舞一九一郎差越候事

一拙家へ豊田又右エ門棍山文右エ門幾度一郎次相尋候付吸物肴五種ニテ酒差出候夜四ツ時引取り尤催相ニテ土産當所之銘酒錦川五升手形ニテ到來

一仙吉竹太郎も參候付酒差出候事

十月廿二日

一今朝六時支度ハムシ當所宿野村又右エ門方に參り六半時一同出立福川ニテ油屋常七方晝支度宿

一松田茂四郎ニ清吉ノ書狀并拙者より之書狀共油屋常七へ申談當所ノ德地高瀬迄飛脚雇立ニテ唯今ハ差出候管賃銀四匁遣し候尤賃錢ハ於ニ江戸ニ引當請取置候事

一椿峠ニテ不圖松田茂四郎に出會清吉病氣之趣申聞候事

止宿 藤村屋孫助

一夕七時過宮市着ハムシ候

一天滿宮へ參詣夫ノ用事有レ之小倉房太郎方へ行

一渡邊小源太ノ留守遣候金子入書狀房太郎へ頼置候る相届候事

一玖波驛ノ差立候飛脚岩太郎事御用所衆より之返答取歸り今夜當宿へ着之事

十月廿三日

一今朝六時宮市出立山口井關屋に盡支度ぬし夜五時前明木着止宿ぬし候尤雨天彼是遅相成候事

宿 原善七

同廿四日

一今朝六時明木宿出立於大谷大賀久樋方盡支度ぬし候尤今日者焚出しにも可被仰付之筈之處差掛り其義無之候
ニ付一達中支度代之義ハ一件拂ニ被仰付候ニ付承り届置候

一九時過萩着直様野山屋鋪に相越吉田寅次郎事福川犀之助に引渡相濟る夫御客屋へ相越於會所筆者ハ兩人役兼次郎松岡清兵衛に出會重之助事揚り屋番人に引渡候様御授有之候段申達付添之者番人に引渡爲請取候段清兵衛ハ申聞候付一同引取候左候直様爲御届御用所に罷出糶負殿ニハ下宿候付手許役其外に申達引取候糶負殿宅に罷越及御届候歸り掛ケ梶山文右エ門宅に立寄取扱も有之夫宿佐々木吉右エ門方へ落着候事

十月廿五日

一今日早朝勤ニ出候上厄人衆留守岡川にも參候事

十月廿六日

一今日も早朝勤ニ出候事

十月廿七日

一今日迄御用所ニ罷出江戸より承り歸候御用筋手元其外一同に申達候事

一此度付添歸り候組之者道中泊り旅籠代ハ勿論盡遣ひまで自分道中と違ひ數日も餘分相掛り彼是内證迷惑有之候付於道中依歎無據拾七人銘々に金壹歩宛兩度貸渡置候付其邊御詮義被下度且無滞歸着一件濟候る少々ニも被就御氣被下候様御用所に委曲申出置候事

十月廿八日

一今日も早朝勤ニ出候事

一御用相濟候付明日歸在之積る堀内其外糶負殿にも暇乞として罷越候事

十月廿九日

一今朝萩出立山口泊りいし候

同 晦日

一今朝山口出立徳山夜入花岡歸着候事尤幾度一朗次同道一朗次ハ徳山泊りいし候事

一銀五百九拾貳匁九分四厘

此金八兩三步二朱ト錢貳百九拾三文 但道中惣陸勘渡之分

一同八拾三匁貳分九厘

此金壹兩壹歩ト錢拾九文 但道中上下人足壹人立被下候賃

一同四百目

(朱書) 此分追ふ括り被_レ仰付候事

此金六兩ト錢百拾貳文 但何歟迷惑筋も可有_レ之ニ付御貸渡之分

一同百三拾目

此金壹兩三步貳朱ト丁錢貳百拾貳文

但一件御用濟歸府ニ付被_レ就_二御氣_一被_レ下候分

一 豐田又右エ門に三百五拾目梶山文右エ門へ三百目幾度一郎次へ貳百五拾目御貸銀有_レ之候事

一 歸府之上又右エ門百貳拾目文右エ門百目一郎次百目被_レ就_二御氣_一被_レ下候よし

一 仙吉其外拾七人に於_二道中_一金壹歩ツ、兩度貸渡置候分不_レ及_二返納_一一件銀之内ニ_レ拂_二立候様授有_レ之候事

一 同人其外に歸府之上仙吉へ五拾目竹太郎其外三拾目ツ、被_レ就_二御氣_一被_レ下候由之事

一 拙者歸府之節ハ最早出萩ハ不_レ仕直様花岡_レ出立申出事助渡等被_レ下候義者豐田又右エ門・梶山文右エ門ト申合取計

吳候様滞萩中申談置候_レ十一月十六日花岡出起尤道中急キ_二被_二仰付_一候ハ、(遠海)遠海_レ船借切之積申合置候處御時節柄

ニ付急手ニハ不_レ被_二仰付_一との事ニ付三田尻に出浮候米屋可_レ七方へ差付可_レ參之處彼方此節作事中間ニ付熊屋惣助方

へ宿申付置候趣道口迄迎_二出候者申事_一ニ付直様惣助方へ越着_レ候尤小使文吉義ハ小郡_レ豐田又右エ門手附岩太

郎義者大道_レ直様遠海迄出浮居候付三田尻に引返_二させ候事

一 十七日夕方豐田又右エ門・梶山文右エ門・大肝煎仙吉・下横目竹太郎其外三田(尻)後出浮候_レ熊屋方へ着之事

一同日夕乘船御用船貳艘にて相出一艘へ拙者上下・幾度一郎次・手附甲吉・小使文吉・惣太郎_レ七人一艘へ豐田又右エ門上下・梶山文右エ門上下・仙吉・竹太郎・岩太郎_レ七人

一同十八日朝三田尻出帆一郎次義ハ室津_レ乗込船中順好同廿二日夕七時大坂着岸早速柳屋利兵衛方へ揚り又右エ門其外乗組之船者昨廿一日夕着岸之由今日ハ又右エ門其外見物ニ出候_レまだ歸り不_レ申由今夜伏見へ罷上り可_レ申哉打合も出來不_レ申見合居候内夜五時前歸り候由ニ付申談候處夜中ニ_レ荷物引調へ其外不都合ニ付明日晝船ニ_レ罷上り可_レ申と相決利兵衛船雇立候様申付候事

一同廿三日早朝淀船へ乗込借切_二ノ夜五時前伏見迄着候事錢屋善兵衛方へ止宿

一同廿四日朝伏見出立道中拾四ノ五ニ_レ十二月九日江戸着之事

一 吉田寅次郎并重之助事御國被_二差下_一道中諸入用勘定仕置之義者春ニ相成差出可_レ申候 御留守方に申入置翌卯年正月廿一日帳面ニ相認候分に拙者留印_レぬし其帳面幾度一郎次_レ御用所に差出候尤諸入用引當として金三拾兩用心金貳拾兩_レ五拾兩御渡方相成候内四拾六兩三步ト錢七拾六文諸入用殘_レ三兩三朱ト錢三百拾貳文ハ正月廿一日返納し一郎次_レ御銀子方手子幸八へ相渡申候事

(德山市石田保平氏藏 校合濟[㊤])

久保清太郎日記

解題并凡例

久保清太郎の日記中より松陰關係の事項を摘記したものである、清太郎は松陰の外弟であり門人であり、後の從五位久保斷三である、松陰の一生中松陰に最も接近して居つた一人としてこの人の日記は頗る貴い、書振は簡單で飾も感想もないが、それだけまた正確である、記事は安政二年二月に始まり萬延元年十月二十六日に終る、

(委員 廣瀬豊)

(安政二年二月) (在萩)

廿三日 晴、七ツ時出足、佐々木龜之助・杉梅太郎其外金谷迄送り來る、佐々並午飯、未半時山口着、宿三井関屋

(下略)

(五月) (在江戸)

廿六日 晴、……宮田(相模國)が玉木文之進着、筆者西山新兵衛

(六月)

五日 晴、炎蒸、玉木叔父歸る

(八月)

廿一日 晴、安井(息軒)の行、鳥山(新三郎)の行、母病(茶後)なる国に歸る由、古賀(赤川又太郎)の行、羽倉(德頼)の行、口羽留守、東条(英華)二(江村)

畑(五郎)二逢

廿三日 晴、塩谷(岩陰)・蟻川(賢之助)の行

廿七日 晴、塩谷の行、初る和蘭文典を讀、宮田人歸る

(九月)

十八日 陰、郡司熊二郎・湯浅祥之助着、乃美祭酒出ス

(十月)

朔日 陰、……湯浅・郡司同道なる蟻川・長原(武)の行

(十二月)

二日 晴、夕暮少降……長原(名は武)の行、病ニ伏ス

十日 晴、飛脚着ニ付書状仕出ス、杉隠(二脱カ)・杉梅(杉梅太郎)愛録贈ル……

(安政三年二月)

廿七日 陰晴不定、午後霽、午上野の行、下谷羽倉の行、十軒ノ雛ヲ見ル、武教全書ヲ買

(四月)

十五日 晴、御登城下馬の行、夫上塩谷の行、鳥山の行、不寐(根津)の行、櫻任藏の行皆逢、原城紀事ヲ頼ム、……

(原城紀事は松陰よりの依頼である)

(五月)

十一日 晝雨、晝外外出、無間帰、鳥山の行病臥ス、塩谷の行同断、小早川傳を借ル、御国状、脇差、杉外状

御飛脚持来ル

十三日 陰、晝外外出、(不明)下(松陰)の行先生反古持帰る

(八月)

九日 晴、炎シ、晝外外出、塩谷・長原・蟻川(松陰)の行先生頼之品相渡ス、南風

(十月)

七日 晴、……長原(第五卷第二九三號参照)の行中朝事実を借る

(十一月)

三日 晴、永原(長)の中朝事実(返)を帰ス、永原弟死去(長)に在喪中之由……

(安政五年七月) (在巻)

七日 病欠ニ付届出ス、今日於ニ御城ニ進退左之通

吉田直(吉田代官なるの意) 玉木文之進(前後略)

(十二月)

六日 添下り、昨夕吉田先生再獄御沙汰有レ之ニ付、夜、佐世・岡部・作間・有吉・杉藏・栄太郎・彌次郎等周布・井上(長)の行先生罪名ヲ尋問ス、先生父病氣ニ付投獄延引

廿七日 野村明倫官懸り進藤勘文方暫懸り、昨廿六日吉田先生投獄

(安政六年五月)

廿五日 波多野実方之姉勝木尙妻昨夜死去ニ付忌中届 今日吉田先生江戸被ニ差登ニ付、昨日杉に連帰り通宵談シ、朝、福川の行、右一件ニ付差扣申出ル、左之通

拙者儀親類杉百合之助育吉田寅次郎事先年御咎之趣有之公儀の百合之助へ御引渡蟄居被_レ仰付置_一候処此度於_二公儀_一御吟味筋有_レ之ニ付江戸表連出相成候様ニと町御奉行所_ノ御達有_レ之候付江戸被_二差登_一候段百合之助へ御沙汰相成不_二容易_一御厄害之御事奉_二恐入_一候依_レ之身柄差控罷居候間此段御沙汰可_レ被_レ下候 以上

證人殿

右ニ付先平躰之段沙汰相成出勤不_レ致候事

(十月)

七日 御寄合當役衆不_レ残出勤、御軍政御改革會議之由 吉田先生へ贈金十円為替ニノ札銀七百四十四匁上納 (下略)

(十一月)

廿日 曇、飛脚來る、去月廿七日松陰先師死罪ニ被_レ處候由 (下略)

廿二日 晴、朝杉_ニ行、(松下村塾)夜塾_ニ行、先師死處傳馬町上り屋ニ_ル小塚原_ニ葬候由

(十二月)

十六日 先生四十九日當り日ニ付杉_ニ夜喰_ヲ喰_ニ行、雨

(安政七年正月)

三十日 晴、松陰先生墓ノ事ニ付兩度玉木_ニ行、夜杉_ニ行

(二月)

七日 昨夜_ノ雨終日不_レ止、法林院様御法夏、初日參、吉田先生百ケ日當り日ニ付前髪ヲ團子岩ニ葬ル、杉_ニ行

燒香ニ行

(三月)

十三日 陰、杉今日_ノ暹塞被_二仰付_一

(五月) (萬延ニ改元後)

廿七日 晴、練兵場_ニ行 夕、先師墓參

(八月)

四日 雨、定扶持拂早出、松陰先師誕生ニ付杉ニテ鮮子馳走ニ成

(十月)

廿一日 晴、暮方差昏來、證人_ノ親類間差出候様添手昏來、杉_ニ頼ム、先師一件ニ_ル遠慮被_二仰付_一、檢使固屋_ニ届

出楊井_ニ知ラス (第九卷關係公 文書類参照)

廿六日 晴、松陰先生法事三人案内也 (下略)

(東京市久保清一氏藏 校合濟堂)

玉木彦介日記

解題并凡例

松陰の従弟玉木彦介は安政二年正月廿日、父文之進と共に相州成衛に赴く、二月十四日相州着、安政三年正月十六日相州發二月十五日萩に歸る、この日記はその間の日記の一部分である、察するに彦介は日記を時々故郷の松陰に送つて見て貰つたものであらう、松陰はこれを精細に調べ批評して又送り返して居る様子である、この日記によつて誠に諄々として従弟を薰陶せる様を想見することが出来る、惜しむらくは今存するものは僅にその一部分である、

(委員 廣瀬豊)

(安政二年)

(本文は玉木彦介、句讀點及細字の書人は松陰)

九月九日 曇天

朝、劔三本、槍壹本、九ツ時カ甚吉一同浦賀ニ至リ、銅瓶一ツ買レ之、代壹歩貳百八拾六文、弘大梨子二ツ、桃三ツ買レ之、代四拾六文を費セ、買ニ銅瓶ニ欲ニ他日歸レ砲邪、不レ然、瓦街足矣、丈人之儉、安爲ニ此元費ニ哉、

十日 曇天

朝、手習七枚、九ツ時カ久比里村、塗師屋ニ至リ、大小之柄、塗替之儀申付る、婦リ懸、内川新田ニカ、釣を垂る、一魚を得セ、太公望も失意ナラン

十一日 朝小雨終日曇天

朝、仕合三本、槍壹本、手習十五枚、中庸廿五枚、孟子卒業中庸初ルカ

十二日 曇天

玉木彦介日記

朝、中庸十枚、仕合四本、手習八枚、午後大人及佐伯驩八・近藤登一ニ隨ヒ、武山不動ニ參詣、三浦郡

所々之方位を正シ、夫カ野比村通りカ下ル、桃を賣る人ニ逢ヒ、八箇を買、主從四人ニ分ツ、各二ツ、宛代貳拾銅を費ス、暮前御陣屋ニ歸ル、夜海國兵談十五枚、

十三日 晴

朝、仕合三本、槍壹本、手習十五枚、夜海國兵談八枚、

十四日 曇天

朝、日本外史二枚、劔三本、手習十枚、夕飯後日本外史、便覽並初見ニ于此、外史三枚、西洋砲術便覽廿六枚、夜中共ニ、

十五日 晴朝、砲術便覽七枚、

一 朝飯後カ、野村八十八カ共ニ、三崎御陣屋ニ至リ、厚母三郎兵小屋ニカ、午飯カ馳走カ八ツ時前、御陣

三八五

本兼上同止屋上宮田に帰ル、直様大人ニ隨ヒ、本和田林両村を經、大多和村ニ至リ、名主仁左衛門百姓仁三郎等之宅見分、上御小休之御場所御詮義之由、暮前六ツ時帰宮、今日も桃実十顆を買、價二拾錢、御陣屋の本和田迄、道程一里を唱ヘニ候得共近き様相見候、此日、大人歩数を以、御測量之処、廿三町ニ極候、尊大人事ニ精詳、寅少時往從行、見ニ丈人數爲レ之

十六日 晝迄小雨夕飯後雨際出ス降

午後、大人ニ隨ヒ、三崎御陣屋ニ至ル、大人見國助右衛門を申セラル申ス、助右、此内有ニ父之喪、夫ハ原村、宮川村、毘沙門村、兼田村、菊名村を經、申ノ中刻帰營、此日、兼田ハ菊名迄、海濱ヲ沿ヒ、海松を拾て帰ル、此海濱似ニ菊濱

十七日 晴

午後、吉助を率ヒ、久比里之塗師屋ニ至リ、大小塗

繕帶ひ相調帶ひ候付取帰ル、手間代、金三朱、暮前帰營、道中差様之荒増ハ様々出來、莫大之黄金を費念(彦介の字不明瞭なるを直したものである)を、向後念入ルヘキ者也

十八日 曇天

一今日將レ有江嶋之行

朝六ツ時過、甚吉も御陳屋立出、小坪村ニ小飯、代貳拾六拾錢、小坪村ハイジマ村通り、由井ヶ濱を經、長谷村ニ出ツ、蓋捷徑ト云、四ツ半時、江嶋ニ至候、三所之弁天社ハ參詣、此所都て貝細工を商ふ、茶店立花屋ニハ、午飯を認む、代金貳匁、献立如レ左、

一ノ膳

皿おふせ 海草 大さんせん

汁とふぬ いさき

小皿たくはん 飯きうり

二ノ膳

長皿あしの塩やき吸物をき貝煮あじ

右相濟、直様發足、鎌倉歸リ懸長谷村之觀音ハ參詣、秋谷村ニハ小飯、代貳拾四錢、七ツ半時、御陣屋ニ帰ル、此日道程往來ニハ、九十六里也、

健甚々々、尊大人書曰、兒足力頗健、乃翁讓ニ一步、殆爲レ是邪、抑寅則危坐頗健、以レ此校レ彼亦復如何、

乙卯六月十日閱

孟子曰、一日暴而十日寒、未レ有ニ能生者ニ也、細讀日記、知レ殺父有ニ暴日ニ而無ニ寒日ハ、吾何得レ不レ喜哉、勉哉、勿レ忝ニ所生、

寅

安政二卯ノ八月

日記 七月六日

(松陰筆)
九月廿一日閱了二十一回

廿日 晴

朝、外史二枚二遍、一ノ卷程字往々アリ不用字ナリ讀終ル、午後、外史二枚二遍、柔術、

廿一日 晴

朝外史三枚三遍、九ツ時ヨリ大人ニ隨ヒ、千代崎ニ至リ、六ツ半時、御陣屋ニ歸ル、

此日、長沢村熊野三社権現祭礼也、やたみ三ツを見る、囉子ノ字ナルヘシはやし、方風(マ、)りま(マ、)り(マ、)なる、随分面白し、

廿二日 晴

朝、仕合三本、九ツ半時ヨリ水練、外史貳枚二遍、夜、禮記六枚、易經十枚、

廿三日 晴

朝、(スダメ)素榮二拾發、手習十枚、仕合三本、午後、兼田村ニ至リ、鮎十を得、七ツ半時、御陣屋ニ歸ル、夜、禮記三拾一枚、

廿四日 晴

朝、仕合三本、槍一本、素榮廿發、外史三枚三遍、午後、水練、素榮廿發、外史三枚三遍、手習八枚、柔術、夜、禮記二拾四枚、

廿五日 時々小雨

朝、外史三枚三遍、素榮廿發、手習十枚、午後、易經十一、枚外史三枚三遍、素榮廿發、柔術、夜書經三拾三枚、上卷終ル、

廿六日 時々小雨

辰半ヨリ、僕七藏ト八幡村内川ニ至リ、釣垂ル、沙魚及ヒ鮎(カ)四十(カ)喉ヲ得、申半歸營、仕合三本、素榮廿發、夜書經、三十一枚、

廿七日 時々小雨

朝、素榮廿發、仕合三本、外史三枚三遍、手習三十枚、午後、書經六枚、外史三枚、三遍、素榮廿發、

夜、書經十八枚、下ノ卷終、

廿八日 時々小雨

朝、素榮廿發、辰半ヨリ午後、外史三遍、手習廿枚、柔術、夜、孟子一ノ卷、十六枚、

廿九日 晴

朝、仕合三本、外史三枚三遍、手習十枚、午後、外史三枚三遍、

晦日 晴

朝、外史三枚三遍、手習十枚、夜、孟子三十七枚、

八月朔日 時々小雨

朝、楷書三十枚、四ツ半時ヨリ手付市右衛門ト、原村ニ至リ、どぜう八合を買ふ、代三百八文、(カ)八ツ半時、歸營、又々僕七藏ト、前濱ニ至リ、黒鯛六寸位の物一ヲ得、夫々御陣屋ニ歸ル、夜、禮記廿九枚、

二日 曇天

朝、外史三枚三遍、素檠廿発、仕合三本、楷書三十枚、八ツ時ヨリ僕七藏ト、下宮田入江新田ニ至リ、黒鯛一ヲ得、六ツ前、御陣屋ニ帰ル、

三日 終日曇天

朝、仕合三本、外史三枚三遍、素檠廿発、楷書三十枚、八ツ半ヨリ、僕七藏ト菊名村ニ至リ、黒鯛二ツ得、暮前、御陣屋ニ帰ル、

四日 曇天

朝、仕合三本、外史三枚三遍、楷書三十枚、夜、禮記廿九枚、

五日 終日曇天

朝、五ツ半時ヨリ、手付甚吉ト、松輪村ニ至リ、黒鯛二ヲ得、七ツ半帰營、

六日 晝ヨリ雨降出ス

朝、仕合三本、外史三枚三遍、楷書三十枚、外史

三枚三遍、夜、禮記七枚、

七日 終日曇天

朝、外史三枚三遍、仕合三本、槍一本、手習十二枚、午後、外史三枚三遍、夜、禮記廿九枚、

八日 晝ヨリ大雨

朝、外史三枚三遍、仕合三本、槍一本、八ツ時ヨリ大人ニ随ヒ、兼田村ニ至リ、大雷雨ニテウチル帰ル、夜禮記廿四枚、烈風雷雨 不_レ達

九日 曇天

朝仕合三本、外史三枚三遍、五半時ヨリ、大人柿並郡司、其外役人共、千代崎臺場ニ至リ、夜五ツ時帰營、

十日 曇天

朝、楷書廿枚、九ツ時ヨリ僕七藏ト、松輪村ニ至リ、黒鯛四ツ得、暮前帰營、夜、礼記十五枚、

十一日 晴

朝、仕合三本、外史三枚三遍、楷書三十枚、素檠廿發、

十二日 晴

朝、五ツ前ヨリ大人ニ随ヒ、大檢使柿並、役人西田與右衛門ト同ク、前濱ヨリ船ニ乗、城ヶ嶋ニ至リ、夫々乳崎ニ至ル、孰も御臺場配り付の御要用玉を納る、夫々陸通り帰り懸、來福寺ニる宝物を見る、魚石和田義盛の鏡、巴御前の鏡、同人所持之硯墨等、七ツ半時、帰營、此日、舟中右手ニ見て過ル所之漁村、菊名、兼田、松輪、毘沙門、向ヶ嶋、崎、二町谷、諸磯、小網代、三戸、下宮田等、

此舟行頗愉快、因憶_レ余警願_二下宮田_一午食上

十三日 晴

朝、仕合三本、外史四枚三遍、楷書五枚、午後、柔

術、禮記五枚、

十四日 曇天

朝、仕合四本、外史三枚三遍、夜、禮記五枚、

十五日 終日曇天

朝、楷書十枚、午後七藏ト、前濱ニ至リ、黒鯛一ヲ得、夜、禮記廿八枚、

十六日 終日曇天

朝、仕合五本、外史三枚三遍、素檠廿発、夜、海國兵談十五枚、

十七日 晴

朝、仕合三本、外史三枚三遍、夜、禮記十枚、海國兵談、十一枚、

十八日 終日中雨

朝、外史三枚三遍、仕合四本、手習十三枚、午後外史五枚、二遍、夜、海國兵談三十枚、

十九日 終日小雨

朝、外史三枚三遍、素榮廿發、仕合四本、手習十二枚、夜、海國兵談廿八枚、

八月廿日 終日大雨、大東風

朝、手習十枚、夜、禮記廿枚、

廿一日 晴

朝、仕合一本、夜、禮記廿枚、外史三枚三遍、

廿二日 晴

朝、仕合三本、外史五枚二遍、九ツ時ヨリ、近藤愛

一、近藤七右衛門、西田與右衛門ト共、長井村ニ至リ、糸を買ふ、代錢壹百五十拾六文、六ツ前、御陳屋ニ歸ル、

廿三日 曇天

朝、仕合三本、外史三枚、三遍、夜武教全書十八枚、

廿四日 晴

朝、外史三枚、三遍、仕合三本、槍一本、夜、手習十一枚、

廿五日 晴

朝外史三枚、二遍、素榮廿發、仕合三本、僕七藏ト下宮田ニ至リ、七ツ半時、歸宮、

廿七日 晴

朝素榮廿發、外史四枚、二遍、仕合三本、手習十枚、夜孟子八拾七枚、

廿八日 終日、小雨

朝、外史五枚二遍、手習十枚、素榮廿發、午後、外史三枚、夜、孟子百三拾五枚、

廿九日 終日、中雨

朝外史四枚一遍、仕合三本、手習十枚、午後、外史五枚、二遍、夜孟子百三拾七枚、

晦日 晴

朝、手習十枚、

九月朔日 晴

朝、七ツ半時、岡田以伯老、手付甚吉、天野手付半三郎ト共ニ、浦賀通り、大津ノ船ニ乗、九ツ過、

金沢ニ至る、千代本ニる午飯、料り石(ムシ)ネらの煮付、同のさしミ取合せ、ウリ葡萄之実生か等也、代

錢貳百八文宛、夫金龍院よりに遊続、朝比奈の切通しを越、鎌倉八幡に参詣し、夜四ツ時歸成、此日、路

程陸十二里海上三り餘、

二日 曇天 是日無車發程快晴ナリ 我公啓行會テ雨ナシト恭祝

朝、手習廿枚、午後、外史三枚三遍、夜、孟子百十貳枚習讀、

三日 終日小雨、夜大雨

朝、仕合二本、外史五枚、二遍、手習六枚、午後、外史五枚、二遍、夜孟子二ノ卷、六拾七枚、讀終

ル、三ノ卷、四拾枚、以上百七枚、

四日 終日大雨、

朝、仕合三本、外史三枚三遍、足利氏後記後北條氏讀終ル、手習廿枚、午後、外史三枚三遍、夜孟子三ノ卷、廿六枚、四ノ卷、七拾一枚、中庸三拾六枚、

詩經上ノ卷、三十四枚、以上百六拾七枚、

五日 終日曇天

手習廿枚、夜、詩經上ノ卷、十五枚、下ノ卷、七拾七枚、以上九拾二枚、

六日 終日曇天

朝、仕合三枚、槍一本、午後手付甚吉ト下宮田ニ至リ、鰻二十余を買ふ、代百四拾文、直様御陣屋ニ歸ル、夜詩經上ノ卷、四拾九枚、下ノ卷四拾五枚以上

九拾四枚、

七日 曇天

朝、外史三枚、三遍、仕合三本、夜詩經、下ノ巻、三拾二枚、讀終ル、上ノ巻、四拾九枚、一卷、讀終ル、下ノ巻、三拾八枚、習讀百十九枚、

十月十四日閱了、是日曇天、貴地ハハハ哉、又去月廿九日ヨリ此地度々地震江戸甚シカリシト風聞、実ナリ否、貴地ふと如何案勞此事ナリ、可レ喜ハ我防長二国ニハ大火山脉無レ之ゆヘ大地震もふし、日本ハ火脉多く特ニ関以東ハ所詮大變アリ可レ恐、宋ノ孫甫云、地震者陰盛也、陰之象爲レ臣、爲レ後宮、爲レ戎狄、盛則陰變而動矣、孫甫ハ仁宗ノ時ノ人ナリ此說余固ヨリ信セズ、然レハ篤實ノ君子斯說ヲ敬し、幕府始メ 天朝ヘ臣道ヲ尽し玉イ、又痛ク後宮ヲ抑損し、冗費ヲ省き士民ヲ愛し、戎狄之罪ヲ正し、 皇道興隆し玉ミんムハ縱令地震ノ變アリとも寅ハ變とも覺ヘ侍らズ、孫甫ニ問ハ、如何答ヘん、大人之御説ハ如何、趨庭之餘御質問可レ然候浮屠月性ハ天地ノ變災皆是戎狄ヲ近クルノ罰ふりと罵るよし、

其志嘉稱スベシ、左レト上人之志則大矣、上人之号ハ則不可ふりとぞ申べし、是ハ入らぬ問答とて筆きし置ぬ、九十ノ冬日モ最早十四日欠ケダ(マ)、百年歎忽千歳忙トハ東坡カウソハイハマ夫レテ堯夫先生之勤勉ガ吾師ナリ

松野平介末孫吉田寅次郎藤原矩方義卿書
穀甫生足下 (原本百年以下……吾師ナリ彦彦名の左側にある)

廿一日 晴

夕飯後、大人ニ隨ヒ、兼田村ハ濱ニ出て、夫ガ七ツ半時、御陣屋ニ歸ル、

廿二日 晴 網レ鮎始見ニ于此

朝、外史五枚二遍、夫ガ僕七藏ト兼田村ニ至リ、鮎壹合を網ス、

廿三日 晴

朝五ツ半時、大人并綿並一太ニ隨ヒ、千代崎御臺場ニ至リ、夜五ツ前御陣屋ニ歸ル、懸八幡村ニ至リ、鱈十一ヲ買代錢百文

廿四日 晴

朝外史三枚三遍、手習十枚、(或は御か) 釵仕合三本、八ツ前ガ手付市右衛門ト、下宮田村堤ニテ、鮎一升を網ス、外史三枚三遍、

廿五日 晴

日記

朝五ツ半時、岡田以伯ト共ニ下宮田村ニ至リ、船ニ乗、魚を釣ル、賤魚二十を釣ル、夕七ツ半時、婦宮、夜禮記元之卷、曲禮上第一、一卷、讀終ル、岡田氏近狀如何泛レ舟釣ル魚ヲ以テミレバ壯健無レ疑、可レ然致聲是乞

廿六日 終日小雨

朝、外史五枚二遍、足利氏後記毛利氏終ル、^(カ)飯仕合三本、手習十枚、夜吾妻鑑卷之一廿枚、^{初見于此}

廿七日 晴

朝、^(カ)飯仕合三本、手習十枚、午後ヨリ西山新兵衛手付甚吉ト共、^(カ)鮎三合とせう二合を網、二人ニ分ツ、夜吾妻鑑十八枚、

廿八日 曇天

朝、外史五枚二遍、^(カ)飯仕合三本、午後手付甚吉ト共ニ、下宮田ニ至リ、^(カ)鮎二升余を網ス、夜吾妻鑑廿九枚、此夜六ツ時、小地震、

廿九日 晴

當地にてハ廿九日ハ度々小震不^(カ)足^(カ)言^(カ)レ因ニ書ス

朝外史五枚二遍、^(カ)飯仕合三本、午後大人ニ隨ヒ、宝藏院ニ參詣、祖母様十三廻御正忌日ニ依るあり、七ツ半時、婦宮、夜吾妻鑑十四枚、此年治承四年庚子ノ年也、

晦日 晝迄晴、晝ハ曇天

手習十枚、晝ハ大人并近藤七右衛門ニ隨ヒ、長井村ニ至リ、七ツ半時、婦宮、夜吾妻鑑六枚、二卷治承五年庚丑也、

十月朔日 晴 獲^(カ)鴟始見^(カ)于此

朝、手習十枚、午後僕七藏ト津久井村ニ至リ、鴟二羽を得、七ツ半時婦宮、夜禮記亨ノ卷、月令第六ヨリ、曾子問第七マテ、吾妻鑑十枚、

二日 終日曇天

朝、外史五枚二遍、^(カ)飯仕合三本、午後手付甚吉、

僕七藏ト同村ニ至リ、鴟二羽ヲ得、夕七ツ半時婦宮、夜四ツ時、地震ニテ、宮田御陣屋内、固屋ノ大抵崩、横死人、足輕壹人、笹田組三人、糸賀外衛家來壹人、平野小太郎中間壹人、以上六人、^(カ)其外崩家埋込候も段々有、^(カ)皆々助^(カ)申候、^(カ)ゆ^(カ)り^(カ)出^(カ)ス^(カ)け^(カ)り^(カ)出^(カ)ル^(カ)直^(カ)様^(カ)崩^(カ)ル、^(カ)紀^(カ)得^(カ)簡^(カ)明^(カ)、有^(カ)生^(カ)色^(カ)

三日 晴

今日ハ、板が^(カ)まい^(カ)ニテ本^(カ)ニ居候、^(カ)困^(カ)苦^(カ)之^(カ)狀^(カ)可^(カ)想^(カ)、^(カ)吾^(カ)比^(カ)之^(カ)環^(カ)版^(カ)露^(カ)坐^(カ)苦^(カ)樂^(カ)何^(カ)哉^(カ)、^(カ)爲^(カ)之^(カ)毛^(カ)髮^(カ)森^(カ)立^(カ)、十一月四日乙夜時、新寒風烈、背經^(カ)蒲團^(カ)堅^(カ)坐^(カ)而^(カ)書、^(カ)二十^(カ)一^(カ)回^(カ)生

四日 晴

今日も同断

五日 晴

同断

(東京市玉木正之氏藏 校合濟慶)

村塾油帳

解題并凡例

一、安政四年の夏より秋にかけて松下村塾に集つて来た幾人かが、燈油料を持寄つて夜學に勤しんだものだ、その油代出納簿が、即ちこの冊子である、

一、半紙一枚四折の小冊子で、表紙には、中央に油帳、右肩に丁巳、左下に松下村塾と記されてある、書體及び文意より察するに、門弟増野徳民の筆であらう、

一、日附は、五月十三日と八月廿一日だけ記されてあるが、大部分は、今迄その掛りであつた吉田榮太郎が、その九月(安政四年)江戸に赴くに就いて、増野がこれを引継ぎ、その後又これを多分玉木彦介にでも引継いだ時の、收支決算を明記した記事らしい、

(委員 廣瀬豊)

(表紙裏)

油代 せしてお情

松下連 忘るゑ

身の村塾まこせ

一三分

増野 徳民

大野 晋三郎

藤野市二郎

(本文)

五月十三日油代残り

一札銀壹匁貳分

右栄太郎東行ニ付徳民受取申候

八月廿一日

一三分

一三分

一三分

一三分

残り三分徳民受居

内壹匁五分拂ひ

一正錢七十貳文

一札銀四分

右栄太郎受取候分別ニ三分右々則八月廿一日之油代之残り儘ニ御渡仕候事

(東京市玉木正之氏藏 校合濟堂)

玉木 彦介

國司 仙吉

熊野寅次郎

入江宇一郎

大賀 春哉

佐世八十郎日記

解題并凡例

一、佐世八十郎日記は、佐世八十郎即後の前原一誠の日記兼雜録の内から、松陰關係の部分を抄録したものである。時は安政五年の十月から翌六年の正月に至る、松陰の身邊が最も混亂急迫の時期に出會した佐世が、何の遠慮もなく記したこの日記こそ、松陰の嚴囚紀事や投獄紀事中の事件を最も率直に記すものと云つてよい。

一、原本は半紙廿五枚を四折にした横長の帳面であつて、表紙はない、表題は假りに編者がつけたのである。

(委員 廣瀬豊)

—(前略)—

十八廿八日

長井隼人^(雅樂)歸^(長井雅樂傳には二十七日とある)未^(月カ)詳^(何事)也、聞^(風説)、三藩薩藩土藩杯之有志、舉^(兵)而將^(誅)大老安部^(阿)矣、尋飛

脚歸、二日且其飛使同山縣半藏發^(江戶)、疾走歸^(國)、未^(着)、半藏歸^(ラ)バ事情詳カナラン、

霜月二日

松下塾エ行、肥後藩相敬左司馬・赤川直次郎と面會、前田翁^(ニ)行事情ヲ話ス、前田御手元郡奉行兼

帶、長井隼人不正論ヲ主張スルヲ聞ク、來原良兄聞正候處丸ニ不正ニ^(も)あし、

十日 來原君と同土屋矢之助^(ニ)行、

十四日 來原^(ニ)行、

十五日 夜來原良君見^(ニ)來訪、

十五日 三戸晋九郎^(ノ)書狀到來、金捌ケズ、岡部子楫崎陽へ修行願出ス、來原崎陽^(ニ)被^(レ)交候人、通辭十八

才名村源一郎、越州門田彦之允・大谷徳二郎、土州高村權太郎、長崎西組山本惣一郎、唐津中澤謙作、柳川鳴瀬啓

藏、馬関御手洗問屋武兵衛、急事ハ廿四時ニ^(ノ)長崎^(ニ)達ス、薩州・土州・宇和嶋^(ノ)御國^(ニ)飛脚來ルト道路之風説

有^(レ)之、田坂四方藏^(ノ)書狀到來、自吟一首有^(レ)之、おしからぬ命の惜や玉銚の道し有る世^(ニ)立歸るまで、薩州公

之御逝去ハ虚事と申事風説有^(レ)之、

安政五戊午十一月 江邸 御警衛ト^(ノ)被^(レ)差登^(ニ)候人数、杉昌九郎・黒田清之助・河野佐太郎・大庭豊熊・見玉吉・石津

常・財滿新・宍道寛・能美吉・田坂茂十・粟屋虎・祖式龜、

同十一月 朝鮮漁夫三嶋郡の漂來、

同十一月廿九日 來原良藏の一書一通、正木市太郎の託贈、來原在長崎、

廿九日 早朝杉藏來、吉田先生嚴囚蟄居之由、井上與四郎翁曰、書生之嘔々有害政道也、因而先生嚴囚之議興、

傾別杯婦、富永嚴禁之論起、吉田栄太良多才多弁、故ニ必事ニ害有ンヲ以テ先生絶交、有志皆同、英太ハ実

ニ傑物也、

十二月五日 夜初更岡部富太・福原又四來訪、對吟到三更益盛、時戶外忽有呼、曰、八十・八十、應曰誰也、曰、

英太也、彌二也、忠三也、因問有ニ何事乎、先生入牢之命下矣、三人愕然、且慍、曰、我輩從是直可三熱往、公

等則館往矣、既而先三人去、我輩三人將至松下、道又逢婦三人於館、問、小田村先生・赤川淡水如何、曰、皆

不在也、至松下塾、先松嶋・杉藏在、自是議論沸騰傾酒數杯而未醉也、瑞益曰、公等速傾二三杯、往而可

詰責周布政之助矣、先生高吟枋得之詩且東湖之詩、一坐皆和、愉快亦甚矣、先生當今第一流之卓傑也、我輩師

事亦面目矣、先生慨然曰、吾投獄也、於吾実面目也矣、吾入局而長州勤王之事去、則君公之耻辱如之何、豈

不憂乎、一坐義氣以一言益振、則奮然皆起、將往於周布、先生又吟壯士一去又不歸句、且送戶外曰、似

義士報讎夜、又似易水別也、時夜將四更、雪白風寒、壯士意氣飄々踏破滿街冰、八ッ時周布ノ門ヲ叩キ、來ルヲ

通ス、傑出テ曰留守病氣ト、是非面會致スベシト云、又入テ其事ヲ通ズ、主人又辞ス、故ニ余断然曰、推而可

レ到ニ病床ニ矣、僕又曰、暫可レ待焉、因而少待、又出曰、主人実ハ他行不在ニ家也矣ト、然可レ待ニ歸宅ト、皆上

レ坐、就中、余訪ニ中村道太、々々曰、夕在ニ家、定る足下之勢ニ窮シタルナルベシト、而暫論ニ時事ニ復反、周布ニ

栗屋半來テ内ニ在、因テ其事ヲ通シ、退而訪ニ井上與四郎、亦病氣、不レ得ニ面談、逢ニ壯太、反復時事ヲ論シ、茫然

出門、先レ是始面會壯太、即曰、今自内藤圓活ニ書來、公等持來否、吾輩對曰、否、政府之動搖以レ是可知矣、

井上門外逢ニ宇野忠工門、忠工福原又四郎ニ謂云、汝ニ有レ可議、急ニ歸リ來レ、因る欺キ去、松下塾エ行、

始當テ道太ニ聞ク、晚ニ御用所ニテ、足下ト杉藏者ト少ク御聞込ノ事有テ聞クト、

井上氏ノ門ヲ出ルヤ、同志謀曰、是ヨリ内藤翁ヲ訪ヒ、夫ヨリ行相益彈エ行、結局付ズバ直ニ毛利雲州ヲ詰責スベ

シト、議論定ルトモ実ニ肌寒不可レ堪、故ニ松下エ行喫飯而行ント、婦塾テ議論未了内ニ、瑞益ハ書來、故ニ余

岡部・作間ト同松嶋エ行、前夜ノ議ヲ咄ス、中ニ家君來ラル、因問、何事ナルヤト、家君曰、前夜内藤ヨリ書ヲ遣

曰、汝輩ノ粗暴ヲ戒ムベシト、夫ヨリ杉エ婦リシ所、赤川淡水來曰、麻田実ニ罪ナシ、先生ノ投獄ハ不レ得レ已ナリ

ト、因云、吾輩ヨリ願書出スベシト、淡水曰、是誠ニ惡シ、上書且先生之事杯論候ハ俗論ヲ扶助スルナリ、必勿

レ用、因而吾輩慘然而止矣、各家ニ帰慎被ニ申付ニ候事、

六日 夜又々小田村氏ハ書來、余父子へ面會致度事有ナリト、家君見レ行候處、爲レ指論モナシ、淡水・瑞益心配ニ

る先生入獄不ニ相成ニ候様ニ致度段政府へ申入候様、右ニ付議論有レ之候よし、

七日 晴、蟄居無レ事、

八日 蟄居無事、先生ノ書來、淡水・瑞益之心配遂不被_レ行、先生投獄相決矣、日下玄瑞_カ書到來之段申來、吾輩不_レ周旋_ニヲ尤ムル由、西洋陣之申來、水戸藩住谷某・大胡隼藏・令壹人、以上三人亡命、吾藩_カ越藩ケエ加勢乞ニ來由、

九日 晴、赤川淡水・松嶋瑞益來訪、置酒愉快極矣、二人數麻田之事ヲ稱ス、果然國家之幸不_レ過_レ之也矣、重留氏來訪、小川氏同斷、周布麻田要路ニ在テ樞密ヲ書生ニ問其罪又義卿且書生と同し、因_テ御斷リヲ出シ退役ヲ願フト、麻田実ニ有_レ爲ハ此國家存亡ノ時ニ當リ、身去レハ國事共ニ去ルヲ知リナガラ、如何ニ俗論沸騰ト云_レ、御前議ノ時ニ斷然 君公ニ此事ヲ申上ゲ、自分思付タル忠義ヲ尽シ、死ヲ義ヲ唱_テモザル、俗物ノ邪論國ヲ誤リ 君ヲ辱ル人ニ對シ、謙遜持重ノ言葉ヲ出シ候ハ、其職ニ在テ其職ヲ尽ス能ハズト云_レベキカ、麻田壹人ニテ上ノ正義ヲ維持スルト云_レ尤以疑ワシ、○此要路ニアリ且屢 君公ト言ヲ接ユ、斷然正義ヲ立貫、實ニ國害アル賊臣ヲ除クベシ、固_ク邪人之誹謗ハ起ルベケレドモ、精忠苦節論正義之士アリ、周布氏ニ徒死ハサセヌナリ、君公ハ明君ナリ、忠義ノ正義ヲ何トノカ拒ミ賜フベキヤ、麻田ハ死ヲ怖ル、人ナリ、所以ハ、吾此職ヲ去ル國事去ルナリ、汝等如何思フト、吾ニ於テ議論如此此ト、一々ニ正義ヲ言立テ鳴程ト思ハセ有志ノ士ヲ怯カスナリ、上エハ上エテ思ハセ振ヲ掛置、ケ様ニ而上下ノ望ヲ屬シ置キ、退役シテ上下ヨリ取ラル、命ヲ全クスル_レニテハナキカ、一俗物奸臣_ハ自分ノ思フ様ニ正論ニ歸シ、是ニテ彌何モ障リナシト云様ニ而後事ナサントスルハ百年待テモナキ_ニナラン、夫吾カ正義通_ニ行ナワル、井ハ江家曜クベシ、若正義立ズ、小人ノ罪ニカ、リ、君公ノ怒リニ觸テ割腹スル_レ井ハ、

身ハ忠義ノ名全ク、國威ハ不_レ振共、國恥ハ殘ル_レ、御首尾ノ_レハ決_テアルマジ、

十日 夕小田村伊之助來訪、役人交代ヲサセ候論ヲ益彈相エ云入_レ候論有_レ之候處、成否如何ヲ相謀ント來、家君曰、萬々無_レ成、今少シ御深思被_レ為_レ在候様ニ申候事

十一日 晴、無_レ事、

十二日 晴雨相半、夜李家文厚來快談、頗泄_ニ憤懣_一矣、且惠_ニ於_二餅_一、幾調_レ飢、

十三日 無_レ事、先生ヨリ書來、

十四日 雨、先生ヨリ書來ル、昨夜小田村先生罪名ノ儀ニ付頗周旋、兩政府不能_レ開_ニ口_一候由、京師ヨリ仙吉_同帰ル、仙吉曰、山縣半藏十一月十三四日比ヨリ上京、廿五日ニ仙吉同船大阪エ下リ、小幡藏人同居之由、姓名ハ變居候、尤江戸方御内用ヲ蒙リ居候ニ付、前田・中村_カどへ必話吳間布様との事、小田村先生、寅二是ヲ以彌行相府之偽心被_レ察候、定_テ是輩ノ蹤跡ヲ探索為_レ仕候便利ニ遣事ナランカ、甚不平ニ御座候、松陰先生、小田村、同日家君へ江戸ヨリノ書狀到來、肥後侯昇進萬々御首尾能様子_ニ、宇和島御隱居、十二月中旬來嶋又兵衛・桂小五郎歸國、

廿二日 時山直八來風説 東海道宮之宿ニ飛脚值候由、水戸藩京師留守居親子・二條様太夫壹人・近衛様太夫壹人・外ニ儒者壹人・池内大学右之人数つめ乗物ニ東下之由、警固ハ鎗之室もつし居候由、九條閔白再役、今月朔日將軍宣下相濟、一赤禰武人連_レ歸_リ候由、一土州侯彌御隱居と申事、右之通直八ニ聞_レ之、

過日井上與四郎発足、近日周布政之助出足之由、雲州廿五日発ス、

廿八日 和作京師より帰ル、傳之助も同様、右兩人共ニ嚴囚、大原策露顕、

廿五日 夕方市川茂太郎來訪、同夜密ニ先生へ往訪毛氈(カ)一枚ヲ餞ス、又先生ト密ニ英太ヲ往訪、初鷄帰(カ)家、

廿六日 先生登獄、適見ニ窓下、哀喜交到矣、

廿九日 晴、井上犀吉來訪、

晦日 無事、俗客數來、夕方支配證人境與三兵衛の家父に相對、手紙來、家君病氣適職兼、清太來訪ニ附相頼、

屏居御免之案下ル、夜中安永直助脇差ヲ調持來、價四十六匁三分内金二方渡ス、

安政六未

正月元日 賀、朝飯後昨夜之脇差ヲ見候処鞘ニ疵有レ之候、何人の為ス所ヲ知ラズ、徒ニ怒ノミ、

二日 三日 四日 五日無レ事、

六日 自ニ獄中ニ松陰先生之書至、和作・傳之輔京師失策浩嘆、大原エ手ヲ下スノ策申來、仙吉・徳民両生ヲ亡命サ

スルノ策、

七日 夕小田原先生ニ遇、途中聞レ之、水府生二人來、政府直逐候由不堪ニ浩嘆、

八日 自ニ獄中ニ小田エ、書至云、水府生エ面會否、杉藏へ淡水往日、水府生兩人來ル、而竹田伊賀(武田耕雲著)ヨリ添書、大

臣且政府エ添書、松陰先生エモ同断、而山縣與一兵衛旅宿ニ面會、遂無ニ一議論ニ而去ラシム、去ル二日淡水。

杉三エ告、杉藏憤怒衝レ上、欲レ逐レ之、余數輩以レ釀ニ後患ニ強ク留ム、桂氏ヲ訪、反復論ニ此事ニ亦然謀ル、淡水ハ政
府ノ赤狗子歟、

九日 赤川氏ヲ訪、遇ハズ、夕福原越後ニ佐世ニ會ス、越後亦尋常人、共ニ議スルニ足ラズ、

(萩市前原彦八氏藏 校合濟)

(後略)

入江
杉藏
投獄日記

杉藏投獄日記

解題并凡例

- 一、入江杉藏は安政六年二月、松陰の伏見要駕策一件から遂に罪を獲て、同廿八日萩岩倉獄揚屋に投獄され、翌萬延元年閏三月廿日免されて出獄した、この経緯から獄中の事を書いたものを集めたものを投獄日記と云ふ、弟野村靖の命名したものである、第一は「日記」にして二月廿三日より二十八日迄、即ち投獄前の事を和文で記してある、これは皆松陰との関係が密接であるから全部掲げる事にした、
- 一、第二の累囚觸耳録と云ふものがある、所謂獄中にて聞いた風説の一つ書きである、僅に半紙一枚、別に松陰関係のものはないから略した、
- 一、第三は揚屋日乗で、萬延元年正月十八日に始まり閏三月十八日に及んで居る、全文漢文であつて、その内より松陰及び松下村塾関係のものを抄録した、
- 一、附録は安政五年十月入江が江戸より歸國途中の日記である、簡單なれども京都に立寄つて大原三位に謁し何事かを計畫してゐることや、在京阪人士の名を知るには極めて確實なる資料である、

(委員 廣瀬豊)

日記

二月廿三日 半晴、余此前二日頃ヨリ^(種カ)種物全愈セリ、世上ノ奔走ヲ事トス、此日モ馳廻リ帰り晝飯ヲ親子一同ニ認メタリ、和作竊ニ余ニ謂ヤウ東駕既不可レ回、而日期甚迫ル、伏見ノ事ドフモ差置ガタシ、

正月中旬播州人大高又二郎・備前平嶋武太郎^(二カ)兩人萩ニ來リ、政府ノ御役人へ對面ノ一切ニ願ヒタレ^レ不^レ相^レ搦、余兄弟時ニ幽囚ニテ對面ハ出來ザレ^レ小田村先生其外諸友ハ滯留ノ杯色々心配シ玉ヘ^レ是モ六ケ布テ空シク歸國シ、又其節和作へ書翰ヲ殘シ置ケリ、其文ニ吾等遙ニ來レ^レ誠ニ已ムヲ得サルヲ有レ^レハナリ、然ニ政府君子へ御對面不^レ相^レ搦候へハ空布婦ルナリ、御參府ノ節ヲ待伏見ニテ御願可^レ仕トイフ文言アリ、又諸友へモ重疊其事ヲ言置タル由、其後諸友モ大高輩ノ杯色々苦心シテ居ル内、松陰先生ノ謙遜策政府へ建白相成候へ^レ行ハレズ^(シ脱カ)テ下リ、又所詮政府ニハ不審ニ思イ玉フ様子ノ由ニ付和作へ殘置タル書翰ヲ小田村先生ヨリ政府へ上ラレ、頻リニ謙遜ノ策ヲ主張ナリタレ^レ終ニ行ハレ^レス、先生ノ謙遜ニ行フヲ願玉ヘ^レ是ヲ允ズ、諸友モ洵々ト苦心シテ居ル計ニテ誰サヘ身ニ受テ^(ズ)按ル者ハナシ

大高・平嶋書翰ヲ私へ殘シ置タレ^レハ此方ノ荷ニナリ居ルナリ、サレハトテ今是ト云フ妙策モナケレト伏見テ現在ニ要スルト云置タルヲ知ツ、安座シテハ居レ^レマイ、故ニ往テ窺ミルヘシ、模様ニ因テハ亦力ノ効シヤウモアルヘシ、サレ^レ届ナシニ疆ヲ出レ^レハ是非罪ヲ得ヘシ、墳墓ト老母トハ兄ニ丸テ委ヌルナリ、明日ヨリ発足スヘシ、母君ノ

驚玉ヲ懼ナリ、余曰、此事ハ誠ニ精忠ナレハ母君ヘ秘スルニ及ズ、母君聞分アルナレハ有体ヲ説テ可ナリ、余乃反覆大高ノ始末ヲ説、和作ノ心底ヲ訴フ、母君感心ノ顔色ニテ曰ヨフ、願ナシニ御国ヲ出タラ御咎ヲ蒙ロウ、余曰、此事不_レ得_レ已事ナリ、假令和作婦リテ罪ヲ獲タリモ杉藏在_レハ欠遣玉フ_コナシ、先達ヨリ云通り、杉藏是迄ノ狂妄ヲ言ス、謹テ官途ヲ志シ可_レ申ト、和作モ眞ノ忠義ナレハ天道ニ叶ヌ_コハアルマシト色々説タレハ、其譯ナレハ致方ナシ、何卒早ク婦ルヤウ物事念入候ヤウ教諭スヘシトテ允シ玉ヘリ、此日余ハ吉宮鉄ノ助ノ宿ヘ約束ニテ會シヌ、和作モ松陰先生・小田村先生杯ヘ暇乞ニ出タリ、余薄暮過ニ酒ヲ蒙リ婦レリ、和作ハ未ダ婦ラサリキ、余寢ニ就キ熟睡シテ中夜不圖醒テ和作ノ衾ヲ撫シミレハ未タ婦ラス、驚テ燭ヲ取り見レハ火燧ニ假睡シテアリ、

廿四日 牢晴、此日ハ先人ノ忌日ナリ、余長壽寺ニ詣リ墓ヲ掃除シテ婦ル、和作モ墓ヲ拜シ婦ル、佐世君長崎ヘ明朝ヲ以發程スルトテ暇ヲ告ニ來ラレタリ、別杯ヲ酌、和作微ク意ヲ明ス、佐世君婦リ玉ヒ、晝飯ヲ認、和作忽チ支度シテ行ントス、明朝迄稽留ヲ謂トモ不_レ願、昨日母君ヘ能説アレハ此日ハ何モ辞ナシ、和作笑テ復京ヲ見ルゾト云テ母君ヘ拜辞シテ去ヌ、余門ニテ影ヲ送ルニ勇シク行タリ、

廿五日 牢晴、余江向ヨリ河嶋邊懇意ノ方ヲ音信シテ回リヌ、此夜母君ノ曰、和作モ近頃剛強ニナリタリ、欠遣ハアルマイ、

廿六日 牢晴、此日河添・平安古邊奔走シ忠助方ヘ詣リ悦_レ之助_{（松樂悦之助）}ノ書翰ヲ取カヘル、夕隣家ノ請招ニ母君・壽美一同ニテ大キニ酒ヲ蒙ル、薄暮福原又四郎君小田村ノ書翰ヲ持來リ、和作ヲ尋ヌ、和作脱走ノ事ヲ初テ明ス、

廿七日 牢晴、早朝某君ヘ謁ヲ請ヒ官途ノ事ヲ願フ積ナレモ他客多ケレハ言得ス、復テ期シテ婦リヌ、又直ニ小田村先生ヲ訪フ、此日明倫官御參堂、故ニ早ク出テ玉イ對面セス、松下塾ヘ過リテモ唯一人_{（增野）}徳民寢テアリ、松洞ヘ過リ昨夜諸友ノ判断ヲ聞_{（分脱む）}ハ半途ノ由、故ニ松陰先生ヘ能聞玉ヘト言置テ婦リヌ、婦リ見レハ直_{（時山）}八來テ在リ、一二話途ニ相誘忠助ヲ訪ントス、路ニテ相失ス、余ハ傳_{（伊藤）}之助留守ヲ訪ヒ忠助ヲ訪、忠助不_レ在、婦リニ千吉ヲ過リ托_{（傳）}事ス、婦リ見レハ勸二郎來リ誘婦ヲ謂フ、直様相携出ツ、山中町ニテ小田村ニ遇フ、余ニ是非婦リテ談ル_コ有ト謂フ、勸二郎ヲ辞シ婦ル、和作脱走ヲ政府ヘ訴タル_コ初テ聞テ愕然ナリ、小田村政府ノ所置ヲ聞トテ去リヌ、致方モナキ_コ切齒シナガラ約アレハ勸二郎方ヘ詣リ、蒙_レ酒リ婦リヌ、朝ノ約アレハ直様某氏ヘ詣ル、某氏不_レ得_レ謁、婦リニ小田村ニ復遇ヘリ、小田村當惑ノ顔色ニテ余カ揚屋行ノ_コ告玉ヘリ、余曰老母ノ命ニ係ル、一人ノ母ノ命ヲ蹙テハ天地間ヘ立ヘキヤウナシ、余割服スヘシ、乍_{（山）}尔此事ハ杉藏甚タ冤ト思フナリ、保全ナル_コナラハ歎願スルト頼テ別レ婦レリ、已ニ組ヨリ人來レリ、尋テ權吉ヲ始五輩至リ揚屋入ノ命ヲ傳フ、幸ヒ小助來レリ、直様冤罪ノ事丁寧ニ説テ某氏ヘ辨ニ行テ貰タリ、然ニ母君驚號余亦情ニ不堪_{（や）}ス、因テ權吉ニ謂曰、老母誠ニ如_レ是兼テノ持病起リタレハ是ヲ見捨テ行事トウモ情ニ堪ス、是非看病ノ歎願スル故取計イ吳玉ヘ、直様願書ヲ認メリ、千吉モ來レリ、因テ甚_{（三百）}之助ト千吉トノ願書名前ニシテ權吉遠近方ヘ上レリ、此夜千吉宿シ吳タリ、余軟々不_レ能_レ睡終夜、母子ノ情極天ノ恨_{（トガ）}ノモ言ヘシ、

廿八日 早朝哀痛ノ情ヲ丁寧ニ認、和作脱走ノ主意余ノ知通り明ラカニ説テ母命ノ為メニ恩貸_{（カ）}ノ事ヲ反覆歎願シ、

一書ヲ作り、千吉ヲ以テ小田村ヘ通シ、因テ政府ヘ達シ吳玉ヲ欲ス、此日再命ノ恩意アル事ヲ待チ暮ス、実ニ泣食不レ下レ咽、冤恨ヲ自ラ知ノミ、母君ノ顔ヲ見レハ不レ覺号泣ニモ至ル、薄暮有レ命何圖看病サヘ不レ允、小田村ノ答モナシ、此夜揚屋ニ行ニ決ス、五ツ時家ヲ辞ス、余母君ニ告曰、兄弟誠不孝、先達テヨリ忠孝ヲ分チ杉藏実ニ守レ分テ尊意ヲ安ント欲レモ今ハ不レ叶、悲恨無限候、併イツレ一旦ハ誓テ尊意ヲ安ル期有スヘシ、母君曰汝カ心ハ忝ナイ、必ス安心サセテ貰ハチバナラヌ、此夜送ル者相組三輩甚之助・千吉・栄太郎ナリ、母君送リテ曰玉フヤウ、吉田先生サヘ在レ獄、汝輩此位ノ事ハアルベシ、揚屋第四舍ニ囚トナル、

揚屋日乘

日乘序

(萬延元年)

正月十八日吾友日子書至、曰、先師武教全書講録中有言、各宜作一簿詳記日々業事、可ニ以同志相切磋、余感此言、近既記日乘、兄亦宜作日乘、是以余即作揚屋日乘云、

揚屋日乘

每日凡例

余坐揚屋第九舍、舍東向、而方一間、九舍與十舍可ニ往來、又傳廊而至便所、而外郭為二圍圍、而每舍有二小窓、

余常東向坐此小窓、其日為三動作也、朝起盥嗽、被拂三摩塵、而朝拜、々訖而朝飯、又刷廊者數十遍、自是從

事、或讀書或抄錄、而午飯至食之、又從事、至晚又飯、給飯者朝午二度、晚食則食朝午之餘也、每飯出

小瓶請茶湯、晚飯後又刷廊數十遍、九一日之間、盥嗽・食事・使用或朝晚刷牙外、不復有起動之事、余是以閑

靜自喜、至夜圍圍外點燈、雖然舍中朦朧難見書、故大底暮後隣囚來談、其點竊燈、蓋成後之事耳、

十八日 晴、辰時起、盥嗽以下如例、而讀通鑑元帝紀一卷、已至午時、忽作問氏來得楚辭五冊、陳龍川文集二

冊并日下書、作問氏對晤良久而去、飯後抄先師遺翰八葉、日暮、夜竊燈讀楚辭、三更後伏、

十九日 晴、卯下剋起、盥嗽以下如例、讀智囊、午後抄先師遺翰十葉、日暮、夜竊燈讀楚辭、二更後伏、夜

寒、

廿一日 小雨雪、卯下剋起、盥嗽以下如例、讀史記、此日獄吏禁言讀、論弁頗移時、而思父來得楚辭一冊并放

翁集一冊、一二話而去、午後抄先師遺翰四五葉、而讀知囊、日暮、夜訪隣房、問国歌、而自作四章、而婦

竊燈讀史記鄭世家一篇、而伏、

(二月)

六日 曇夕雨、卯中剋起、盥嗽以下如例、讀通鑑南北齊記一冊、午後写詩史六葉、廢夜讀、終夜懷先師轉頭

至曉、自此夕雨、終夜不暫歇、

七日 雨、卯中剋起、此日氣心自不快、且頭微痛、朝拜以下多闕、作祭先師五古一篇、午後写詩史一葉、頭

痛益覺不快遂廢、夜竊燈讀通鑑一冊、三更伏、夜雨歇、

八日 曇、卯下刻起、盥嗽以下如例、讀通鑑一冊、午後寫詩史二葉、又刪村塾素讀生詩稿數卷、夜竊燈讀通鑑、而伏、

九日 快晴、卯下刻起、盥嗽以下如例、讀通鑑、午後沐浴、思父來獲先師百日祭供及日下之報書、寫詩史五葉、夜竊燈讀通鑑二十葉、余不堪睡伏、夜半雨、

十二日 晴、卯下刻起、盥嗽以下如例、詠上先師國風、又寫詩史二葉、午後寫詩史五葉、北堂來慰撫而去、夜竊燈讀韓非子、而伏、

(閏三月)

三日 丁未晴、例刻起、如例讀漢書、午後寫孫子評註十葉、此日思父來對晤良久、談心情、揮涕而去、夜作詩三章、國風一章、而伏、

七日 子雨、例刻起、如例讀漢書、午後作小文一本、又評点村塾詩稿、夜廢讀、

十二日 丁巳雨、例刻起、如例讀後漢書、北堂來、告以先師罪狀來于江戶、吾曹之結局亦將在近日、午後又讀漢書、夜廢讀、

(東京市入江貫一氏藏 校合濟齋)

附錄

戊午冬歸國行記

十月四日 有飛脚之命、(當時在江戶)

同五日 裝行奔走、酌別杯、

六日 辰中刻辭邸、石田氏同行也、戶塚藤澤之交日暮、過高輪有二小詩思、

七日 至函山湯本、天明、至吉原、日暮、見富岳有二小詩思、

八日 至府中、天明、掛川、袋井之交日暮、寅上刻至舞坂、咭飯而乘船、

九日 船達新井、天明、此日投馬子以錢、飛走不休、至池鯉鮒驛、日暮、夜卯刻至宮驛、舍于一圓樓、晝日之飛走以大疲故也、

十日 辰刻乘船、晝眠大塾、夢趣不欲覺也、未下刻達桑名、又走行至庄野石藥師之交暮、

十一日 至土山、天明、申中刻至大津、選遁于吉宮氏、有田氏、酌別杯、石田氏自是直至伏見、吾京師行、期會大坂、相辭、吉宮、有田還東武者、三方辭而去、此夜尋船越氏、子中刻至京師邸、選遁弟及塩見氏、岡氏、宗樂氏、談話終夜、

十二日 辰中刻與宗樂、尋某公、見恩信忠義之意、而吾胸臆感動、戌刻辭而去、別弟及諸子、走行、亥刻至伏見、遇伊藤氏、田原氏與松本鎌三郎、松本氏參州刈屋藩也、子刻乘淀舟、

十三日 天明船達大坂會石田氏、至邸辨事歸、又遇芳野鎮藏者、會松本鎌三郎處密議、松本先吾去伏見也、逢福原清助、子戊刻訣石田氏、石氏自是還東武也、子刻乘富海船、老爺二人以期先乘在也、

十四日 曉天出船海口、乘東嵐乘帆、辰中刻已過兵庫矣、

(東京市入江貫一氏藏 校合濟)

入江揚屋詩稿
杉藏

解題并凡例

一、入江杉藏(贈正四位入江九一)は、松陰に面接する事僅かに一ヶ月を出でないにも拘らず、その師に傾倒し、その志に感激して死生を共にせんとし、遂に事成らずして松陰に先立たれてからは、一意先師の志を繼ぐに汲々たりしもの、その態度の純真熱烈なる、松門中にもこの人に比すべきものは見當らない、さればその詩歌の如き、誠に稀に見る情緒の纏綿たるものがある、從來世上にあらはれて居るものは、入江の原作に他人の添削を加ふる事甚だ過酷にして、遂に原形を損じたるものが少くないやうである、よりにて今回は特に入江の原作を掲げその當時の真情を味はひ得るやうにした、

一、ここに掲ぐるものは、安政六年二月廿八日已來、岩倉獄揚屋に在獄中の詩歌より、松陰に關するものを摘記したるものである、

一、これ等の詩歌の幾つかは、天野御民著防長正氣集や、野村靖著追懷錄等に掲げられて居る、

(委員 廣瀬豊)

揚屋詩稿

(監カ)
徐遮

一思_二母命_一不堪_レ悲、 方寸鬼籌忽亂絲、 恩義何暇謀_二報効_一、 趨_二歸_一膝下_二為_二痴兒_一、

感懷

庸劣無_二奇志_一、 况又生_二寒門_一、 少已_二為_二胥徒_一、 衣食事走奔、(以下略、第四卷詩文評參照)

答_二松陰師_一

午睡欲_レ催初、 忽然來_二鯉魚_一、 析_レ緘先展舒、 此時意陶如、 應答如_二景響_一、 向_レ予蘊不_レ餘、 能獲_二吾中心_一、
知_レ吾過_二於余_一、 神情交相通、 或笑或歎歎、 久嗟_レ乏_二知己_一、 今日實有_レ餘、 頗是向_二世上_一、 逐馳心遂虛、
朝暮思_二德音_一、 使_二人嘆_二索居_一、

五月十一日獄吏禁_レ声讀論弁、語相犯、不堪_二憤怒_一、終日寐不_レ起、乃作

愚漢忌_レ吾日、 讀書何為_レ声、 外聞殊不_レ宜、 牢獄却如_レ費、 吾輩守_レ獄者、 甚是不安情、 吁無情愚漢、
復使_二吾添_レ淚、 抑是四尺身、 如何萃_二妒嫉_一、 悔憫共不_レ少、 憂心是有_レ悴、 嗟咨吾兄弟、 忠孝共貽蹟、
恩德俱未_レ報、 安坐愧_二飲食_一、 勞_レ母又擾_レ公、 煖飽何忍_レ睡、 聊把_二古人書_一、 悲憤欲_レ激_レ類、 類囚感_二一

揚屋詩稿

四二五

人、報恩亦一事、是吾耿耿心、今日一寸志、愚漢實無情、告之恬無意、獨抱滿胸憤、掩泣而蒙

送松陰師東行

久唱尊攘一只此行、(以下略、第九卷松陰先生東行送別詩歌集參照)

聞松陰師有東行

梅雨陰々晝昏昏、(以下略、第四卷詩文評參照)

已告別後感慨無窮

誰還泣傳舍、(以下略、第四卷詩文評參照)

廿九日得將上輿留別、步瑤韻

別離五日心惘如、忽得臨行留我書、揚屋野山相思去、今宵何處夢於輿

先生留賜扇面一枝、有坡公楹詩、先生曰、有人贈二枝、今轉贈一枝、其一則吾把以上輿、

臨發贈吾扇一枝、直根不曲東坡詩、寄言把一上輿去、夏日使二人長相思、

懷師因憶金子生

耽視欲窮五大州、可憐壯志空歸囚、幽天知否猛回士、今日復為關左遊、

作問君懷先生国歌有真情、因其意作絕

臣節元來難不辭、上輿微笑一無詞、憶君幾歲淹關左、長寂巴城梅雨時、

遙寄松陰師、步其見寄堀江氏韻、時間水戸安嶋氏以下賜上死、故中間亦及之

別後不忘兮、吾懷夫男兒、佇望誠稱願、忽傳金玉詞、因知益多福、群士相共隨、東房與西竄、

相對多猛獍、最歛刀陽士、效椎欲有為、大事雖不遂、忠義天地知、自首已就縛、戮死固不辭、

獨哀二士命、終為疫癘罹、刀陽今度事、天下泣壯悲、豈惜忠臣殺、恐為國家衰、奸賊古今同、

隆汙亦不違、秋風更蕭瑟、孤囚將誰依、西土稱門望、吾曹愧可思、冉冉老將至、滄雪未

期、(第六卷三六、八頁參照)

聞松陰師訃十一月廿一日

別時相共訣情裁、聞訃一驚難已哉、戊午春宵千載永、櫻庭占步闕西魁、

嗟君不負知、美矣畢其義、思莫愧吾師、蓋棺非容易、

國歌草

吾師は別きて後余りも心の傷しけれは思父も寄々る

いかよせん別ましのちの吾涙君は袂は拭こそをき

廿七日國界を出給ふらんと思へは数々の感あらんと想つ、

小瀬川や安藝と周防の國界今をりきりと思ひ渡らん

七日兵庫ゆかりあらんと思ひぐれハ

けの国乃兵庫の駅は寐る夜半ハ夢数々と思ひやらる、

九日十日伏見當りと思ひぐれハ

今日ぬしみ頻は去年を思ひつゝ都の方を拜(カ)て行らん

吾師の旅の中より風月集てふ古きうゝ集る本を送り賜ぐれハ

嬉しさよ別るゝとても心をハむるしの人ハ照し見よとぞ

生き死の別きの旅は此書を送る心のそこも知らまづ

伯兮*乃こゝろを讀とて

*伯兮即ち杉梅太郎である

黒髪乃結き解ん心を君も東は出ませしより

十一月廿一日松陰師の訃を聞儀、よめる

別るとき今をりきりと思ひしは東風吹そうらめしき哉

先師の靈前は奉るとてよみぐる二三首(カ)

殊更は愛られし身はいりません知られし野花色を交まし

魂の神とありあは知らるらん世のある末はいり、あるへき

ぬるぐれとむらし清水ハ忘れ年と濁りし後ハ誰も汲まし

世のことと因りて先師を懐ふ

慕しやうき世を出ていよしへの賢き人の列は入しを

忘まんと思へといつか忘るへき世のうき度ハ君を思ひて

二月十七日夜先師を夢む

相逢ていさかさらんと思ふ間ハ夢覚まれハ世をそ隔てし

(東京市入江貫一氏藏 校合済慶)

久坂
玄瑞
九
奴
日
記

解題并凡例

一、久坂玄瑞の九俣日記は、安政六年六月一日に始まり、同九月六日に至る、松陰東送後の松下村塾及び門弟往來の状況を記す事極めて明細である、
 一、表紙には左の通り書いてある、

九俣日記

他山録

讀書録曰、雖數十年務學之功、苟有二日之間、則前功尽棄、故曰、為山九俣功虧一簣、

五月廿五日作、六月十日追懷松陰先生、聞江戶報有感、

(委員 廣瀬豊)

安政己未六月

九俣日記

(久坂在萩明倫館内卷)

江月齋日記

T A A K 日 課

六月朔 霖雨始霽、孫子寫字十二葉、(繼帖)口羽會談、通鑑唐高宗紀四十葉、又讀二月性詩稿、○世民出尉遲敬德於囚

中、甚為用_レ人之法、蘇威事王世充、死年八十二、胡氏曰、言老死不_レ如_二早夭_一、

二日 晴、孫子寫字五葉、午後吉松講、孫子軍形兵勢篇、會者、(南龜五郎山根武次郎作間昌昭守長與カ)山縣小柳南・山根・作間・守長・山縣諸子也、夜婦、習_二讀文

典_二二過_一、是日率_二業前編始及後篇_一、

三日 晴、孫子寫字二十七葉、文典習讀數過、偶見_二澹水_一、曰、聞水戶會澤先生亦就_レ縛、真偽未_レ可知也、是日西

洋學開講、浦太夫及俗有司至、

四日 晴、曉起上_三保福寺_一、掃_二父母兄墓_一、孫子寫字五葉卒業焉、文典習讀五回、是日午後雨至、竹氣襲_レ坐、

五日 雨、閱_二舊抄書_一、將_レ編_二免饑筆錄_一、午後讀_二日本外史_一、且抄_二其弱冠以下破_レ敵能戰者五葉_一、往將_二作_レ冊以自

勵、文典習讀二過、贈_二暢夫_一簡成、松陰先生書附往、

六日 晴、讀_二妾心錄_一、不知_二何人著_一、伊勢人多氣志樓主人所_レ得而上梓、是小冊子語雖_二淺近_一、皆志士慨嘆所_レ不

得_レ已也、午後思_二父携_二子遠書及片山策_一、是日諸友更至、不_レ得_二大讀書_一也、雲州歸国、志士恂然、不知_二他日何如_一也、

廿三日 晴、終日前文典習読、不_レ少_レ讀_二漢書、

廿四日 晴、終日文典習読、夜作_二寄_レ懷_二二十一回_一詩、先生以前月二十五日_レ発、計當_二着_レ府_一也、追懷不_レ可_レ過、丑刻就_レ寢、

廿五日 晴、文典數回読、

廿六日 晴、朝子楫_・八十更至、午後口羽會読、唐高祖紀、至_二世民與_二突厥_一盟_二於便橋_一事、不_レ覺_二凜然_一、是日八十說_二長崎事_一、更慨然、前月三日交商佛朗察不_レ會_レ期、本月十二日來_レ崎焉、竟論_二時事_一及_二死生_一、口羽大論_二欠殺人殺_一、甚妙、口羽曰、人不_レ可_レ不_二騎虎_一、苟騎虎則欲_レ下_レ不得、於是大可_レ出_二死力_一也、吾恨_二勇士騎_二我於虎_一、去而不_レ顧者_上也、是日會者、佐世_・有吉_・村上也、

廿七日 晴、余窃謂、我生二十年未_レ嘗一日飢、試絶_レ食、竟自_二昨夜_一不_レ食_二片粒_一、文典習読數回、夜作_二書慨詩_一、是日熱最酷、

廿八日 晴、作_レ詩言_レ志、予之絶粒、雖未_レ及_レ知_レ飢、或足_レ解_二時情_一、因日暮少食_二糜粥_一、同姓權之助翁計、乃往弔、又過_二三上_一弔、

廿九日 晴、文典習読、是日評_二入江子遠文及山縣永安生詩稿_一、

晦日 晴、文典習読、余自_レ起_二是日記_一、已三十日、無_レ有_レ可_レ紀者、吾實愧_レ之、屈指今年亦不過_二百八十餘日_一耳、頗懼_二碌碌亦如是三十日_一也、

七月朔日 守永生及小助更至、(山縣)日史補抄_二四葉_一、文典読數回、是日雨至、近日熱酷、懼_二其雨_一、果々也、

二日 果晴、文典開講、午後吉松會、読_二孫子九變_一、(至_二廉潔_一可_レ辱、愛民可_レ煩句、予嘆)曰、用_レ兵者之狡如此者乎、

三日 雨、軍艦運用開會、少學_二器械名_一、午後與_二半井_一読_二外史豊臣氏末卷一冊_一、至_二東照公大怒_一鐘銘、亦或言_二石田治部不_レ可_レ殺、公大悟等處、余慨然曰、悟字怒字千載之下、足_レ視_二當日時情_一、片桐之忠、真田之節、實使_二人泣下沾_一襟、藤肥州亦有_レ言、不_レ辨_二論語託孤之章_一、其人非_二忠臣_一、實當日之事可_レ泣也、吾読_レ史至_二天正慶之間_一、未_レ嘗不_レ歎_二猛將豪士蜂起_一、亦未_レ嘗不_レ嘆_二忠孝氣節之士之多_一也、嗚呼豊臣之亡、死_レ節者幾十人、可_レ謂_レ不_レ愧_二彼漢季明末_一也夫、因憶、吾在_二江戸_一時、與_二越後人河本正安_一交、正安慨然以_二石田治部_一為_二忠臣_一、今熟思_レ之、以_レ史觀_レ之、治部之奸可_レ惡、然史亦粉飾_二容_一詔於德川氏、亦未_レ可_レ知耳、要_レ之自_二古豪傑之士權謀譎詐_一、不_レ有_二所謂忠臣_一也、予謂_二関原之役、自_二治部_一則公亦有_レ辭、大阪之役、公開_レ覺則吾不_レ得_レ不_レ敢議、而其償殺_二豊臣氏子_一、且至_レ毀_二豊公廟_一、何其慘怛之甚也、是夜雨甚、

四日 雷雨、枯坐無聊、因想_二昨年今日_一、幕府使_二尾水_一・越諸公屏黜、諸公実德川氏羽翼、而天下之所_レ望矣、而既如此、吾今思_レ之、不_レ覺慘然發_レ嘆、暮時上_二保福寺_一、拜_二父母兄墳_一、時少歇、

五日 雨、午未傳信錄序成、思父來、託_レ之贈_二杉藏_一、携_二八十_一・子德_一訪_二松洞_一、々々新_レ居、為_二画_二先生體_一、遂抵_二松下塾_一晚帰、聞_二之松陰先生過_二兵庫_一、吟誦自若、護卒盡服_二生平起居_一、思父之父告_レ之云、是日晚少霽、

主(午未傳信錄は入江杉藏が松陰の意を受けて作つたもので、安政五、六年頃の天下の形勢を記録したものである、半紙約八十枚、松陰蔵を去る際入江これを送りて序を求む、松陰多忙その暇なくこれを久敷に託す、第九卷雜纂参照)

六日 雨、艦砲會、藤井為主、文典教誦、寫兵學語箋八葉、是日因憶、昨年西將走京師、以是日發程、不堪感慨也、

七日 晴、諸寮學生盡外出、拭汗奔走、諸寮蕭然、甚便看書、

八日 晴、運轉術會、模寫軍艦大略、記器械名目、是日八十來、始學文典書、是日閱海域大觀、至貧院、病院、幼院、其他學問分等科、甚妙、科或主各國史書、或主守教道、或主興教化、其師儒考閱書生、頗嚴而心、余謂拒西洋諸夷者、不在大艦巨砲、而當大興教化也、是日予竊有所發明、余當不為名醫、而為神醫矣、焉投時好、以茫洋失羊哉、是大有說也、

九日 晴、吉松會、講孫子行軍地形、誦至地形將弱不嚴句、大有所嘆於今日、是日會者、南・山根・守永也、講後快談、南謂余曰、臣之諫君以死、尙有不不至者、不聽而去、固不可、百方盡力、或諷或直諫、而人君誅殺我、然後我事畢矣、南常言之、余近時悲在遠藤房卿在近我山田元欽先生事、實深悲之、今聽南之言、雖未必無議、亦喜南之志厚也、近示南以片山對策、南大喜以為我藩不可無書、南固武人、今所交竹馬友者、獨在此人耳、悲夫、

十日 晴、^(番)船三隻到羽嶋、此嶋距地方僅二里、而用楫甚勞、每隻七八人、予謂、此等船皆用內海者、不可用諸遠海、用之內海者、不如我小船、我小船一人或二人動楫、去往唯如意、而不費人力耳、然至大艦、不得模之彼耳、

* (たつらであらう)

十一日 晴、文典習誦數目、

十二日 晴、和蘭文典輪講、和作書來、

十三日 晴、夙起拜父母兄墓、巡謁親戚墓牌、是日見澹水、曰、聞平塚颯齋亦執縛、曩日所東諸太夫、往々西婦、然其案決於他日云、夜拜父兄墓、

十四日 夙拜父母兄墓、午後抵松下塾、聞先生前月廿五日着府在^(缺字)邸、未出幕府、前昨日得飛脚報小田村云、與松洞・子大・利助談、夜抵父母兄墓、婦、誦英國醫員合信氏所著造化論靈魂妙用論、論人之全體無遺、而本天守教門、雖非盡無理、其狡獪妄誕可惡也、

十五日 晴、文典習誦、暮上父母兄墓點燈、是夜月蝕、

十六日 晴、文典習誦、夜清末人渡邊・坂本二生來大談、是朝少雨、

十七日 晴、夙起澆水、文典會、午後子楫至、告學盤行書、又言去華亦決志、於此余沮曰、頃西洋學急務命下、然則區々缺舌、當滿城中也、吾惜其聖人之教墜地、忠孝之道索然也、頃日人士何其奇之趨、而迂之不安也、吾竊謂、今時之奇途無益、而今時之迂竟可恃也、子楫竟去、

十八日 夙起澆水、晴、去華・彌二更至、午後吉松會、講孫子率業焉、會者、南・山根・守永生也、借示隱憂錄於南、常陸帶於山根、頗薦誦書、二子大奮、南曰、士之事勇而已矣、九地最愉快、非惡貨也、非惡壽、令發之日淚沾襟、涕交頤、讀去凜然、將軍之事、靜以幽、正以治、予大有悅之、松陰師東行、從是竟莫使余

徒如_レ登_レ高而去_レ其梯、余徒因循可_レ愧也、

十九日 澆水、晴、午後於_二思父家_一會、讀_二講孟劄記_一、會者、佐世_{八十}・子楫・去華・子大・子德・松洞諸子也、快甚、與_二子楫_一・去華論_二蘭學_一、二子断然廢_二蘭學_一之念、將_レ讀_二聖賢之書_一、磨_二忠孝之道_一、而不_レ欲_二迂濶道德者_一也、自_レ是限以_二三四

九、往將_レ讀_二了松陰所著諸書_一、劄記雖_レ與_二近時論_一有_レ所_レ異、亦論議愷切足以_二支_三時弊_一、余亦深悲_レ養生_{（哀力）}、哀死之政

委_二於地_一、而西洋却盡_二力於病幼貧_三三院_一、近時仁義廢_レ地、上下趨_レ利、吾讀_二孟子首章_一、不_レ覺慘然、是日曉起澆水、

二十 _{（日脱力）} 朝少雨、午後晴、乘_二輕舸_一竟出_二沒城北海_一、夜訪_二檜崎_一八十二大談、_{（是日澆水）}

二十一日 晴、曉起澆水、文典習誦、作_レ贈_二暢夫_一簡、聽_レ之虎狼痢亦少流行、八十來、昨年餘毒鬱_二塞於天地_一者

歟、

二十二日 晴、澆水、文典會、暮時砲声震_レ地、欲_レ破_二關邪氣_一、自_レ是且暮發_レ砲、

二十三日 曉起澆水、

二十四日 晴、曉起澆水、午後會_二松下塾_一讀_二講孟劄記_一、會_{（者脱力）}八十、去華・彌二・子大・子楫・春軒・松洞・小岡部・利助

也、去華又有_二蘭學之志_一、又大論_レ之、又断然決_二志於漢學_一、子楫既廢_二洋學_一、又不_レ敢言_一也、

二十五日 霧、午後過_二中井_一、出_二齋所_一託_二藏書_一觀_レ之、得_二亡兄靈光齋所寫諸書_一、是日澆水、

二十六日 晴、文典習誦、午後閱_二亡兄所著諸書_一、得_レ治瘧局方及其他係_二牛痘_一諸譯書、亡兄曾譯_二新撰海上大砲書

及銃隊指揮令_一、又觀_二及牛痘諸書_一、其盡力可_レ謂_二至矣_一、又觀_二書_一醫學館事、足_レ知_二其慨_一西洋病院事、因想_二見亡兄

盛事、慘然淚下、

二十七日 晴、夙起澆水、是日 儲君駕入_レ萩、子々于旄、朝日掩映、路旁父老皆欲_二国事一新_一也、是日勞助以_二飛

脚_一、得_レ詳_二松陰師近況_一、松陰師前月二十五日着府、囚_二於麻布邸_一、本月九日出_二幕府評定所_一、乃繫_二揚屋_一、先_レ是

行政府、欲_レ使_二師無_レ所_一言、師乃請_二餓死_一塞_レ口、政府狼狽急許如_二其所言_一、政府醜態可_レ笑、

二十八日 晴、澆水、拜_二東光寺_一、抵_二村塾_一、以_二松陰師偶得_三暢夫書_一、憤懣之狀可想見、是日聞_レ之、周布與_二前田

書云、義卿大說_二幕吏_一、以_二甲寅之事及昨年來之大義_一、幕吏告_二之_三三井善右_一云、是日會者、子楫・八十・松洞・春軒・子

大_{（時山）}・直八_{（天野清三郎）}・子德_{（士力）}・清三_{（士力）}・子毅、大罵_二時人醜態_一、聞_レ之、去華又決_二志於蘭_一、子楫亦少動、

二十九日 晴、澆水、去華・子楫亦來論_二洋學_一、是日既聞_レ願_二去華入_三洋學所_一、吾亦不_レ敢論_一也、二子去_{（カ）}、既而八十

來曰、子楫云、玄瑞言亦切、然來原外叔其言固不_レ得_レ不_レ聽、吾無_レ已_二學_三蘭書_一、余大笑_レ之、○近時偷_二醫書_一、然茫

乎無_レ得亦愧、本自無_レ為也、是寫_二虎狼痢治準_一十六葉、

八月朔 晴、澆水、準治寫_二十二葉卒業焉_一、聞_二憂菴羽君懼_一流行病、驚走趨_レ之、會病症少衰少安、而歸訪_二桂小太郎

病、亦向_レ快、

二日 晴、夙起澆水、過_二前田手元_一論_二杉伯教及子遠兄弟事_一、前田亦似_二憂_一之者、曰、地政府而事不_レ諧、急當_二之

論_二行政府_一、吊_二兒玉氏喪_一、

三日 晴、夙起澆水、訪_二憂菴君病_一、聞_二少愈_一不_レ遇而歸、抵_二保福寺_一、以_二翌日丁_三慈母君七回忌辰_一、託_二誦經寺僧

而去、山根次右衛門前日計至、大愕急趨、是夜以喪禮至三更、盡哀而歸、

四日 晴、浴水、上保福寺拜三先母君墓、回顧往事、踟躕不能去、中井從兒女計至、亦往吊、入夜而歸、是日寫家兄遺著係清英通商者、未脫稿、

五日 晴、水浴、聞三口羽少愈大悅、是日儲君初賽仰德社、

六日 雨又晴、浴水、趨山根法事、是日子楫書來、報亦決志於蘭學、白井小輔歸自阿月、示清朝新聞紙及地

學正宗八冊、小輔曰、赤根忠東報曰、水府之事、係百姓憤其苛政、羣起訴之江戶而已、

七日 晴、夙起浴水、訪憂菴病、聞漸快不足患、是日得飯田正伯書、曰、六月十八日藤森恭助縛、誦地學正

宗二冊、

八日 晴、夙起被水、去華來大談、午後抵松下塾、是日以諸友不盡會、不能會誦講孟割記、至暮而歸、

九日 晴、夙起浴水、誦地學正宗二冊、

十日 晴、是日秋采、浴水、誦三才正蒙三冊卒業、是夜二更、聞憂菴君病劇、愕然直趨、徹夜窺病狀、淡水先在、盡力看護、

十一日 朝未牌、羽君竟溘然、嗚呼、吾何不幸者、十四失母、十五喪大人與兄、而別無有兄弟姊妹、後從二月

性上人而游焉、因得知松陰先生及憂菴羽君、而今上人逝、先生東、羽君亦竟溘然矣、噫、吾竟何物、號天泣倒、今不忍記之、噫々々、○羽君遺僕坂上忠介、真忠愛人也、至羽君學力日進、忠介大有力焉、忠介瘦苦骨立、

今益不忍目其狀也、是夜雷雨、

十二日 雨、灌水、枯坐無聊、偶得六合叢談讀之、稍慰悶、是日間大田間部退役、

十三日 晴、灌水、天野清三來報中井從兒罹疫疾、乃驚趨至暮時而歸、

十四日 灌、晴、訪從兒病、々々少變、

十五日 晴、地學正宗卒業、是夜月色慘慘、默坐百感如湧、灌水、

十六日 晴、訪從兒、少焉病甚迫、乃走松岡良哉、歸途不及、噫傷哉、灌水、至夜半而歸、

十七日 晴、灌水、辰牌抵保福寺、占從兒墓地、是夜葬殮、竟宿中井、

十八日 雨、水浴、滯中井、

十九日 雨、水浴、午後歸館、得閱東報、曰、有人夜斬墨夷三人於本牧而去、不知其所往、土人觀之、

刀鋒斬夷徹地、刀鋒折突地上、

二十日 水浴、晴、文典習誦、午後抵吉松、

二十一日 水浴、雨、抵中井又上保福寺、是日訪佐世、々々亦言彼閱東事果信、

二十二日 水浴、雨、抵中井、是日從兄初度法事、子致書來、得中秋歌一首、悲愴可泣、

二十三日 夙起灌水、是日文典習誦、

二十四日 晴、水浴、抵口羽、酷極寂寞、忠助之狀不忍看也、竟上羽君墓、午後抵松下塾、將梓清狂遺稿

因與諸子讀遺稿、是日暢夫書來、

二十五日 晴、水浴、文典習讀、讀三兵法、

二十六日 水浴、文典後篇卒業、和作書來、周彪論附至、至誠可泣、

二十七日 晴、夙起灌水、是日始讀原書三兵太古知幾、

二十八日 晴、水浴、午後抵松下塾、初從事於遺稿活板、會者、佐世・岡部・有吉・馬嶋・作間・彌二諸子也、是日

水浴、

二十九日 翳、先是會津人士屋鉄之助・秋月貞二郎來秋、秋月無半面、土屋嘗知之、是日將去、因與澹水送

之抵澤江、二子將遊鎮西也、是日遂同宿、談稍快、足以慰本月憂鬱之情耳、聞之二子、土州事、臘晦士

太夫盡點燈、而錢事畢者先滅燈、中夜有司有司巡視、先其未滅燈者、則出公錢償之、而他日官収之俸祿之

中、於是士太夫、片錢半縹莫借之商賈者、因權在士而不在于商也、會津之制、嗣繼之事甚嚴、苟不知文武

之一者、不能嗣統、又不得參政、且有俸者先奪之、無俸者否、祿則若初也、達文武而後復俸、有

俸者大抵小臣而非大臣也、其制要使士大夫一人無不知文武者耳、

九月朔 翳、水浴、與二人別、途遇大雨、衣袂盡濡、歸抵村塾、校活刮一版、夜歸、

二日 水浴、文典會、

三日 晴、水浴、夜文典會、是日抵村塾、收活板、

東照公曰、吾主三州、用慮于近國、主閩八州、則考東海東山北陲治亂、今治六十州、則異船治安可慮也、又嘗

有言、曰、將軍居江戸城、則鎮東夷也、然則策要害於東北可也、何向帝都、策之為哉、(江戸城無要害、乃

公之意也、)文化初魯狄掠蝦夷、都下人情大騷擾、乃令曰、遠嶋小事嘗不可驚、浮說竟不起、近時蠻船出沒

沿海、人情慣習不敢驚、偶見其帆影亦不敢言、為如可秘、然其沿海近領出戍兵、亦非可秘者、而人憚不

言、可怪夫、不堪杞憂也、然慷慨粉飾茶話談海防、是非憂國之士也、故曰、君子有憂國之心、不可有

忠國之語、(譯) 波心錄抄、

四日 晴、水浴、是日小恙、(譯) 辱臥終日、

五日 晴、是日終日村塾收活板、夙起水浴、

六日 晴、廢灌水、讀真德秀上疏、岡部・作間・守永更至、和作書來、深情可泣、白井小助叩道太論子遠事、

是日山崎計來、趨之、

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟堂)

世古
格太郎
唱義聞見錄

解題并凡例

本篇は野口勝一氏(水戸)編維新史料に掲けたる、世古格太郎(伊勢)著唱義聞見録中吉田寅次郎の抜萃である、世古は安政大獄に連坐して江戸に招致され、評定所に於いて訊問を受けたる人にして、當時松陰を見聞したりと云ふ、元より呢近の關係にあらず、只僅かに一見二聞したるのみなれば一々正鵠を得たる觀察でないことは勿論である、又この記は後年の記録で、記憶の誤も多いやうである、故に編者野口氏も亦「世古格太郎の唱義聞見録は頗る當時の状態を知るに足るべきものなり、然とも固是れ見聞に繋るを以て或は事實に誤りあるを免れず、其誤り尤甚しきは之を改削し大抵は原文を存するを主となす」と云つて居る、

然れども、當時訊問判決の光景を見聞せる人の記録としては、相當尊重すべきもので、別掲第四卷留魂録・第六卷第七七四號・第七七八號・第八一〇號、並に關係雜纂中の依田學海日記・小幡高政談等と併せ讀みて取捨宜を得ば以て誤りなきを得るであらう、

(委員 廣瀬豊)

吉田寅次郎

名は寅(次郎脱カ)、字義卿、松陰と稱す、長州の藩杉百合(土服カ)之助次男なり、其人短少にして脊かゝみ、容貌醜く色黒く、高鼻にして痘痕あり、言語甚た爽かにして形狀溫柔に見えたり、江戸に出て佐久間修理門人たり、

○嘉永癸丑(松陰が足代を訪うたのは、嘉永六年五月遊學の爲め東行の時、同年十一月長崎より再東行する時の二回である、本文の時期は誤である)の秋東武より長崎へ往とき、予か師足代翁を訪ひたり、往年も一度來訪し今度は再遊なり、其時の話に、外夷の事に付、國家の爲に非常の功を心懸け、此度は永訣に罷出たるよしをいへり、夫より長崎へ往たりしに終に音信なかりき、

(中略)

○此後國に蟄居して世に聞ゆる事もなかりしに、去る己未五月、予を關東へ護送しける人、六月歸路東海道にて、寅次郎を長州より護送するに逢たるに、輿中にて書を読み居たりしとぞ、

○同年七月九日、予二度目評定所へ出けるととき、同所門前にて殊の外立派なる黒腰の駕にて、長州の藩士大勢警固し來りける者あり、是を聞に吉田寅次郎なり、此日寅次郎始ての吟味にて、子(子)これを洩聞けるに、吟味始りし様なれと、始は何事とも慥に聞えず、其中に文通の事と思はれ、寅次郎いふには、菊池(性)へも性復致し候といへり、夫より三奉行と互に大聲にて、殊の外荒々敷爭論に及びし所、池田播州の聲にて不(不)容易儀といふ聲ありけるに、寅次郎大聲にて罵りけるは、不(不)容易儀とは私より存するなり、始水戸・尾張・越前を倒しなされたる是か誠に不(不)容易儀に候と

呼はる聲も洩たり、又池田大聲にて、何をいふとて叱りける様に聞え、吉田も亦何歎呼はりける聲するや否、直様揚り、屋申付るとあり、怪しからぬ騒ぎにて白洲へ引落し、與力同心諸所へ走り出、繩携へ行、禁めける様子なりき、
○此後十月十一日、予評定所出のとき、寅次郎も吟味ありけれと、子細を不聞、翌十二日も予と俱に吟味なりしかと子細をきかず、同十六日評定所出の時予と俱に出たり、今日口書なるに、寅次郎に讀聞かせの所、承服せさると見え、何歎申立けるに、池田播州大聲にて叱り、何違ふと申、夫より雙方甚敷大聲にて爭論あり、後予可附添の役人に聞ければ、寅次郎口書相違の旨申立、今日一人不濟、控所に出たるに、番人一人増て守りけるとなり、同月二十七日裁許の日、予目撃せるに、寅次郎は牢屋敷揚り屋より送り來り、假牢の内へ駕の儘、日下部裕之進・勝野森之丞と俱に入たり、追々呼上げになりし時、吉田三人の最後に假牢を出、上下を正し、靜に番所へ登りけるに、無程申渡し始るへき様子にて、同心十人計、警固體にて一ツの駕を假牢中より出し、白洲口に置、騒ケ敷體にて待たり、予思ふに刑に行ふ者あるへし、此時空輿の戸を開き、又假牢の戸をも開き、事を待てやかて申渡しの聲聞え、松平伯州長き申渡し有り、終に大聲にて、公儀も不憚不届の至に付死罪申附る、と聞ゆるや否、白洲騒敷、一人の囚人を下袴計にし腕を捕、二三人にして白洲口より押出し來り、誠に囚人氣息荒々敷體なりき、直に假牢に押入、立ながら本繩に縛せり、予是を視るに寅次郎なり、一人の同心寅次郎にいふ、御覺悟は宜うゴザリ升す歟と、寅次郎答に素より覺悟の事でゴザリ升す、各方にも段々御世話に相成升たといふや否、直は押出し、彼駕に押込戸をべると直様、彼同心大勢取巻、飛か如くに出行たり、跡に残りたる同心一兩人、予か駕の側にて申には、ア、惜しき者なれと是非もなき

事と歎息せり、吉田も斯死刑に處せらるへしとは思はざりしにや、彼縛る時誠に氣息荒く、切齒し、口角泡を出す如く、實に無念の顔色なりき、予か駕と假牢と隔つ事六尺計、吉田の駕は其間に置たれば、巨細に見る事を得て、心中實に悲動長大息に堪ざりし事なり、去寅年後久敷螢居せし故歟、此時は總髪になり居たり、時年三十歳なり、
○甲寅の年所著急務策あり、其篇を見しに經歷して地理をはかりしに、夷船侵入する時は泉州は平坦の地にして防く事かたく、岸和田は小藩なり、紀州大藩なれとも君幼弱にして國に人なし、加之内亂あり、頼に足らすとて、京師の危を憂憤して、これを論せり、
○庚申(高延元年)のとしに至り、何者の所爲にか、小塚原へ一夜の内に寅次郎の碑を建たりしに、吏見付て直に取拂になりしとなり、

(大阪市高梨光司氏藏活字本 校合濟重)

久坂
玄瑞
江月齋日乘

解題并凡例

一、久坂玄瑞の日記である、本編に收むるものは、(一)萬延元年一月一日より同三月一日に至る迄、(二)文久元年一月一日より同五月晦日に至る迄、(三)文久二年一月一日より同三月十九日に至る迄、以上三種の日記中より松陰に關係深き部分のみを摘録した、

一、(一)は萬延の春、久坂を盟主とせる松下村塾生の行動躍如として見るが如く、或は松陰の墓を修め、或は塾に會講し、先師追慕の情切々たるものがある、

一、(二)は始め久坂が、江戸に在りて文武を修め乍ら同志の士と頻りに往復するの状が見える、又時には小塚原回向院なる松陰の墓に參じて居る、後信濃に行きて佐久間象山を訪ふなど、鬱勃たる勤王運動の蓄積期を見るのである、

一、(三)には松陰逝き、小田村去つて以來の松下村塾は實際久坂が主宰すべきだ、然るに久坂は種々國事に奔走し、萩に落着いて居た日は甚だ少なかつた、けれども一旦萩に歸れば、名實共に松下村塾を主宰して、單に學塾の事に止まらず、必ず社友を團結して松陰の遺志を達成せんと力めて居る、この日記はこれ等を物語ることに頗る詳しいのであるが、今は已むなく割愛した、

一、以上三種の日記の刊行本としては福本椿水著「松下村塾 久坂玄瑞」中に掲げられてある、

(委員 廣瀬豊)

江月齋日乘 庚申(自萬延元年一月一日 至同閏三月一日)

(久坂在萩時 論議會)

元旦 晴、曉起盥漱、作(小神、靈二部)三絕句、山縣・品川生途至、是日紅塵填街、余坐書寮不出、膽寫小隊教練(原)十葉、

二日 雨、寫教練八葉、午後與山縣生讀新論國體上篇、是日暢夫亦至、

三日 晴、曉起、寫教練十一葉、與山縣生讀國體中下、論中引古人句云、斷而行之鬼神避之、夜讀士道要論、曰、士風不嫌如農、切戒似商、又曰、謝顯道云、克己(須)從性偏難、克處、克將去、尙書云、沈潜剛剛而克、呂東萊官箴云、勞心不如勞力、此數語余喜而抄之、原士中有武人爲大君之語、大君字雖尾藤二洲引韓人所言、以爲中府朝正號、而雨森先生及我松陰先師、嘗大論辨焉、余因惜其失於名分、

四日 雪、與山縣讀形勢虜情、曰……中略……○是日揮刀百回、夜作三問三條、將論於前田手元、(孫右衛門)

五日 大雪、午牌山縣至、共讀守禦篇、中曰……中略……夜暢夫・子大至、即携昨所作問三條、即前田門、稱病不出、掃挑燈寫教練五葉、○是日間清水圖書翁物故、爲國愛惜焉、

六日 日出雪融、與山縣讀長計新論、至此率業、篇中曰、……中略……○是日寫教練六葉、於是率業、夜訪伯教疾、遂宿、(杉梅太郎)

七日 霽、集收先師遺書、是日郵塾開講、會者、士毅・暢夫・子德・子大・仁太・德民、其他童子數輩耳、暮歸館、夜

讀武教小學講錄、

八日 風緊雪飛、講錄讀畢、余甚喜山鹿先生明於武教、而先師能講錄也、因抄其一二、曰……(中略)……余讀

講錄至女子教戒、感慨淋漓、更覺痛快、同志諸君子、其錄一本、藏諸家、○暮暢夫至、乃俱往三前田氏、論三杉

父子揚屋三人事、夜歸讀宋元明奉使抄、

九日 雪、奉使抄讀畢、……(中略)……先師輯奉使抄意、將載壬午殉難、甲申殉難二篇、紀事本末所載以為一書、後勁未

果而逝、余甚惜之、余讀此抄至洪皓三人、最有感焉、因抄之如左、……(中略)……

午後、松下塾會、講傳習錄、暮歸、朔風如刀、

十日 晴、上三保福寺掃墓田、過海潮寺謁把山羽墓、又叩一二親家賀正、夜歸讀文典、

十一日 竟日不出、閱孟子浩然章、山縣生及士剛迭來話、夜作與子遠翰、

十二日 晴、趨郵塾孟子會、暢夫有故止、頃聞、幕吏某使米利幹、以本月二日發、藩士北條源藏亦從行、余

向讀奉使抄、益恐某不能專對而辱國躰也、○是日鍊兵場始西洋銃隊、鼓聲鑿然甚嘩、余謂、立兵制最要

勵士氣、士氣不勵、兵制之竟不立也、余大有論、今不敢贅、是日揮刀百回、

十三日 快晴、博習堂開講、国相及屬吏叢蟻集、未牌過中井到郵塾而歸、子遠書翰至、暮時雲湧雨飛、及三四

更止、是日思父來、

十四日 晴、讀文典、午後渡邊平吉來話、頗說粟飯原武槌之樸實如古武士、是日揮刀朝百五十回、夕百五十回、

十五日 晴、曉起揮刀二百回、午後上三日照院、拜謁先公墳、路過三三親家賀正、夜歸讀文典、

十六日 雨、南龜五至、携至郵塾、會讀傳習錄、暢夫先在、至講色鬼貨鬼云々、大有所慨於今世、夜歸讀

文典、評提山師詩、時雨歇、提刀下、夜揮在至二百餘、

十七日 翳、趨郵塾孟子會、夜歸作送提山師游鎮西將往柳河詩、成寢、夜半聞鷄嘶起、下階揮刀、

十八日 晴、曉起揮刀、讀文典、山口人岡生來、託贈大樂源太源太郎翰、午後半井・黑瀨迭至、黑瀨曰、輒近奢侈最

甚、婦人被帽子以綿始演劇盛時、着雪駄履以今天野九郎衛門母為始、是所從浪華贈來云、又曰、聞

之人、故久芳安積云、余為三替御時、殿中盡用蒲團而不用夜着、夜着包綿製之、又曰、近有女装考者上梓、辨婦

人衣服首飾甚悉、

十九日 翳、風甚寒冽、午牌觀西洋銃陣、即趨郵塾傳習錄會、是日會者、暢夫・半井・南・作間等也、夜歸會講文

典後篇、畢揮刀二百、

廿日 晴、校清月性清狂吟稿、有坂井虎山評、曰、五古取度於漢魏歌謠、而雜以唐宋諸家耳、至亡古則、非老杜則

不可、午牌上三東光寺拜先公靈廟、而過渡邊・內藤・中嶋諸家賀正、入夜歸、膽寫鹽谷撰鈴木春山傳、

廿一日 少雪、思父携子遠翰來、守永亦至、夜會講文典後篇、畢揮刀二百、是日聞之桂右衛門、曰、米利幹

人曉起以寅卯間、夜寢以亥牌或過半時、不敢及子牌、彼聞、桂以丑寅時寢、以辰巳時起、大戒之云、

廿二日 晴、已牌文典前編會講、夜讀白鹿屯學校、將寢揮刀二百、

廿三日 晴，已牌運用術會，觀西洋画軍艦遭颶風圖，颶風如山奔濤如馬，帆裂檣傾，水夫數十人櫛列於帆桁上，結繩卷帆，桁傾則魚腹矣，余聞之，風猛帆裂則水夫累組梯上，受風而代帆，近時洋夷之堪艱忍苦，實使懦夫愧死也，午後讀白鹿屯學校，揮刀三百回，是日思父至，又評子遠詩。

廿四日 晴，讀高青邱五七古詩，甚妙，午後觀洋制銃陣，遂到村塾，婦過吉松携漢書歸，夜閱舊詩稿。

廿五日 雨，辰牌文典後篇會讀，午後讀白鹿屯學校，至夜半一就寢。

廿六日 雨，曉起揮刀，佐世八十來話，是日讀白鹿屯學校，閱文典前篇。

廿七日 晴，上保福寺掃墳，即到松下塾講孟子，會者，暢夫。八十。子大。子德。思父。直八也，夜歸讀文典，揮刀三百，是日先師忌日。

廿八日 晴，朝文典會講，午後暢夫來，與謁山田復軒先生墓，即過石工某託先師墓，遂到暢夫家，猶崎彌八及彌二來焉，入夜歸，讀文典。

廿九日 晴，讀原書白鹿屯學校，未牌日暖，與同寮下階角抵，夜讀文典，作詩二首。

晦日 晴，讀白鹿屯學校，午牌到村塾，謀先師築墳事，會者，清太。八十。子楫。子大。子德。思父。松洞。德民。直

八等也，入夜歸，抄高青邱詩醇，……(下略)

二月朔日 晴，讀白鹿屯學校，子大至，託贈賓聊翰，午後與同寮角力，夜讀文典，訪暢夫，至戌牌歸。

二日 晴，讀文典，午牌到村塾，輪講孟子，至之平陸謂太夫曰章，余大有慨於今世，肉食不知罪也。

是日會者，暢夫。八十。子大也，入夜歸。

三日 晴，會講文典，未牌暢夫至，即俱抵玉江訪時山直八，歸路觀棋，婦館日未至山，讀文典，夜揮刀三百，與同寮角力。

四日 晴，會講文典，午後到村塾，暢夫。春軒。八十至，夜歸，讀竹堂著外國詠史三十一首，錄其十一，……(下略)

五日 晴，讀文典，午後讀芳洲口授，……(中略)……夜與同寮講孫子始計篇。

六日 雨，讀文典，申牌子大至報賓聊來塾，乃伴暢夫至村塾，賓聊乃去，入夜歸。

七日 雨，是日當先師百日辰，乃至杉，同諸子收先師髮髮，是日會者，賓聊。清太。八十。暢夫。子楫。去華。子

德。子大。思父。松洞。德民。清三。直八等也，夜與賓聊談。

八日 晴，與賓聊談，至申牌歸館，八十。兵部平來話，頃聞，前月某日有人斬綱二郎於橫濱，不知何所之，

綱二郎紀州之產，十年前漂流英吉利，受彼官着彼服而來者，聞北條源藏亦曾見綱二郎於

與去年七月斬夷三人於橫濱者，並可以垂不朽矣，夷狄亦應寒慄也。

九日 晴，讀利蘭土人身窮理，是日暢夫。龜五。直八。思父迭至，夜與同寮講孫子作戰，至資用因敵處，

大有憤於洋夷點策也，會畢，寫墟屋撰川西士龍墓表，聞鷄就寢，風雨甚劇。

十日 雨，謄寫雨森芳洲先生傳松本寒綠碑，未牌訪中井，至暮歸，讀文典，揮刀二百，是日南龜五携文稿

至，○寫文天祥詩，……(下略)

十一日 雨、寫_三函洲遺稿序、下斗米將真傳、藤田東湖先生所撰讀_三文典、揮_三刀二百、

十二日 霧、松洞來話、曰、判金直躍騰至_レ當_三金壹兩貳步、恐幕吏收_レ之鑄_三換惡金_二也、已牌會_三講文典_一、至_三午牌_一、

即赴_三村塾_一、與_三佐世_一、彌_二子大_一、活_三刷清狂吟稿_一、夜歸讀_三文典_一、聞、政之助周布轉_三行相_一、萬里助內藤圓活遷_三侍御吏_一、與四郎井上老

猿為_三銃陣總監_一、痛楚長井亦_三二三日_一前歸_レ國、

十三日 雨、寫_三義夫六松碑_一、讀_三閱二十一回叢書_一、……(下略)

十四日 雨、朝開_三講文典_一、申牌與_三同寮_一讀_三文典_一、至_三夜半_一罷、月光如_レ炬、即評_三守永詩若干首_一、生今年十八、頗

有_三才氣_一、其與_三某同衾而宿_一、詩曰、同衾一宿舊相知、夜半荒鷄聲甚奇、天下久無_レ錫_レ枕事、舟中擊_レ楫定何時、余錄_レ此將_三以檢_三其他日_一、

十五日 雨挾_レ雪、與_三同寮諸子_一會_三講孫子謀攻_一、申時思父至、携_三宮城直藏文_一、至_レ夜間_三先師墓石成_一、即與_三暢夫_一、

子楫_二至_三村塾_一、_二更_一、時雨歇月明、是日聞、小倉尙藏向_レ罷_三明倫館學頭_一、飯田猪之助代_レ之、又聞、昨撰_三五十名_一習_三洋陣_一、彌右衛門、謙介、勝之進守永門柱_一、阿座上_レ等稱_レ病不出、議者曰、上之所_レ好、下有_レ甚焉、釣_レ名綱_レ利之徒、紛_レ々蠅集、恨_レ下其學_三洋陣_一之晚也、甚者穿_三筒袖_一着_レ皮襪、其與_三西洋夷_一異者、髮未_レ辨、眼未_レ紫耳、捨_レ短取_レ長、固時勢之所_レ不得_レ已、然趨_レ新投_レ奇、廉耻之風、索然拂_レ地矣、則夫桂丈助等之不出、自有_レ所_レ可_レ恃焉、

十六日 雨、評_三作間正之助詩_一、讀_三文典_一、南龜五來話、曰、武場寂寞、擊劍開槍者、僅_レ可_レ數耳、

十七日 霧、會_三讀文典_一、午後至_三村塾_一、活_三刷清狂吟稿_一、會者、杉梅太郎修道_一、思父_一、子大_一、子德_一、松洞等也、竟宿、

十八日 雨、朝婦觀_三洋陣_一、婦讀_三甲斐山縣大貳先生所_レ著柳子新論_一、甚快、有_三正名_一得一_一、人文_一、大体_一、文武_一、天民_一、編

民_一、勸士_一、安民_一、守業_一、通貨_一、利害_一、富強等十三篇、

十九日 雨、文典後篇會讀、

二十日 雨、朝讀_三文典_一、午後趨_三村塾_一、與_三作間_一、此三郎、市之允、義利山田_一、佐々部藤野_一三生_一謀_三南郡游_一、暮歸、

廿一日 曉發至_三鹿脊坂_一、與_三三生_一會、至_三連瀧_一、佐々部午飯、申牌達_三山口_一、訪_三賓卿_一不在、竟投_三湯田_一浴_三溫泉_一、夜

耕次郎岡生至、是日雨霽日融、

廿一日 二九辰牌發_三湯田_一、五里所至_三團訪_一大樂源太郎、源太幽囚鋒銳如_レ舊、談論頗快、得_三村松藤吉郎_一、缺字……傳_一而

去、過_三岩淵_一訪_三孝婦石家_一、石今茲七十二、蒼顏白髮至誠動_レ人、竟去、余謂_三三生_一曰、彼南郡一匹婦耳、而公屢賜_三金穀_一、或親顧_三其廬_一、或馳_レ使傳_レ旨、且九州諸侯方_三東觀_一、或出_レ金賜_レ之、而天下竟_三忠臣孝子_一者、誰不知_三石之名_一哉、是至誠貫_三日月_一者非耶、三生然_レ之、路至_三毛割_一日暮、夜行_三二里_一歸_三湯田_一、路會_三賓卿_一訪_三余_一、婦立談竟別、浴_三溫泉_一、是日晴、

廿三日 霧、岡生携_三市川玄伯傳孝子_一、缺字傳_一、缺字傳_一、未牌發_三湯田_一、與_三三生_一別、三生將_レ歸_レ萩、余取_三路於

篠見_一、行數里、雨至、夜初更達_三生雲_一、宿_三大谷氏樂山亭_一、

廿四日 雨、滯_三生雲_一、讀_三文典略解_一、

廿五日 雨、又滯、作_三詩三首_一、

廿六日 又滯，是日雨甚，余少恙。

廿七日 雨，是日亡兄天籟先生七回忌辰也，招僧讀經，以其靈牌在大谷氏也。

廿八日 雨歇，鶯語婉轉乃起，辭大谷氏至上村，訪孝女隣家，樵去不在，作詩而去，竟歸秋。

廿九日 雨，讀文典，八十。暢夫至，歲月蛇走不可抑遏，今年亦玩過六十日，而碌々無爲，之可愧耳。

三月朔 雨，讀文典。

二日 翳，文典會講，午後到村塾講孟子，至龍斷章，余謂諸子曰，何似今之人之甚也，書生俗吏相黨相狎，得於此而又將求於彼，諸子大笑，從是稱罔利者以龍斷云，暮歸，讀文典。

三日 晴，午後到村塾，與諸子會讀外史毛利氏，至僧惠瓊事，子大曰，古之惠瓊，即今之大赤狗也。

四日 翳，曉起至保福寺，掃先考墓，是日七回忌辰也，不得回顧往事，是日轉居第七舍。

五日 晴，子大八十至，午後少恙，就尊，暢夫思父亦迭至。

六日 晴，騰寫新定和蘭文典。

七日 晴，午牌至村塾，活刷清狂吟稿，暮與八十二叩前田，將有所論，前田不在，竟歸。

八日 晴，午後見銃陣，是日三田尻士五十餘名出作大隊，頃許着舶來衣服，令下，人心大動。

九日 雨，未牌有命，講蘭書三兵太古知幾於新殿御次，及流弊，少快。

十日 晴，訪暢夫，過石工某，竟至村塾，暮歸，雨至，夜騰寫新定文典。

十一日 翳，騰寫文典，八十至，未牌訪坂上忠助，拜把山君靈牌，忠助忠愛動人，聞，每日上海潮寺，拜把山君墓，日暮過吉松，大樂源太書翰及備中坂谷希八郎廬，號朗書翰至焉，源太時寄詩及飯田量平紀事，量平越後新發田步卒，安政二年斬於府中。

十二日 晴，文典會講，是日八十。暢夫及作間正之助至，夜寫文典。

十三日 晴，讀文典。

十四日 晴，午後至村塾，及暮歸，寫村松庄一郎復讐紀事，田中增田實所撰。

十五日 晴，將游宮市，前月與大樂約，以日出時發，至山口午飯時也，乃伴賓卿至宮市，訪岡本三右衛門，大樂先在，乃大談，今津太郎亦來。

十六日 晴，曉起盥漱，懸余所携先師自贊肖像及大樂所齋梅田賴二氏書共三幅拜之，主人薦酒與赤腹魚，唱祭詞慷慨悲憤，一坐蕭然，主人信真淵，宣長，篤胤諸先，大知天朝之尊，深憤幕吏之暴，非市井間之人也，是日快々，午後上天神山見櫻花，暮歸，有人來報，江戶有義士擊殺彥根老奸，一座稱呼快然，其事竟不確，皆以為謬傳。

十七日 晴，辰時辭岡本氏，與大樂別，既而至鳴瀧會，友人吉子德如德山，乃聞關東之報信也，即急至山口訪小田村士毅寓居，談數刻，竟與士毅賓卿訪常榮寺，談及四更宿焉。

十八日 翳，出寺時未牌也，歸秋日猶高，訪暢夫，夜叩前田，論儲君東觀爲事至重，警衛可撰人。

十九日 晴、至杉氏、告先師之靈、以關東之報、是日聞、義士率係水藩人、而至細川邸、自首者四人、曰、大関和三郎、曰、森又六郎、曰、脇山(缺字)、曰、杉山警之助、其他未審姓名、嗚呼、水藩養士之功、至此可見矣、今聞關東之快事、雖懦夫誰不興起感奮哉、

二十日 晴、訪暢夫、々々大人將東發、事亦繁忙即去、午後直八至、乃俱至村塾、夜歸、

廿一日 晴、過揚屋訪子遠、有故不逢、與八十暢夫、子大談、大樂源太翰至、○聞、武人廿五人以明日東行、南龜五郎亦在其員、乃往送別、

廿二日 雨、山根(武次郎)守永作間至、仁太去華、子大亦至、午後作贈尾寺(新之丞)簡及答備中坂谷朗廬書、夜過吉松氏壯其東行、

廿三日 雨歇日出、儲君駕以已牌前發、常額外撰警衛士十五名隨焉、人皆以為警衛任至重、午後過吉松氏、道太(中村道太郎 佐久間)佐兵衛亦至、議論不合快々而去、夜讀先師已未文稿上、不覺悲憤、

廿四日 晴、讀幽囚隨筆、夜暢夫來話、春雷殷々、風起飛雨、

廿五日 雨歇、讀已未文稿下、寫新定文典(書)、未牌後思父携子遠書至、思父為余言、水藩義士十七人姓名如左、大関和三郎 森又六郎 黑瀬忠三郎 佐野竹之助 山口辰之助 廣岡農三郎 廣木松之助 関新兵衛 杉與七郎 增子銀三郎 森山繁之助 齋藤監物 鯉淵要人 橋田主水 梅淵光之助 岡部六七郎 蓮田市五郎

廿六日 晴、作短古一篇、與同寮讀白鹿屯學校(原)、夜閱文典、揮刀三百、

廿七日 晴、文典會講、午後與暢夫、子大、仁太到村塾、輪講孟子滕文公、初會畢、與諸子上護國山拜先師墓、歸途過保福寺、掃亡兄墓、是日過書舖、贖欠本將軍家譜(傳)、揮刀三百、

廿八日 晴、與同寮讀白鹿屯學校、午後過吉松塾、聞童子小學會講、暮歸、閱文典後篇、

廿九日 晴、讀文典、子大暢夫迭至、○聞、向儲君之發、撰前警用私意、是以演武習練二場甚寂莫、人不致奮勵云、頃聞之官擇武人百有餘名、命以東行、但姑嘆關東之報何如耳、時人以為、是亦詐譎將令二人勵、而適足以招人怒耳、故曰、巧詐不如拙誠、

晦日 晴、八十來、未牌過中井到郵塾、竟訪松洞及暮歸、寫三至錄、閱文典後篇、

閏三月朔……(後缺)……

(神戸市福本義亮氏藏 校合濟堂)

江月齋日乘(自文久元年一月一日至同年五月晦日)

(久坂在江戶)

(表紙には左の通り記してある)

萬延辛酉初春
文久

江月齋日乘

日下誠道字實甫一字義質名一字君禮号秋湖別號江月齋

(本文)

一月廿七日

晴、桂(小五郎入江品川)及子遠(時山伊藤)・彌二(吉田榮太郎の變名か)・直八(藤野保三郎の變名)・利助(本氏ハ)・河本杜太郎同道、骨原會向院越後人に參詣候事、河(本氏ハ)本月十日より吾

舎に寓居なり、

二月廿七日

雨、子遠・思父同行(前田孫右衛門)して廻向院へ參る、是日宮田瀬兵衛・日下部裕之進・信海等之瘞處を見出せ、予留

守、大野又七郎來りしよし、是日陸山翁(吉田榮太郎の變名か)に贈る詩を作る、

三月廿一日

晴、朝京橋近邊(吉田榮太郎の變名か)にて岩間水之助(藤野保三郎の變名)に邂逅せ、相携卜店し少敷談を、午後檜崎・佐々木同行して泉岳寺(藤野保三郎の變名)に

行義士の墓を拜せ、申時歸邸、時薩人樺山三圓・橋口傳藏來話を、乙葉亦來る、昨日作間克三郎來り芳野翁の意

を傳へ云、越春嶽公將觀松陰師肖像、因て十日斗り借用いとし度との事なりと、寔に難し有事と奉存候、

三月廿七日

晴、思甫同行(小塚原同院)して廻香(小塚原同院)に參詣、諸有志之墓を掃除し、歸路兩國本城(カ)龜沢丁に至り山口の妻子を訪ひ、

申時歸邸、

四月廿七日

晴、直八・大輔・吉松翁同道して骨原廻向院に參る、歸路上邸路に東櫻を訪に行、桂路に東櫻を訪へ行路に東櫻を訪しよしなり、

(神戸市福本義亮氏藏 校合濟)

江月齋日乘(自文久二年一月一日至同 年三月十九日)

(表紙には左の通り記してある)

此書十年後に至されハ禍の連及する事一形ならず依レ之堅他人の覽閱を禁するもの也

文久壬戌正月吉日

江月齋日乘

(本文)

壬戌(文久二年)元旦

翳、鹽湫京師を遙拜し、城山を拜し、祖先考妣の靈牌を拜せ、昨夜(正亮・八十郎・忠三郎・源太郎・松浦)中谷・佐世・寺島・大樂・松洞など村塾を會せ、曉に至り散ス、午後雨、圖らをも薩州樺山書簡來る、為レ之奮興、夜至三周布(政之助)大山氏の簡を達ス、歸路蕭海を訪ひ、薩人の居を尋ぬ、元日此書を得る後以て吉兆と喜ば、他日の驗如何を願ふのミなり、

一月四日

雪、訪(春軒)二橋崎、源太亦會、去至三保福寺、夜讀二講孟餘話二卷、

一月九日

晴、讀二講孟餘話一卷、午後(春軒)中井・半井明倫館へ行、

一月十一日

雪、讀二先師文、寺島來、

二月十二日

晴、閱二書經、寫二連異稱、午後大谷久七出萩致候、清太(久保)・徳民來話、夜高山傳校正、櫻園への報書を認、且賓卿へ書翰遣す、孫子評註上梓の事此内より相謀候事、

二月十六日

晴、(白井又は山縣松浦伊藤高川)小助・松洞・利助・父來る、去朔日江戸大火とりのよし町便申來し由、午後(文之進孫右衛門カ)玉木・佐々木・東光寺・兒玉・小田村・松洞などへ行、暮時久七の宿屋を訪、歸路蕭海を訪談居候處へ土州吉村虎太郎來訪、実ハ予を尋來候ものにて武市の書簡持参まで有レ之申候、談数刻、夜四時歸家、是日蕭海家にて高橋藤一郎の豊後ヲ遊メ會ス、豊後の帆足門下米良倉二郎と歎方ヲ參との事、米良嘗、夷匪犯境録を注せしよし、文章ハ塩屋岩陰ニ頡頏をるよし、

佐伯ヲ御預メ相成居候鮎澤伊太夫氏も厚く遇せられ候由、併シ我等大望有レ之處相果候得ハ乃チ絶命をるなと被レ申候事故、上巳の義舉其外の事なども絶る相通不レ申候よし、久七の談ハ此節夷人麻黄と澤山持渡候事故自然と下直ニ相成候、是ハ竹島ヲ夥敷生候を取來候もの歎も不レ相知との事可レ考、二三日前丙辰・庚申二船帰着と申事有レ之申候、是日謁二吉田先生墓、

二月廿五日

晴、早起喫飯、松洞を訪、白石の様子相尋候處中々沈密千萬まで可レ特男のよし、薩の奮興固無レ疑事ともなり、和泉の發程未レ相知との事ヲ付松洞今一應參らをしてハ不レ相叶候事也、白石余ヲ歌を贈られ候よし、

言葉も筆も盡ぬ真心の會古の眞し水扱(汲之)て知れ君

米藩人兩輩彼家ヲ寓せしよし一人の歌ニ

武士の鎧きぬまは神垣のいろきの梅はそや咲またり

牟田の縛せられしハ無レ間違ニ事なり、別ニ米人三人縛せられしよし遺恨無レ極、余夫より直様前田相訪論候ハ、此度北條東行の上、御兩殿ヲ御一人様御歸國不レ被レ為レ在候者何共不レ相叶(カ)なと強く論し候とも、長井(カ)と争ひを生

高杉晋作日記

解題并凡例

- 一、高杉晋作の日記中松陰に關する部分を摘録したものである、然し松陰と關係深き人としては割合に鮮ないやうに思ふ、
- 一、試撃行日譜は、萬延元年に江戸より水戸を経て松代に遊んだ時の日記である、
- 一、替御日誌は、文久元年秋に於て藩世子の小姓たりし時の日記である、
- 一、獄中手記は、元治元年に俗論黨の爲に萩の野山獄に投ぜられた時の日記である、この原本は、今高杉家にはない、已むなく毛利家の寫本に據つた、
- 一、尙右の外高杉の日記としては、東帆録・初番手行日誌・遊清五録・甲子殘稿・觀光錄等あるが、松陰關係の事項は見當らぬ、

(委員 廣瀬豊)

試撃行日譜

(萬延元年)

八月廿八日 半晴、卯時、辭櫻邸外父井上氏居、送者數十人、予在東武友人最多、故離情頗爲出卿(ト)之思、携手運歩、且行且談、至淺草投旗亭酌別杯、謁小冢原二十一回先生墓告別、既欲至千住、有二騎從前馳來、近焉見之、則桂小五郎也、予出邸、五郎欲送予、而五郎有公事失期、因急速馳馬來云、至千住常州道(光カ)日行道之分境、予謝送者曰、離情無盡、請自是分袂矣、予即向常州道去、送者皆歸東武、別語匆匆、雖壯士將至感涙矣、渡利根川支葉中川者、宿新宿驛、此日送予者、唐津藩大野又七郎、同藩桂小五郎・久坂玄瑞・楢崎彌八郎・南龜五郎・三浦晋祐、皆予平生之眞知己也、

(東京市高杉春太郎氏藏 校合濟)

替御日記

(文久元年三月)

廿二日 十四日廿一日迄に於七日に相成候故、寺内日(寺内外記の處に日々懸感下事)窺之義相休候事、二三日客來少ク且他行六ヶ舗候故、幽室

高杉晋作日記

四七五

文稿壹冊其外少々之書讀過致候事、

廿五日 拜_レ神如_レ例、松陰年譜文稿近日之内成就セテハ、靈魂對_シテスマヌナリ、心自警、夕飯後寺内・來原・内藤

先生を訪、來原・内藤先生不在、中谷正亮書翰_(二股カ)を送ル、夜讀_ニ幽室文稿二十葉、

四月廿日 朝讀_ニ論語集註及欄外書、午_(野村)和作來、讀_ニ傳習錄八枚、岡部富太郎來、楊椒山集・縛吾集借リ歸ル、長井

雅樂來、東行之暇乞ナリ、夜讀_ニ集義和書、拜_レ神如_レ例、

六月廿日 朝大西花屏居士四十九日法會ニ至ル、夕飯後和作來談、乃賦_ニ小詩、自慙_ニ少壯老無_レ爲、身苦_ニ俗疆_一

又怨_レ誰、人世浮沈順逆事、一任_ニ天命與_ニ天資_一、和作_レ松陰年譜草稿と馭戒慨言ヲ返ス、大原卿ノ幅ヲ返ス、

晚到_ニ熊谷太郎右衛門、々々今曉歸着、悔且何乎禮ヲ云ふ、

七月朔日 寺内・粟屋織江・井上ニ到ル、外史貳の冊卒業、頼朝深沈有_ニ大略_一、性堅忍、喜怒不_レ形_ニ於色_一、ニ到ル、

感心候、夜松下塾食客來、銀貳匁相渡候、餘リ者和作迄相渡スヘキ由申候事、

(東京市高杉春太郎氏藏 校合濟園)

獄中手記

甲子三月念九 下獄並國歌一首誦歌一首

敢辭誅戮與_ニ囚禁_一、只哭雙親懷_レ我心、韓塩彭菹非_ニ君罪_一、讒人在_レ世古如_レ今、

今佐良爾奈爾遠加伊和武遲櫻故郷廻風爾散留曾字禮志幾

先生遠慕不天漸く野山獄

十一日 讀書三十葉餘、

偷_レ生決_レ死任_ニ時宜_一、不_レ患_ニ世人論是非_一、嘗在_ニ先師寄_レ我語_一、回_レ頭追思淚空垂、回_レ先生在_ニ江戸獄_一、寄_レ予書曰、死

可_レ偷_レ生則

十四日 讀書五十葉餘、並國歌、

散り行きし花に色香はをとれとも同なし心の散る櫻花

二十日 此際應_ニ杉伯教需_一、閱_ニ校先師二十一回猛士文稿_一、隨讀隨錄、一日之間謄寫居_ニ其半_一、然讀書固不_レ下_ニ前

日、唯少廢_ニ吟咏_一耳、

六月朔旦 幽室記

東山月、黑水花、書劍飄然、周_ニ遊四方_一、東結_ニ交常與之士_一、西與_ニ土肥之士_一誓_レ死、自以爲足_ニ以立_ニ報國之基_一矣、

其相會也、非_ニ山堂水閣_一、則酒樓茶店、吐_ニ露肝膽_一、談_ニ天下之事_一、興來呼_レ杯、悲歌大酌、擲_ニ千金_一如_ニ糞土_一、見_ニ都

城_一不_レ爲_レ廣、放吟之聲、與_ニ絃歌_一相和、而不_レ知_ニ櫻花日暮_一、東山月上_ニ也_一、是非_レ謾借_ニ酒力_一發_ニ暴言_一、而其心有_ニ

由來_一矣、初相會怒_ニ廟議之失策_一、患_ニ天下之無_ニ義士_一、憤激爲_レ誓、欲_ニ一死以維_ニ持皇國之正氣_一、其心乃以爲_ニ我以_レ死

報國、明日之生不可必、何倣因循惜命之士、而爲將來之計乎、何守區々繩墨、而爲擬君子之所爲乎、縱使今日有詩酒放蕩之謗、明日一死以動天下、則其大志誠忠、又分明于天地也矣、而不_レ敢以一點疑惑置于胸間也、予下獄而來、終日閑坐、偶得朝聞道夕死可矣語、愛玩熟味、日以繼夜、一旦闔然、舊夢消滅、乃知昔日之所_レ以稱愉快、浮氣虛喝而非真心所以爲愉快矣、史傳之所_レ列、英雄豪傑、皆置死度外、行道爲急、苟以死置度外、則何以明日之生不可必、而今日假爲詩酒放蕩之客乎、是未能置死度外者、而不免浮氣虛喝之弊也、夫一時之浮氣虛喝、則一日之過、一日之過、則非一日過、而爲終身之累、况其不_レ一日乎、大醉淋漓、罵官吏爲俗物、呼時儒爲擬君子、是未_レ爲甚者、其至_レ最甚者、則一朝之怒、累千歲之身、一言之失、貽身後之醜名、其害未_レ可測矣、回顧往事、每_レ一念至于此、未嘗_レ疎然不_レ滿體生汗也、先師二十一回猛士嘗曰、吾東遊中、遇_レ詩酒放蕩之人、如_レ赤穂義士赤垣源藏、固爲不少、然是源藏而可、後之學源藏者、慮淺心薄、不足_レ與語大義也、今而思之、余之負先師之教、可_レ恥之甚、而何暇悔昔日之過乎、古語云、以能改過爲無過、余誓先師于地下、翻然改心、早起拂室、虛心默語、從容以待_レ命之終、口不_レ飲一杯之酒、耳不_レ聽管絃之聲、而真心頗愉快、囚窓之草花、机上之卷石、亦如東山墨水之景矣、元治甲子六月朔日、揮筆於野山獄北窓之下、

七日 真未定稿、待他日而削刷、

余下獄而來、一日無_レ不_レ讀書、或默讀沈思、或高吟長嘯、獨立勉強、傍若無人、一日同囚嘲予曰、足下之罪

死生未_レ決、而讀書勉強如此、我輩不能_レ解其意、請問其說、予曰、某少而無賴好_レ擊劍、期爲_レ一箇之武人、年甫十九、謁先師二十一回猛士、始聞_レ讀書行道之理、親炙先師纔一周星、去遊東國、時我藩俗論大行、遂至_レ使先師再囚于東獄、某亦在江戶、爲師往來獄中、師示某言曰、汝蓄妻爲吏任父母之心而可也、若得_レ就官于君側、則正論抗議、惟道惟行、然則必可_レ爲_レ貶黜恬退之人、而後讀書練心、十年之後、有_レ大可_レ爲者、可_レ必矣、今思之言猶在耳、而師已遠去、隨今將_レ三十歲、而余之所_レ行與先師之言、真如_レ合符節、因憶予今日之幽囚、先師之所謂貶黜恬退之時、其豈可_レ不_レ勉強讀書乎、予言未_レ了、而同囚笑曰、足下得_レ師言守_レ之則可、然足下若斬首死獄、則今日之勉強則昨夜之一夢、何不_レ置心於高妙_レ游于老壯域哉、余曰、生者何言_レ死、同囚欲_レ極論其說、余笑而不_レ答、即書先師之言於壁、以自警、——(後略)——

(寫本東京市毛利元昭氏藏 校合濟堂)

文久
安政辛酉十二月朔日

一燈錢申合帳

松下邨塾

解題并凡例

一、一燈錢申合帳の趣意は本文に明かなれば、こゝに贅せぬ、縦令、本文中に謂ふ所の寫本の事は、その後國事急迫せるため、永くは續かなかつたにせよ、これを通して、松陰歿後に於ける松下村塾徒の牢固たる團結と決意の様を窺ふことは出来るであらう、

一、京都帝國大學所藏の原本は、今巻物にしてあるが、元は半紙縦二つ折の帳面型であつたらしい、筆者は、最後の三行以外は、すべて久坂玄瑞で、四枚即ち八面から成つて居る、多分これは當時の帳面の全部であらう、神戸市の福本家には野紙二枚の久坂自筆本がある、尤もこれは始めの趣意書の部だけである、

一、本全集には京都大學本を原本とし、福本本にあつて此にない部分は、「附載」として別に掲げた、

一、標題の文字は原本の表紙の文字をそのまま、にあらはし、人名録は一段書であるのを、こゝでは二段組とし、氏名の上にある△○、などは意味不明なるもその儘に存した、

一、雑誌「日本及日本人」の吉田松陰號(明治四十一年十月發行)に載せられたものは、始めの趣意書の部のみであるが、その文末に「文久二年、距松陰先生殉難三年而近」とある、然るにこの一行は前二書の何れにもないから、他の原本に據つたものと見える、

(委員 玖村敏雄)

一燈錢申合

此度同社中申合せ自分々々の力を盡、骨を折て(讀)細細之事なりとも相儲置度事は候非常之變不意之急ニ差掛候るも囊中拂底までハ差込ものまで候逐々有志人の牢獄ヲ繋るれ又ハ飢渴ニ迫候ものも相助度義士烈婦の碑を建墓を築等までハも力を盡し手を延せし度事は候得共同社中有餘の金も有之の間敷事ニ候得者何き此方の至誠をのこ貫き度事ニ候左まハ毎月寫本なりともして纒之儲致置度月末松下村塾まで銘々持寄可レ致候半年もせよ一年もせよ(A.B.)積きは山と成理にて屹と他日之用は相立目途も可レ有之被レ考候同社中身の膏を絞出して集る事なれハ容易費を盡きまらば已を得ざる事ありハ同社中申合せ之上にて取捌可レ申候抑人を救も用は備るも富貴長者之事をまハ如何様も相叶へれと我々にてあくまでこをるハ貪者之一燈とも申へき事にて至誠の貫ぬ理ハよもゆるまじき依之此度取建候金を一燈錢とハ名くる

一 毎月写本六十枚宛村塾まで必を持寄致置度候事

一 寫本料ハ先師之所(已未文稿雜書參照)定、眞字十行二十字五文、片假奈同断四文之事

一 一日僅ま二枚宛之事なきハ左まで勉強のなとぬ事ハあるよし若此数不足あるときは一枚五文之辻を以相償必持寄

可レ有之候事

右之条々此度申合候處是式之事さへ骨を惜候位にてハ我々の至誠相貫候事も無覚束一事之様被ニ相考ニ候銘々屹と意ト

ぬ様致度事ハ申も疎候已上

(文久元年)
酉ノ十二月朔日

松下郵塾

同社中

同社中申合

〇〇

△中谷 正亮

△佐世八十郎

△猶崎彌八郎

△岡部富太郎

△福原又四郎

△久坂 玄瑞

△寺島忠三郎

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

四八五

堀 眞五郎

寺島忠三郎

瀧 鴻次郎

瀧 鴻次郎

瀧 鴻次郎

瀧 鴻次郎

瀧 鴻次郎

瀧 鴻次郎

瀧 鴻次郎

瀧 鴻次郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月濟

△品川彌二郎

十二月 外蕃通略
一三十枚 相濟
一月 不恤緯貳部
一五十枚 但十枚分ハ錢五十文ニテ相償候事
同 孫子評註
一三拾枚 相濟
一燈錢申合帳

馬島 甫仙
久坂 玄瑞
山田市之允

同 貳拾四枚 国王称号論貳部
一六拾枚 但六枚分三拾文ニテ相償候事
同 一三拾枚 但百五十二て償ひ

四八五

堀 眞五郎
寺島忠三郎
瀧 鴻次郎

高杉晋作 小寺新之允 伊藤利介 野村和作
桂小五郎

〇

十二月濟

三十枚宛之事
馬島 甫仁

十二月濟

瀧 鴻二郎

十二月濟

山田市之允

十二月濟

△堀 眞五郎

十二月濟

入江 杉藏

十二月濟

正月より申談

十二月濟

△久保清太郎

十二月濟

正月より申談

十二月濟

△松浦龜太郎

十二月濟

前田孫右衛門

十二月濟

大樂源太郎

十二月濟

正月より申談

十二月濟

南 龜五郎

十二月濟

寺島忠三郎

十二月濟

瀧 鴻次郎

十二月濟

瀧 鴻次郎

十二月濟

瀧 鴻次郎

十二月濟

瀧 鴻次郎

十二月濟

瀧 鴻次郎

十二月濟

瀧 鴻次郎

十二月濟

瀧 鴻次郎

十二月濟

瀧 鴻次郎

十二月濟

瀧 鴻次郎

十二月濟

瀧 鴻次郎

十二月濟

瀧 鴻次郎

十二月濟

瀧 鴻次郎

一 燈錢申合帳

同 一六十葉
 同 但錢三百文にて相償
 一六十葉
 但同断壹朱にて受取壹朱を四匁六分として残り
 壹匁二分六リ六毛出過し相成候事
 一六拾枚
 正月分 但三百文にて
 一六拾枚
 十二月分 同
 一三百文
 五匁札受取にて百五十文残の事
 十二月正月
 一六百分
 一三百文
 一三百文
 〆 貳貫七百八十文と壹朱也
 銀にして三十五匁四分八リ八毛
 品川彌二郎
 榑崎彌八郎
 山縣 虎助
 同 人
 佐世八十郎
 中谷 正亮
 松浦龜太郎
 寺島忠三郎
 佐世八十郎
 久坂 玄瑞
 久坂 玄瑞

四八六

二月三月四月五月六月分
 一一方銀
 但 十八匁四分替にして百五十文残り之事
 一貫六百五十六文
 二月分
 一五匁但百五十文餘りの事
 十二月分
 一札五匁
 但百五十文餘りの事
 〆 五貫五百五十三文
 〆 六十一匁七分
 始よりの大總括九十七匁一分八厘八毛正月十九日同松
 洞之ヲ眞五ニ渡候事
 中谷佐世榑崎久坂寺島品川久保松浦大樂等存之
 正月
 一孫子三十貳枚
 同
 一孫子三十葉
 〆 外蕃通略貳十八葉
 同
 一高山先生傳八葉
 二月分
 一三百文
 二月分
 一孫子評註三拾枚
 同
 一孫子評註同
 中谷 正亮
 松浦 松洞
 福原又四郎
 瀧 鴻二郎
 山田市之允
 馬島 甫仙
 山縣 小輔
 山田 顯孝
 瀧 厚孝

同 一清國咸豐乱記三十葉

馬島 甫仙

一十二匁思父より出在
 内三百文一燈錢取残り七百八十文西遊資取在
 一五朱 榑崎より出在
 内貳朱西遊資取在 一朱一燈錢取在
 一講孟割記 徳民より託せられ候事
 正月十三日
 一貳歩 久保より出在
 但壹歩ハ取替にて有レ之候
 十二日
 一百貳十文瀧へ返在事
 正月十九日
 一外蕃通略一部代
 三匁六リ六毛 眞五へ渡在
 寫本 松陰先師著述
 水府の著述 其外人ニ頼區を候るハ何之書ニも苦
 しちトに存候

(京都帝國大學藏 校合濟)

一 燈錢申合帳

四八七

(附載)

(福本本には、本文末尾に近くある箇條書のところになほ左の一條がある)

一寫本紙寫本取捌等ハ逐々申談合可レ致候得共當分之中ハ寫本紙ハ銘々心配可レ有レ之候事

(福本本には、本文末尾松下郵樂回社中の次に左の一條がある)

寫本ハ水戸の回天詩史・弘道館記述義・常陸帶・二連異稱・退食閑話・下學邇言・及門遺範などより始として世の補(カ)なる書ヲ致度候事 先師の孫子評註・奉使抄・講孟餘話・討賊始末・外蕃通略・幽囚錄なども逐々寫し弘め度事ハ候南山史・不恤緯・柳子新論なども同斷之事但人より頼まれ候書籍者如何なるものにてても苦しからを候事

中谷正亮・佐世八十郎・品川彌二郎・福原又四郎・久坂玄瑞談合之事

是式之事ハ逐々骨を折る人も可レ有レ之歟と相待事ハ候猶崎彌八郎・岡部富太郎

惜まぬの人数(積)加ふるものも

(以下略)

(神戸市福本義亮氏藏 校合済々)

久坂玄瑞廻瀾條議

解題并凡例

廻瀾條議五條は、文久二年八月一日久坂玄瑞の作である、内松陰に關係深き第一條を拔萃した、原本の表紙には回瀾條議とあり、廻字が回字になつて、未定稿と記されてある、内容塗抹多く頗る難讀のものである、

(委員 廣瀬豊)

廻瀾條議

第一條 本藩正邪の辨を明らまし士風ヲ興起し節義ヲ鼓舞する事

天勅ヲ貫き夷狄ヲ制するの基本たるを論ず

今般 御而殿様 輦轂ノ下ニ御出張 御内勅ノ趣御受被_レ為_レ遊候ニ付る者誠以平生之御忠誠貫徹仕 御先代様ノ御英靈ヲ御慰被_レ為_レ遊候事此機不可_レ失之時ニ候大御急務ト申ハ午歲の 勅_〇ヲ貫き幕吏の正邪ヲ糺シ夷人ヲ下田條約ニ引戻シ萬一承引仕らすハ膺懲撻伐の外御所置有_レ之間敷ト御決心被_レ為_レ遊急度御徹底候様御盡力被_レ為_レ在度奉_レ存候_レ

然處幕吏ノ正邪を糺し下田條約ニ引戻候杯 朝廷ノ御興廢 神州の御安危ニも係候程之御事にて中々容易ならぬ御艱難ニ可_レ有_レ之候得ハ先以御内輪ノ正邪を相糺し君子小人ノ辨明白ニ相立士氣ヲ奮興し節義ヲ碎勵し閩藩(奉明天皇御)一統方ヲ知_レル様不_レ相成_レ候_レ者尊攘之御盛意迎も_レ貫徹仕間布候_レ 癸丑以來追々御直書付并御建白書等奉_レ窺候處 叡慮御尊奉人心一和夷狄之術中ニ陥らざる様之御趣意と被_レ相考_レ午歲ニ相成候_レ者御直書付_レも 朝廷より被_レ仰出_レ候次第閩東にて私意を以種々之道理を付御遵奉無_レ之候て此餘逆鱗如何程ニ至候やも難_レ計ニ付内外之急變必然之事ニ候上下心を合一和を本とし今日より死生一致ト相心得 皇国の御武威相立候様可_レ心掛_レナト被_レ仰出_レ閩藩ノ士氣一時

ニ奮興仕候處其後俗論沸騰正義抑壓せられ吉田寅二郎をも関東へ御引渡ニ相成竟ニ長井雅樂一己の邪心よりして折角
 天朝御尊奉之御旨趣も相貫不_レ申却る天下之御疑惑ヲ被_レ為_レ蒙候程之事ニ相成いりよも口惜き次第何分火急
 ニ御内輪の正邪御糺明可_レ被_レ仰付_レ候此度御首尾克_レ御内勅御受ニ相成_レ若殿様御東下被_レ為_レ遊候ニ付てハ勅使
 并薩藩被_レ仰合_レ幕吏ノ正邪ヲ糺し_レ勅諭之相貫候様不_レ被_レ為_レ遊候者不_レ相叶_レ候處長井雅樂既ニ御国被_レ差歸_レ慎
 被_レ仰付_レ候得共其結局ダニ未決ニ候てハ雅樂如何御嚴罰被_レ仰付_レ候やなと御尋仕候もの有_レ之候ても御返答も難_レ被_レ
 為_レ在中々幕吏共ノ正邪を糺すなどの事御一言も御口出相成間敷儀ニ可_レ有_レ之ニ付早速嚴重之御裁決不_レ被_レ仰付_レ候
 る者不_レ相叶_レ候今春已來数度書取を以罪狀申出置候ニ付今更喋々仕らす候得共今春ハ既ニ浪士共より刃傷ニ及候勢
 有_レ之候萬一彼等ノ手ニ掛候時ハ島田左兵衛同様ニ相成可_レ申御當家ノ御耻辱如何計まりらんを此度_レ宮様并三
 公及尾張・土佐等御憤相解越前_レ市橋御出役被_レ為_レ在候程ニ相成候上ハ地下官人藩士浪人尊攘の為ニ繫囚幽屏せられ候
 ものハ盡放去し斬刑ニ處_レられしものハ其忠魂毅魄を御弔被_レ為_レ成候様薩藩等被_レ仰合_レ御配慮被_レ為_レ在度奉_レ存候處
 先以於_レ御國_レも吉田寅二郎ハ忠烈節義之士ニテ百蹟百奮別る六年ノ幽囚ニ罷在國家之為日夜苦心仕居候折柄非常御寵
 命ヲ以テ門人相對被_レ差許_レ内密持論をも申上候様被_レ仰聞_レ候ニ付殺身殉国之志益切ニして終ニ相果申候然處國之議
 論毀譽一ならず甚シキハ御厄害を引出候国賊など、罵候ものも有_レ之実以殘念之至ニ付何卒山岳之御恩旨を以江戸小
 塚原之遺骸改葬の御都合可_レ被_レ成賜_レ候小塚原ハ櫻田_レ下坂_レ東禪寺ナドノ義士并ニ天下有志ノ士數十人疊々相望彼盜
 賊奸犯ノ徒ト同様被_レ取扱_レ候ニ付是亦早速改葬有_レ之度候畏も近年和氣清麻呂卿_レ朝廷より護王大明神ノ宣命被_レ賜候

御事ニても天下ノ志士誰カ感泣セサル者アランヤ何卒君上より諡號褒詞なりとも寅ニ既死の後ニ被_レ仰付_レ候得ハ國
 の士民為_レ之益感激仕節義廉耻之風興起可_レ仕候蒲生君藏夷狄ヲ退治センニハ先林子平ノ墓ヲ祭ルヘシと申サレシガ今
 般勤王之御盛意ニテ御出張被_レ為_レ遊候上ハ寅ニ魂ヲ御弔不_レ被_レ為_レ遊候るハ御闕典ニ可_レ有_レ之候_レ抑雅樂不臣の罪
 を罰し寅ニ忠義乃魂ヲ弔ヒ正邪の辨明白ニ相立君子を進め小人を黜け正義確然富士山の動りすへらさる様有_レ之度
 候人君ハ何ぞ劉備の孔明ヲ水魚ニ比し孫權乃諸葛瑾ヲ謂テ神交トナス類の如く精忠至誠之者敦樸懲直のもの不斷御側
 近被_レ召出_レ天朝之御模様各國之形勢夷狄之事情等打トケテ御話無_レ之候_レ時務情実相通兼候ものニて候君臣之間ハ
 朝會儀式を除く外ハ威嚴を捨親愛を厚とし上下懸隔之敵なく君臣輯睦被_レ為_レ在度別る御三_末未岩國なとハ申も疎_レ候古
 者_レ後醍醐天皇至尊スラ無礼講御設被_レ為_レ遊候事ニて水府義公も汁講の事被_レ仰置_レ候よし承及候此度輦轂ノ下御出
 張被_レ為_レ遊候上ハ全ク御陣中之御覚悟ニテ三軍肅然秋毫無_レ犯と申程ニ御行届被_レ為_レ遊洞春公出雲の御艱難黃梅公
 碧蹄館の御勇猛等被_レ為_レ御考合_レ士風ヲ振興し邪正ヲ明よし言路洞開嚴刑信賞御政事少敷も御淹滯無_レ之候様不_レ被_レ
 為_レ在候るハ中々幕吏の正邪を糺し午歳ノ_レ勅諭を貫候なと思もよらす折角御出張之御盛意も貫徹仕間敷ニ付急度
 御雄斷御英慮可_レ被_レ遊候様奉_レ存候

(第一條以下略)

(神戸市福本義亮氏藏 校合濟)

攘夷血盟書
奇兵隊血盟書

解題并凡例

一、攘夷血盟書、文久二年十一月十二日、高杉・久坂・大和等十一名、横濱洋館を襲撃し、以て奉 勅攘夷の機運を促進せしめようとしたが、謀洩れ藩世子の鎮制する所となりて、事成らなかつた、この血盟書はその直後に出来たものであらう、久坂玄瑞の起草執筆にかかる、題名は編者の命するところである、

二、奇兵隊血盟書、元治元年秋七月は、長州藩にとりては容易ならぬ時であつた、京都に於ける長州勢は、形勢悪化して退却の已むなきに至り、外夷また何時來襲するも計り難い、この難局に際し、松門の志士團結して血盟す、誠に由ありと云ふべしである、

(委員 廣瀬豊)

攘夷血盟書

此度我々共夷狄を誅戮し其首級を提げ罷婦急度攘夷之御決心被_レ為_レ遊今般被_レ仰出_レ候 勅意速ニ致_レ貫徹_レ度存詰發足候處恐多も 世子君御出馬被_レ為_レ遊候る壯志感服之至候得共我等孤立ニてハ心細ニ付一先婦參尊攘之実功補佐吳候様御懇切之御教諭被_レ仰付一同不堪_レ感泣之至ニ必竟此度之一擧も君上我後ニ仕候義毛頭無_レ之御決心之段奉_レ祈候る之事ニ付此後ハ益忠誠を勵_レ御奉公可_レ仕段申上引取候事ニ付此同志中之義ハ斃る、迄ハ十三日夜之次第忘却候る者不_レ相叶_レ百折不屈夷狄掃除し上ハ

微慮を貫き下ハ 君意を徹する外他念無_レ之國家之御楯となるるき覺悟肝要た梨

同志中一旦連結之上ハ進退出處盡く相謀_レ自己之了簡ニ任すまじき也

同志中落途有_レ之歟又ハ所存相違有_レ之時ハ何國までも論辨するし面從腹誹ハ於_レ武士道_レ愧へき處な梨

秘密之事件ハ父母兄弟_レりとも洩するあらば萬一被_レ召捕_レ八裂ニ逢とも致_レ露顯_レ等之義有_レ之間敷也

御楯組中一人たりとも恥辱蒙_レる時ハ其餘之恥辱た_レ相互ニ死力を以て救援し組中之汚名を取まじき也

我々共死生同し正氣維持するま付る者いら計離流_レ頭沛ニ逢とも尊攘之志屈し撓へり_レ聚散離合を以て志_レ変するハ禽獸と謂_レし幾千萬里を隔とも正義凛然見苦敷振舞有_レ之間敷也

右同志之契約致違背候時ハ幾應令論辨一萬一承引無之ニおるてハ組中申合詰腹ニ及ふるし依る天神地祇ニ誓ひ
血盟する事如レ件

文久二年戊十一月

- 高杉 晋作 春 華押
- 久坂 玄瑞 誠 華押
- 大和 彌八郎直 華押
- 長嶺 内藏太實 華押
- 志道 間多 惟 華押
- 松嶋 剛藏 久 華押
- 寺嶋 忠三郎昌 華押
- 有吉 熊次郎良 華押
- 赤禰 幹之丞貞 華押
- 山尾 庸 造 華押
- 品川 彌二郎日 華押

此度我々等共

京都ニ罷居此舉ヲ不ニ相加一といへ共元來尊攘之志ハ何處迄も同心之事ニ付依る血盟如レ件

十一月廿六日

- 瀧 彌太郎 厚 華押
- 堀 眞五郎 義 華押
- 佐々木次郎四郎煥 華押

此度我々等共

御國ニ罷居此舉ニ不ニ相加一といへ共元來尊攘之志ハ何迄も同心之事ニ付依る血盟如レ件

十二月廿七日

- 山縣 初三郎 信 華押
- 長野 熊之允 朋 華押
- 山田市之允 顯孝 華押

十二月廿八日

- 周田 半藏正誠 華押
- 冷泉 雅次郎本清 華押
- 瀧 鴻二郎 孝 華押

此度我等

京都ニ罷居此舉ニ不ニ相加一といへ共元來尊攘之志ハ何迄も同心之事ニ付依る血盟如レ件

正月廿一日

三戸 詮藏次是 血華押

常節不ニ居合ニ候得とも飽迄御同意ニ付血盟如レ件

亥正月廿九日

佐々木 男 也 血華押

楢崎 八十槌寛 血華押

吉田 榮太郎秀 血華押

野村 和作芳 血華押

(寫眞版東京市榊取三郎氏藏 校合濟曠)

奇兵隊血盟書

(嘉永六年) 癸丑以來國家危急之義ニ付松蔭先師其他諸有志之素志を以 君公を奉ニ補翼ニ 皇朝復古之義ニ付血印同盟ニ及候處

其後時勢日々々々相迫付る者此度改る盟約ニ及候然ル上者危急存亡其如何躰之姿態ニ至り候共相互ニ責レ善助レ徳 死生之際ニ立至り候共確乎不拔勿論之事ニ候此儀相背候者ハ上欺ニ神明ニ下恥ニ祖先ニ其罪不レ可レ容ニ天地ニ候前条大任ニ 當り候ニ者一兩輩之堪ゆる處まあらされ々追々相届候者ハ出處正邪相調子可レ加ニ連印一者也

元治元年秋七月

- 赤根武人 山縣狂輔(血字華) 福田良輔 馬島甫優(血字華) 藤邨太郎(血字華) 松岡循作(血字華) 片野十郎 三好軍太郎
- (血字華) 相山莊市郎 眞田市太郎(血字華) 時山直八(血字華) 長太郎(血字華) 木谷循造(血字華) 南野市郎(血字華) 天宮慎太郎(血字華) 伊藤傳之輔(血字華) 湯浅祥之輔(血字華) 岡千吉郎(血字華) 尾川彌一郎 木邨文太郎 矢野登一

(原本には日附の後同一人の筆蹟にて姓名を列記し、各自字ニ華押ミを書し血判を押してある、故に姓名のみものは加盟未了のものであらう)

(勤王諸士遺墨帖所載寫眞 校合濟曠)

吉田小太郎日記

解題并凡例

一、吉田小太郎は松陰の兄杉梅太郎(後年長男)の長男で、松陰の後を嗣いだ人である、この書はその小太郎が明治三年十三歳及明治六年十六歳の時の自筆であつて、従祖父玉木文之進に従學中の様子を書き記したものである、その内特に玉木の教育振りを偲ぶべきものを抄寫した、元來玉木従祖父は小太郎の教育を一手に引受け、第二の松陰を作らんと意氣込んだ事、玉木文之進意見書、吉田小太郎略傳に明かである、故にこの日記によりて松陰の幼時玉木叔父に従學せし有様を推察することが出来る、

一、附録一の吉田小太郎略傳は編者の附したものである、小太郎の實父杉民治の著にして、小太郎の死後間もない頃書いたものであらう、終尾完結に至らず惜しい事である、一讀して杉民治及玉木文之進が、いかに松陰の志を繼がしむるに熱心であつたかを窺ふ事ができる、

一、附録二の叔父杉敏三郎傳は吉田小太郎の著である、松陰も不幸なる弟の爲めに、或る時は熊本清正公に祈り、或る時は醫術に萬一を祈つたこともある、然かも萬策竭きては、遂にこれを傷しむの文を書いて不朽に傳へたが未だ傳記と云ふ事はできない、然るに多情多感なる小太郎はこれを完成したと云つてよい、文中誤脱多きは、幼年のこととなれば恕すべきことである、

(委員 廣瀬豊)

于レ時明治庚午孟秋吉祥日改レ之
此比甚面白

日記

庚午篇

九冊 吉田

(自明治三年六月十八日 其二)
至同 八月十七日

六月十八日 曇天、朝半紙ヲソロエ何ヤラカヤラナシ、玉木行日記ヲ書、伯父ニ書經下一枚半
教、外史十九徳川氏三枚讀、小学下見ヲシテ貫、晝婦亦玉木行日記ヲ書、太熊・研藏ニ孟子十
枚讀、誦誦録ヲウツシ、夜玉木行外史七枚讀、

同月十九日 晴天、朝玉木行研藏ニ詩經ヲ教、誦誦録ヲウツス、外史六枚讀倉橋久槌ニ論語讀、
誦誦録ヲウツス、夜玉木行外史七枚讀、

同月廿日 玉木行詩經ヲ研藏ニ教、誦誦録ヲウツシ、晝塾行小学會有不與、夜玉木行晝、

同月廿一日 結髮衣服而馬嶋行、同甫仙同同シテ春日大明神エ參詣、豊坂様ヲ春社ヨリ拜ム、

明倫館行講堂ニテ馬嶋氏・大杜氏・三浦氏・阿武氏・青木氏同同ニテ御酒ヲ頂戴ヲス、婦玉木行同
家之用ヲシ、誦誦録ヲウツシ晝、沼田ケ原之荒神社之幸行ヲ拜ム、夜大雷雨、

同月廿二日 朝玉木行日記書、伯父ニ書經下二枚教晝婦、玉木行研三ニ伯父ニ孟子十枚讀晝、

同月廿三日 日和、朝玉木行研藏ニ詩經教、外史九枚讀、研藏・太熊ニ孟子十枚讀、夜玉木行
外史五枚讀、

此日眞ニ晴天
鳴戸ハ上ノ御馬

七月四日 今日ハ我が先祖他三郎之正忌日也、朝拜ミ食レ飯玉木行孟子二冊十二枚自讀、清書
を書き日記を書シ、口羽與八郎刀一本サシテ玉木之既ニ行馬ヲ引キ欲レ出レ門ヲ、馬居テ鳴戸サ

於明倫館講堂
酒甚附也

ヲグ、其ノ馬ヲ上ニ引與八郎鳴戸ニ乗テ出、鳴戸ハ玉木氏之馬之名也、今日馬出ハハタカ馬ニ
乗テ川エ洗ニ行ノ也、馬出ヲ見晝婦ニ食レ飯、飯之出ヲ久シク待チ風呂エ入り、門出レバ土屋政
之允・中村孫市ニ會、二人日、馬島先生カラ此書ヲ送ト曰、我其ヲ家ニ歸開ケバ資治通鑑之小
口書きを頼ム其ヲ書キ送也、虫ボシニカケ物ホシテ有、二人日、先生像ヲ拜ム曰、行テ見拜ム、
而外のカケ物ヲ見婦而馬島行、大森龜之助ハダカニテ物ヲ書ク、ソコエ行自ソウサシキヲ借テ
クレエト玉木先生曰ト曰、龜之助、馬嶋ニ問フテ出ス、馬嶋曰トジテ貸ト龜曰、龜兒本ヲトズ
我ニ渡ス、馬島曰、今朝中村・土屋之二人ニ資治通鑑ヲコトツケタト、我只今更取曰而婦、秋
山豊雄宅之前ヲ取り玉木行玉先生ニ渡ス、日記ヲ書シ而九市來ル、九市ニ禮記一曲禮下第二之
篇半枚讀ス、甚睡ムル也、自レ此先不レ分、

嘗トハ我之頭ヲ
大イニイカルナ
リ大イニイカルナ
此七月十九日ハ
久坂義助之死トハ
一トウ、此間自
上ニ京師之變動
ニ死レ之、祭祝
料下賜レ久坂ハ

七月十九日 雨天、朝一寸と結髮而玉木行日記を書ス、讀ム、手習ヲ習、晝婦亦玉木行、児玉九
市ニ禮記何枚讀、甚不レ覺、歌之字をコノナンノ、亦畏厭溺ヲニラウデキノナンノヨウナ事曰
テ不レ覺、雄治其側ニ居見タリ聞タリスル、倉橋久槌髮ヲウチヨデ結デサキヲキツテ玉木行友
人皆晒、而日本外史廿一卷八枚口羽駒之助・志賀平藏同同ニテ温讀、我外史讀、流ニ竄其餘、我
竄之字ソト曰、先生大嘗也、我聲尾振テ讀而婦、入江行、入江行ハ入江九市之七年忌也、由ハ
其行、九市ハ此七年前京師之變動ニ死人也、由其拜ニ行也、晝夜玉木行、駒助同同シテ外史九

六百目下サル、久米次郎一代、入江モ如レ此、日本外史講釋ヲスル人ハ玉木先生也

枚温讀、廿一冊と廿二冊と二冊合て九枚也、

八月三日 朝玉木先生同道ニテ野田行、同久平之ユハイヲナガミ、田中行、青木行婦、玉木行研藏ニ孟子讀セ、新論卷之上四枚半、口羽同道ニテ讀ミ婦、夜玉木行、外史四枚ヨミ、外史之一平氏之講釋ヲ聽キ婦、

八月四日 朝玉木行外史ヲ講シ讀ミ、新論昨日之所ヲ讀ミ、誦誦録ヲ写シ、晝婦亦行、倉橋久榎ニ孟子讀セ、兎玉九市ニ禮記讀セ、誦誦録ヲウツシ、日記ヲ書シ婦、夜玉木行、外史一之講釋ヲ聽キ婦、

八月五日 朝暮參、玉木行誦誦録ヲ写シ、外史ヲ講シ、新論之上五枚駒助同シテ讀ミ、晝婦亦玉木行、倉橋久土ニ孟子一枚讀セ、新論三枚駒介同シテ讀、其外婦、夜婦ヲ見也、

八月六日 朝玉木行誦誦録ヲウツス、新論讀、玉木ニテアマガイヲ馳走ニ成、晝玉木行、兎玉九市ニ禮記讀セ、誦誦録ヲウツシ新論讀ム、夜玉木行新論之不審ヲ問イ、外史之講釋ヲ聽也、

論語ハ誤孟子也、堀姥ハ堀清兵衛之妻、本大井ノ山ベ、百姓ヲ兵衛私シテ是清兵衛トスル也

八月七日 朝青木エ藥ヲ取行晝前婦結髮、晝玉木行外史下見ヲシ倉橋久榎ニ論語一々枚讀、我ト志賀ト口羽ト外事晒ヲ為スノ事有、三人并晒、堀姥來恐曰、我汝等之トコロエ行ハ晒、我面ノミニクキカ何カト、赤面シ大恐覺テ行、々ニ玉木之部屋ニ恐曰也、志賀・口羽・我・研三と馬鳴(元字)ニ戸ヲ出シ乗川エ洗ニ行婦、夜玉木行、先生苗守ニテ外史之講不有、口羽と新論上五枚温讀、

吉田小太郎日記 其二

自明治六年四月八日 至同 六月廿三日

(四月) (前缺)

鶴江ヲ通り萩町ヲ通り帰、鶴江渡ニテ重富氏乗舟ニ過フ、彼ノ船ニ乗テ川ヲ渡、夜玉木行読書、

八日 晴、雨將ニ降ントノ降ス、朝草ヲ取新ニ種ル、桑エダフノ惡水ヲカケル、晝ヨリ玉木行易知録會讀、同本不審ヲ先生ニ問フ、夜亦問フ、

九日 陰ル、玉木行論語下見、晝同本會、論語終也、夜八大家會讀、

十日 半晴半陰、朝米ヲ搗午後ヨリ玉木行、晚一寸婦リ入浴亦玉木行易知録會讀、

十一日 晴、玉木行易知録會讀、

十二日 晴、玉木行大學講釋ヲ聞ク、會講之書大學始ルナリ、易知録會讀、夜吉田清内宅行、亦玉木行易知録會讀、

十三日 晴、時々小雨コチ大ニ吹、玉木行易知録會讀、夜モ亦會讀、

十四日 陰ル、時々霧降、玉木行大學下見、晝同本會、楷行書習フ、婦リ山口エ送ル手紙ヲ書、

十五日 時々小雨降、玉木行^(兄字)晝ル玉木エ行ナ^(兄字)大學ヲ讀婦ル、

十六日 寒風恰モ冬日ノ如シ、玉木行易知録會讀、楷書習フ、

十七日 晴、玉木行易知録會讀、同本不審ヲ先生ニ問、而ノ八大家會讀、晚方ヨリ佐々木・白倉・玉木・山下・兼重。

口羽・杉同心伴世行飲酒、弘法祭也、婦リニ弘法寺參詣、

十八日 晴、玉木行大學聽講、而ノ下見、

十九日 曇、朝相次郎出山、玉木行大學下見、

十七日、杉父ヨリ吾等ニ遊學如何トユウ書翰來ル、吾等議曰、玉從祖父之論如何、彼レ同意ナレハ遊學スベシト、十八日、父ヨリ從祖父エユク書帖ヲ以テ玉木、姑シテ我等ヲ召ブ、從祖父曰、父ヨリ遊學之事實テ來ズヤ、我日然リ言ヒ來也、遊學モ可ナリ汝等遊學セヨ、吾モ年老ユ、人ヲ教ユルコト甚タ苦シ、故ニ廢塾スルナリ、二人孰レガ山口エ行テ、父エ岩國之様子ヲ聞ケト、故ニ十九日相次出山スル也、(原本上欄)

廿日 晴、朝内ニテ物ヲシマウ、晝ヨリ玉木行書ヲカク、夜玉木行、玉先生曰ク、廢塾シ、汝等塾エ來ル、廢塾之期無シ、汝等來ルヲ勿レ、不平之辭アリ、曰ク、汝父欠替テ汝ヲ遊學サセルト、不同意之様ナコトバアリ、吾恐テ婦ル、其時佐仁モ居ルナリ、塾生エ語ル、皆驚ク、婦リ祖父等エ語ル、皆驚ク、

廿一日 玉先生不平故塾エ不行、内ニテアキレテ居ル、夕飯後旧徳山屋敷エ行角力ヲ見ル、夜玉木行、先生不平解ケ亦塾ヲ興スト曰フ、塾生皆欣然、飲酒婦ル、^{杉・佐々木兩祖母玉先生ニ強テ塾ヲ興ス}、^{トヲ曰フ、先生意解ケ曰、塾ヲ興スト、}

廿二日 朝父上エ送ル手紙ヲ書ク、遊學止ルコトナリ、玉木行易知録會讀、

廿三日 玉木行、易知録不審ヲ先生ニ質問ス、晝婦米ヲ搗ク、玉真來ル、角力エ行シカト言フ、故米搗ヲ止テ、玉真・山下・佐世・白倉・佐々木等同心角力場行角力ヲ見、夜玉木行、

(五月)

三日 晴、朝蓼參、玉木行晝ヨリ帰リ草ヲ取、夜玉木行国畫ヲヨム、
 四日 晴、朝父上エ送ル手紙ヲ書ク、玉木行詩ヲ作ル、夜人麻呂社參詣、
 五日 晴、玉木行世界国畫ヲヨム、晝ヨリ習字、人麻呂社參詣、夜玉木行同本讀、
 廿日 晴、玉木行大學聽講、帰リ山口エ送狀を書、夜易知錄會讀、

(六月)

二日 翳、朝小雨、朝ヨリ晝迄ムギヲ刈、其他天竺豆ヲ刈、晝ヨリ玉木行習字、夕飯後玉先生吾等二人ヲ召テ、筭盤之咄アリ、而易知錄不審ヲ質問ス、
 三日 朝小雨、四時ヨリ霽、玉木行朝八筭ノ割聲ヲ誦ス、晝易知錄會讀、夕飯後楷書ヲ習、夜内ニテ米ヲヒイテ粉ヲ製ス、
 四日 晴、玉木行大學下見、此日學會ノ日ナレドモ先生差岡アリ延引、夕飯後楷行書ヲ習、夜手紙ヲ書ク、
 七日 晴、朝桑子木之虫ヲ取、倉橋行我刀之仕立ヲ頼ム、玉木行易知錄會讀、而ノ同本不審ヲ質問ス、夜手紙ヲ書ク、
 八日 晴、朝玉木行易知錄會讀、不審ヲ先生ニ質問ス、而同本會讀、少シ習書、
 九日 不詳、

十日 晴天、玉木行、晝過大學會執講、夜易知錄會讀、
 十一日 晴、玉木行易知錄會讀、夕飯後杏ヲ取ニ臺エ行、夜鳥之蜘蛛ヲ取ル、
 十二日 朝曇又晴、朝荒瀬エ悔ニ行、彌次兵衛 死去青木行藩札ト金札ト兩換ヲ頼ム、晝玉木行大學會、予下見ヲ為ルヲ得ズ、故ニ韻ヲ取ラズ、夜蜘蛛ヲ取、
 十三日 曇天、朝弘中行、而玉木行易知錄會讀、
 十四日 晴、玉木行大學下見、晝同本會、

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟園)

附録一

吉田小太郎略傳

杉民治筆

吉田小太郎ハ杉民治ノ長男ニテ母ハ渡辺氏、安政五戊午ノ年二月九日ノ誕生ナリ、文久三癸亥ノ年四月、六歳ノ時、叔父ナル吉田寅次郎家筋、先年故アリテ一旦断絶シタルヲ再ヒ御取立可レ被_レ仰付_レ旨アリ、小太郎ハ寅次郎ノ從子ニテ、吉田家元祖友之允ノ七世ノ孫ナルヲ以テ、更ニ最前ノ家祿ヲ下シ給ハリ、御取立被_レ仰付_レ、父ノ志ヲ可_レ継旨被_レ仰渡_レタリ、夫ヨリ讀書ニ志シ、初ハ実父祖ニ學ヒ、又小野石齋・玉木從祖父等ニ從學シ、漢書自在ニ解シ漢文モ通例ノ文ハ綴リ得タリ、筆道モ小野又ハ長三洲等ニ授カリ、其後ハ古法帖ヲモ學ヒ、一ト通り見事ニ出來タリ、初メ九歳ノ年、實父ニ從ヒ徳山ニ遊學シ、嶋田南村等ヘモ學ベリ、明治五申年、又明治ニ從ヒ東京ヲモ一覽シタリ、此前後數年間養実兩父ノ知音朋友親戚ヨリ頻々數々洋學又ハ東京遊學ノ勸メアレハ、玉木翁ノ固執ニテ断然許サスシテ曰、寅次郎モ我引立ニテコソ如_レ此出來タリトテ、玉翁ノ自ラ信スル_レ厚シト云フヘシ、此時ハ旧知事公ヨリモ御直ニモ、幸ヒ出京シタル事故、是非_レ苗學ノ儀頻リニ御勸誘被_レ仰聞、諸師友ヨリハ尙更ノ事ナレハ、民治モ萩出立ノ時、必可_レ連歸_レニ付暫時ノ暇ヲ玉ヘト、玉翁ヘ堅ク約束シテ登リタル事故不_レ得_レ止、公ヘハ病氣ヲ申立、諸師友ヘモ色惡シク断リ連歸リタリ、其後モ旧知事公ヨリモ度々御内命モアリ諸師友ノ親戚間ノ勸メ丸々拒ミテ聞入サリシニ、同六酉ノ春、實テハ岩國迄ナリレト_(不明)又ノ思ヒ立ニテ、東崇一先生ヘ從學致サセ度申テ申出シタルニ、玉翁大奮怒ニテ事中バニテ止ミタリ、同年冬、実母病氣ノ時モ日夜ノ看護ニ心ヲ尽シ不_レ至所ナケレハ、其甲斐ナク、十二月廿日ニ

母死去シ、殊外悲愁數セルニ、間モナク同七戌春、佐賀ノ_レ起リ、前原一誠ノ募兵ニ加リ、山口迄出張シタリ、然ルニ木戸前原ハ旧藩以來ノ云々モ何カアリゲニ風評シ、佐賀一件ノ募兵ニ事ヲ託シテ、前原重テ隊伍ヲ結フノ含ミアル由取沙汰アレバ、同年夏、民治固ク玉翁ヘ乞ヒ、東先生ヘ從學セシメタルニ、_(諸書物ト_レ發シテ隊ヲ組事ハ止ミタリ)前原隊伍ノ_レハ_(虛説故又秋ヨリハ元ノ)通り玉翁ヘ從學シタリ、其比ヨリ翌亥春比迄、小太郎自分ニモ東京ヘ出、洋學ノ念モ頻リニ起リテ、再三再四書面ヲ以テ実父ニ乞ヘハ、矢張玉翁ノ心ヲ憚リ、且ハ民治自身ニモ都下書生ノ風儀ヲモイカ、アルヘクヤト気遣ヒ許サ、リキ、然ルニ、此度前原党ノ事ヲ舉ルニ當リ、兼テノ実父ノ心事ヲモ察シ、是非モナキ_レト考ヘタルカ、父様ヘ宜シク御断被_レ下度由疊重玉翁ヘ申置タル由、家ニ當年出生ノ異母妹アルヲ、其前日僅カノ間合ニモ抱キタルハ暇乞ノ心ニテモアルヘクト、老祖母ノ涙ノ話ニ驚キ、夫ヨリ玉翁ヘハ_(不_レ申シテ)秘シ跡ヨリ人ヲ遣シ、歸ルヘキ由申越タルニ、既ニ須佐ニテ船ヘ乗ラントスル処ヘ追付、父ヨリノ口上モ申演ヘタレハ、最早此期ニ至リ跡ヘハ引レズ、宜シク申上吳ヨト申捨、舟ヘ乗組タルヲ、使ヒノ人ハ見送立テ歸リタリ、其後追々ノ戰ニ出、_(位牌には一日とある)遂ニ十一月二日ノ戰ニ彈丸ニ中リ、僅十九才ノ若キ身ハカナキ煙ト消ヘ失セニケリ、元來ノ生質柔和温順ニシテ、幼少ヨリ父母ヘ一口モ申返シタル事モナク、父母尊長ノ心ニ逆ヒタル事モナク、兄弟中ハ申迄モナク、他人ニテモ生來一度モ喧嘩口論ヲシタル_レモナク、実家ノ妹ヘ中村弼ノ二男相次郎ヲ迎_レ、申ノ年養子ニ致シタルガ、相次郎モ同様溫柔の生質ニテ、誠ニ眞ノ兄弟ヨリモ睦シク、日夜朝夕業ヲ俱ニシ、食ヲ同フシ、出入起居始終相伴ヒ、一時モ不_レ離シテ互ニ助ケ合、打和ラキ暮シタル故、玉翁戯テ右兩人ノ事ヲオトドイ連レト申サレタリ、殊ニ物_(不_レ)毎綿密謹嚴ニシテ、幼少ノ折ノ遊ヒ道具ヲ今ニ不

失所持スル程ノ事故、実父モ何品ニ不レ限宜シキ物ハ皆與ヘ、或ハ預ケ置、又自分入用ノ何品ヲ出セヨト申付レハ即坐ニ取出シ違失スルヲナシ、民治ハ役目ニテ兎角苗守勝故、米金其他万端ノ相次郎兩人ヘ任セ置タルニ、兩人申合諸帳面其外何モ無ニ拔目ニ正シク取行ヒタリ、ケ様ノ人物故懐乱ノヲ不レ好ハ生質必然ナレト、兼テ亡父ノ志攘夷ニアリテ又実ニ身命ヲ投チタルヲ故、責テ攘夷心ノ種一粒ナリト殘シ置度申旁玉翁ノ説ヲ聞込ミ、亡父臨終ノ和歌・苗魂録ノ末数首ノ哥ヲ等モ賜ニシニコミ、前原党ノ志ハ攘夷ニアルト心得、義理ニ迫マラレ、ヤサシキ心故人ニ對シテ違背ヲ申テ出来ヌ故、実父ノ心事ヲ知リナガラ、玉翁ヘ厚ク申置テシテ出立タルハ彼是ノ心ノ程コソ哀レナリ、実父モ斯迄事ノ迫ラヌ内、諸師友ノ忠告ヲ感シ、一昨年來小太郎自分ノ志モアル事ナレハ、玉翁ノ勉ハ脱走ノ姿ニナシテモ東京遊学ヲ許シタラバ、假令大學業ハ出来ズト、責テハ非常ノ死ハ免カルヘキニ、如何ナル因果カハ分ラナシ、実ニ哀レノ至リナリ、カ、ル頼ミニ思ヒ込タル子ヘモ、親ノ情ケノ届カヌハ(以下缺)

叔父杉敏三郎傳

吉田小太郎

叔父杉敏三郎者、王父百合之助常道第三子、母則王母兒玉氏也、弘化二年乙巳十月六日、生於巴城東麓樹々亭、生聲啞、而性穎敏、面點小疤、其面貌能類先考松陰、居處進退、無常(異脱カ)人、禮儀應接、却有常人且所不及、初幼而從久保五郎左衛門、學字、其寫字摸書頗妙、而知人姓名若食物器具日用切近之稱謂、故千緒萬端、無不三下筆則通徹、自幼知人間有書可讀、甚好讀書、而獨不能通也、常侍坐父兄讀書側、默然注視不去、亦携書籍左右、喃喃習語、爲讀書狀、先考示諸友書曰、余頃嚴囚丈室、々中有先靈位、敏且暮必來位前、焚香拜禱、其口喃喃、不辨何謂、余初以爲戲也、已怪其有常不變、試微叩之、敏羞縮哀笑、把書指口、喃喃如讀者狀、且拜靈位、示有所禱、又指掩其口、勿使他人知焉、夫啞者不可讀書、已定于有生之初、而渠獨不自知焉、唯渠亦知湯藥針灸非所能治、乃禱諸先靈、其愚亦可悲已、然其禱果始于何日、吾不忍問焉、其果終于何日、亦不忍問焉、禱而不得、渠雖死不變邪、抑將更何如邪、吾益不忍問也、雖欲喻其愚止中其禱、非辭可通也、嗚呼吾之尊王攘夷、何以異于此云爾、以之推思、則可知叔父有大志、而不能遂之矣、而性至孝仁愛、比弱冠喪父、而後事母至孝、夏涼冬溫、其爲孝、不恥於二十四孝也、至親族長幼、和睦愛敬、々々老慈幼、不擇親疎遠近、愛敬人、在世三十餘年間、未嘗一見加喜怒於人、亦尊敬祖靈、祭祀供奠、常自爲之、其爲事業、潔白清淨、杉氏家風、專尊敬祖靈、爲設一室、敬祭祖靈、叔父如此、亦不宣哉、

(技カ) 枝藝巧工、能爲縫糊、其他日用、無不辨之、平生躬好潔白、故每日三四度、或五六度、灑掃室中、納什器紛亂、室中什器不在、問之則立辨之、其速如神、或數振彈衣裳、坐於靜室、幼時常出入他家、應接于人、自死前七八年、自感悟吾躬聾啞非常人、一切斷絕出入他家、常端坐靜室、爲縫糊之業、或爲祖靈祭奠之事、孜孜勉勵、未一日敢漫過、平生飲食、斟酌量度、甚精密、不好飲酒、不食膏肉、明治九年丙子二月一日夜半、卒然疾發、即時親戚侍病床、招醫員岡田氏施藥、然醫藥不奏功、遂卒、享歲三十有二、平生行狀、常爲人所稱歎、故不唯骨肉親戚哭泣、亦爲深所他人哀矣、太凡遂功者、立志確乎、私心不得奪之也、苟不遂功者、初志屈撓、私心崩於其間也、嗚呼叔父志於學確乎、真可謂富貴不能淫威武不能屈焉、天若賦以常命、使之得遂宿志、其成業果何如乎、嗟、愚姪小太郎、棄我之九日、哭泣悲哀、稽首再拜、錄之、

(明治九年)
丙子二月廿六日稿成

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟園)

野村
靖 追懷錄

解題并凡例

本書は野村和作の晩年、即ち子爵野村靖の追懷錄である、その趣旨は本文の冒頭に述べてある、明治二十六年十月十三日亡母の四十九日に稿を終つたものである、その始の松陰に關係深い部分のみを摘録した、今野村家には原稿がないので輯取家所藏の版本に據つた、

(委員 廣瀬豊)

追懷錄

不肖靖、先妣宣流院君ノ喪ニ居テ往事ヲ追懷シ、深ク孝心ノ純ナラザリシヲ悔ミ、茲ニ年月ヲ追フテ其遭遇ノ大要ヲ錄シ、一ハ以テ自ラ責ムルノ具トナシ、一ハ以テ母君高德ノ一端ヲ表シ、併セテ兒孫ヲシテ之ヲ鑑ミ、自ラ警ムル所アラシメムト欲ス、

母君名ハ滿智、村上氏、考ヲ與三右衛門、妣ヲ千代ト稱ス、世々毛利氏ニ仕フ、文化二年十月十七日、長州阿武郡福井上惣隨村ニ生レ玉フ……、

某年某月母君三戸氏ノ養女トシテ野村氏ニ嫁シ、先考一瓢園君ノ婦トナリ玉ヘリ、後故アリテ夫妻出テ入江氏ヲ嗣キ玉ヘリ……、

天保八年丁酉母君年三十三、四月五日家大兄九一幼名萬吉、後喜一ト改メ、故アリテ九一ト改メ、又杉藏ト改メ、更ニ九一ト稱ス、諱ハ弘致字ハ子遠君ヲ生ミ玉ヘリ……、

同十三年壬寅母君年三十八、八月六日不肖靖ヲ生ミ玉ヘリ、

弘化四年丁未母君年四十三、七月廿五日壽美子ヲ生ミ玉ヘリ、

是ヨリ先キ入江・野村兩家共ニ貧ナリシカ故ニ家ヲ合セテ萩土原ノ一小屋ニ住シ玉フ、父君ハ性溫厚淳朴事ニ當リテ

小心翼翼タリ、江戸又ハ地方ニ役シテ家居多カラズトイヘトモ、終始家政ヲ整理スルコトヲ勉メ苟モ忘リ玉ハズ、家大兄ハ已ニ入江氏ノ嫡子タルヲ以テ余ヲシテ野村氏ヲ嗣カシメ、且遺言シテ各其家名ヲ貶ササルコトヲ誠メ玉ヒ、母君モ亦常ニ勤儉自ラ守リテ能ク良人ノ徳ヲ補ヒ玉ヘリ、而シテ父君母君共ニ夙ニ佛法ニ歸向シ信心歡喜シ玉ヒケレハ、一家一族自ラ和氣ノ間ニ優游セリ、家大兄ハ父君ノ命ニ從ヒ、幼ニシテ早ク刀筆ノ小吏トナリ玉ヒシトイヘトモ、天資篤實志操高尚ニシテ事ヲ處スル周密、變ニ遭ウテ驚カズ、至誠人ヲ感セシムル風アリ、故ニ俗吏モ亦之ヲ重シ或ハ化セラレテ清吏トナルモノアリ、初冬嶺福原彌吉郎先生ニ從ヒテ書ヲ讀ミ、來原良藏・中谷正亮・佐世八十郎前原一誠・猶崎彌八郎・李家文厚等ハ皆同窓ノ親友ナリ、又劍ヲ村上惣馬ニ學ビ後、松陰吉田先生ニ從ヒ松下村塾ニ遊ヒ玉ヘリ、余ハ幼時大患ニ罹リ、年十二三ニ至リ始テ健ナルコトヲ得タリ、而モ天質輕躁志慮淺薄ニシテ事ヲ誤ルコト固ヨリ多カリシモ、幸ニ人トナルコトヲ得タルハ實ニ父母師兄ノ愛慈教誨ニ由レルナリ、

嘉永六年癸丑、母君年四十九、六月某日墨使浦賀ニ來ル、

安政二年乙卯母君年五十一、二月十六日朝父君遽ニ腦充血症ニ罹リ半身不隨危篤ニ瀕シ玉ヘリ……

安政三年丙辰母君年五十二、是春余馬關新地營所ニ役ス、未タ數日ナラズシテ同僚ノ誤ル所トナリ共ニ家ニ放還セラレ、然レトモ余年尙ホ少ナルヲ以テ官其罪ヲ問ハズ、七月廿三日父君再ヒ腦充血ヲ發シ翌廿四日終ニ醫藥効ナクシテ没シ玉フ、時ニ家大兄ハ廿歳余ハ十五歳壽美子ハ十歳ナリ、……、是冬余砲術家森重政之進先生ニ從ヒ馬關引島ニ到ル、

安政四年丁巳、母君年五十三、是春余引島ヨリ歸ル、八月家大兄江戸ニ于役ス、書ヲ母君ニ贈リ玉フ毎ニ母君ハ其文意ノ懇切ナルヲ喜ビ玉ヘリ、

安政五年戊午、母君年五十四、七月某日家大兄命ヲ承テ國ニ歸リ家ニ留ルコト繼ニ一句ニシテ再ビ江戸ニ到リ玉フ、十月某日余モ亦命ヲ承テ京都ニ赴ク、十一月某日家大兄國ニ歸リ十二月廿六日罪ヲ獲テ家ニ幽囚セラレ玉ヒ、余モ亦京都ヨリ放還セラレテ同月二十八日萩ニ歸リ家ニ幽セラル、蓋シ墨使始テ浦賀ニ到リシヨリ、各國ノ使舶來朝シ和戰開鎖ノ論、尊王攘夷ノ説大ニ朝野ニ起ルトイヘトモ、三百年太平ノ餘習天下ヲ擧テ因循苟且シ身ヲ挺シテ之ニ當ルモノ少シ、是時ニ當リ先師松陰先生松下塾ニ在テ志士ト同ク將ニ爲ス所アラムトス、然ルニ藩政府ノ議ト遂ニ相協ハズ、政府命シテ獄ニ投ス、家大兄等同志ノ士八人其罪名ヲ聞カムト欲シ、政府ノ重吏某々ヲ其家ニ歷問セシモ、或ハ病ニ托シテ面接ヲ謝絶シ、或ハ倉皇家ヲ脱シテ之ヲ避ケタリ、蓋シ政府之ニ答ル辭ナキヲ以テナリ、明日八人皆坐シテ家ニ囚ハル、余ハ京都ニ在テ伊藤傳之助及田原莊四郎ト共ニ先師ノ策ヲ奉ジ、將ニ三位大原聊ヲ誘ヒ國ニ下リ吾公ニ面議セシメ、以テ國是ヲ一定セムト謀リシニ、莊四中コロ反覆シテ之ヲ邸監某ニ密告シタルニ因リ、余及伊藤ハ直ニ京都ヲ逐ハレテ事此ニ至レルナリ、余兄弟已ニ國事ノ爲ニ罪ヲ得タリ、其ノ罰ノ輕重固ヨリ測リ知ルヘカラストイヘトモ、母君ハ太タ之ヲ悲ミ玉ハス、余京都ヨリ歸リテ見エタルトキ先ツ生姜糖一袋ヲ把リ余ニ與ヘテ曰ク、此レ一昨日吉田先生獄ニ行カル、途次特ニ輿ヲ茅門ニ枉ケテ手ヅカラ賜ハリタルモノナリ、汝モ亦宜ク之ヲ味フヘシ、汝等國典ヲ犯セルハ固ヨリ罪アリ、然レトモ君ニ忠シ國ニ報ユルヲ以テ罪ニ當ラバタトヒ重刑ニ處セラル、モ寧ソ痛ンヤ、汝

等吾レヲ以テ念トナスコト勿レト、蓋シ母君ハ余ノ年少ニシテ罪ヲ獲タルヲ憐ミ却テ余ヲ慰諭シ且獎勵シ玉ヒシナリ、時ニ余年十七、

安政六年己未、母君年五十五、正月廿五日余兄弟同時ニ放免セララル、政府カ家大兄ニ與ヘタル命令書ニ曰ク、余ニ與タルモノ紛失セリ、

去ル十二月五日杉百合之助育吉田寅次郎御聞込之趣有レ之百合之助ヘ借牢之儀相願候様内意被ニ仰付ニ候處、同夜右寅次郎御聞込罪狀承り度由、岡部富太郎其外數人申合一同物筋ヘ罷越候節、右面々ニ隨ヒ夜陰多人數一同驅廻リ、御作法有レ之候儀ニ候處彼是不届之次第ニ候、且匹夫ニシテ諸士ニ交ハリ右躰之所業甚以不レ謂事ニ候、依レ之組ヘ被ニ預置ニ候、此餘被ニ仰付ニ方モ有レ之儀候得共各別ノ御了簡ヲ以テ無ニ別條ニ被ニ差許ニ候條、向後不心得之儀無レ之様屹度相慎可レ申事、

兄弟當時卒族ノ身ナルヲ以テ命令書中、匹夫ニシテ諸士ニ交ハリトノ語アリ、今日ヨリ之ヲ見レハ眞ニ唉フヘシトイヘトモ、封建ノ時代ニ在テハ階級太タ嚴ナリシヲ以テ特ニ之ヲ掲ケタルナリ、亦以テ政府及世人カ余兄弟ノ舉動ヲ目シテ僭越非常トナセルモ亦理ナキニ非ズ、隨テ母君ノ境遇ヲ想ヒ見ルヘシ、

余兄弟放免セラレタル時ニ當リ、國家ノ大事既ニ目前ニ迫ルヲ以テ之ヲ默々ニ付スヘカラズ、二月廿四日余ハ國ヲ脱シテ京都ニ走ル、是ヨリ先キ正月月中旬余兄弟幽囚中播州ノ人大高又次郎・備前ノ人平島武太郎^(三)萩ニ來リ、竊ニ政府ノ員ニ對面セムコトヲ乞ヒシモ其望ヲ達スルコト能ハス、因テ余兄弟ヲ家ニ訪ヒテ來萩ノ事由ヲ傳ヘ、併セテ三位大原

卿ノ意ヲ致セリ、蓋シ卿ハ痛ク幕府ノ專横ヲ憤リ、深ク王室ノ式微ヲ歎キ、將ニ吾公ニ依頼スル所アラムトス、而モ政府遂ニ之ヲ見ルコトヲ肯セサルヲ以テ、二士萩ヲ去ルニ臨ミ余ニ一書ヲ投ジ、來ル三月藩公參府ノ途上伏見ニ於テ直ニ要請セムトスル意ヲ述ヘタリ、此時ニ當リ松陰先師ハ吾公參府ノ不義ナルヲ説キテ之ヲ止メムト欲シ、屢謀ル所アリシトイヘトモ事皆敗ル、偶大高等來リテ卿ノ意ヲ致シタルニ由リ、先師更ニ策シテ謂ヘラク、同志ノ士上國ニ脱走シ大原卿ト共ニ吾公ノ駕ヲ伏見ニ要シ、公ヲシテ京都ニ上リ親ク天顏ニ咫尺シ以テ大事ヲ定ムルコトヲ得セシメムヘシト、乃チ東走ノ議ヲ發シ諸友ニ示サル、其文ニ曰ク、

(已未文稿 讀ニ子遠等東走ノ六箇條ニ同文)

既ニシテ公駕發轍ノ期已ニ迫ルトイヘトモ、諸友一人能ク之ニ應ズルモノアラス、家大兄奮激自ラ義ニ赴カムト欲シ玉フ、然ルニ母君年漸ク老ヒ、家計益乏ク、而シテ余及壽美子ハ年尙ホ少ナルヲ以テ、或ハ慈顔ヲ視或ハ弟妹ヲ慰ミ玉ヒ、心神煩悶ノ狀面ニ溢ル、蓋シ此行往テ死スルアリ生テ還ル望ナシ、余之ヲ見テ亦情ニ堪ヘス、二月廿三日其行ニ代ラムト乞フ、家大兄之ヲ聞テ血涙先ツ迸リ、情意切迫言フコトヲ得玉ハス、書シテ以テ東行ヲ讓リ、且今日ヨリ後吾レ誓テ母君ノ心ヲ慰メ孝道ヲ盡スベシ、汝憂フルコト勿レト示シ玉フ、然ルニ余若シ此行ヲ母君ニ告クトキハ母君驚愕シテ之ヲ允シ玉ハザランコトヲ恐ル、家大兄曰ク、此行ハ實ニ大義止ムコトヲ得ザルニ出ツ、母君ノ賢ナル之ヲ告ケバ必ス許シ玉フベシト、乃チ母君ニ見エテ委ク事情ヲ説キ、且曰ク、タトヒ和作^(ル脱カ)子ノ罪ヲ得ルモ兒ノ在ルアリ切ニ尊念ヲ勞シ玉フコト勿レ、兒ハ從來ノ狂妄ヲ止メ、謹ミテ官ニ仕ヘ勉メテ尊念ヲ慰ムベシ、況ヤ和作ノ行、君國

ノ爲ニス、天道豈之ヲ棄テ玉ハンヤト、母君徐ニ之ヲ允シ玉ヒ曰ク、忠義ノ行眞ニ止ムコトヲ得ズ、唯毎事精思シテ後ニ行ハシコトヲ祈ルノミト、余已ニ允許ヲ蒙リ翌廿四日墓門ニ登リテ先考ニ申告シ、歸途桂小五郎木戸ヲ訪テ二十金ヲ獲之ヲ旅費ニ充ツ、是レ家大兄曾テ此行アルヲ期シ、母君ニ請テ家祿ノ内若干ヲ賣却シテ其金ヲ桂ニ托シ置キ玉ヒシナリ、午後膝下ヲ辭ス、時ニ余年十八ナリ、母君門ニ送リ注意シテ事ヲ爲セヨト一言シ玉ヒシノミ、蓋シ已ニ再會ノ期シ難キヲ量リ玉ヘルガ故ニ、若シ別ヲ惜ムカ如キコトアラハ則チ壯圖ヲ挫折セシムコトヲ恐レテ多言シ玉ハサリシナリ、

余國ヲ去リシ後二月廿七日、政府家大兄ヲ獄ニ投スルノ命ヲ下ス、其罪名ヲ附セズトイヘトモ余ノ事ニ坐セラレタルヤ明カナリ、家大兄ハ之ヲ聞キ憤懣胸ニ塞リ、母君ハ忽チ夜來ノ痲痺再ビ神ヲ衝ク、偶、山縣小輔後狂介ト改メ更ニ有朋ト稱ス來リテ坐ニ在リ、母君ノ老ヒ玉ヒ壽美子ノ幼ナルヲ見テ憐悃ノ情ニ堪ヘズ、直ニ政務役前田孫右衛門ニ到リテ、家大兄ノ母君ニ奉侍セムト欲シ玉ヘル至情ヲ陳シ、以テ寬恩アラムコトヲ乞ヒ、併セテ政府ノ舉措ヲ詰問シタルモ前田終ニ確答セズ、山縣還リ來リ家大兄ノ友人岡仙吉水及親戚三戸甚之助等ト共ニ母君ヲ慰撫シタルニ由リテ母君家大兄ハ大ニ力ヲ得玉ヘリ、然リトイヘトモ家大兄ハ終夜耿々眠ルコト能ハズ、外ハ阿弟ノ死ニ赴キシヲ傷ミ、内ハ母君ノ壽ヲ縮ムルヲ哀ミ、悲憤訴フル所ナク終天ノ恨ヲ抱キ玉ヘリ、翌廿八日家大兄政府ニ上ル書ヲ作り、反覆哀痛ノ情ヲ述テ母君ノ病ヲ看護スルカ爲ニ、投獄ノ期ヲ緩クセラレムコトヲ乞ヒ、且書ヲ小田村伊之助榊取寄セテ其周旋ヲ依頼シ玉ヒ、恩貸ノ命アラムコトヲ渴望シテ粒食咽ヲ下ラス、時ニ母君ノ慈顔ヲ仰キテ覺エズ號泣シ玉フニ至ル、而シテ薄暮

命アリ遂ニ情願ヲ允サレス、小田村ノ答書モ亦到ラス、此夜五ツ時揚屋ニ投セララル、家大兄將ニ家ヲ辭セムトシ母君ニ白シテ曰ク、兄弟誠ニ不孝ナリ、曩ニ兄弟忠孝ヲ分任シテ兒實ニ尊意ヲ安ズルヲ務メトナセリ、而シテ今ヤ其志ニ背ク、遺恨限ナシ、然レトモ兒誓テ一度尊意ヲ安ズルヲ期スト、母君曰ク孝志嘉スヘシ、切ニ汝カ吾カ心ヲ慰ムル日ヲ待ツト、此夜途ルモノハ官命以テ來ルモノ三人及三戸甚之助・岡仙吉・吉田榮太郎後年丸ト改ムナリ、母君家大兄ヲ送テ曰ク、吉田先生スラ且獄ニ在リ汝輩此般ノ事アルハ怪ムニ足ラスト、然レトモ母君ハ家大兄ニ別レシ後起ツコトヲ得玉ハサルコト實ニ三日ナリシト云フ、以上一段家大兄投獄日記ニ據ル

此時ニ當リ、松陰先師ハ野山獄ニ在テ勇氣凛々自ラ任シテ倒瀾ヲ挽回セムトス、書ヲ飛シ家大兄ニ寄セテ其來獄ヲ賀シ、且曰ク、足下以テ不朽大事、讓ニ阿弟、阿弟喜而受レ之、而天猶欲レニ不朽足下、足下亦喜而受レ之耳、但慈母之情可憐、然ニ子不朽、母亦不朽矣、人生歎忽、百年夢幻、唯人參ニ天地、異ニ動植、去ニ不朽ニ更無ニ別法ニ矣、又曰、足下兄弟與レ吾一咲入レ地、又最後ニ一大快事也、云々、然ルニ家大兄ハ已ニ孝ヲ以テ自ラ任シ、復忠義ヲ講スルニ違アラス、故ニ復書シテ母君ニ奉仕セサルコトヲ得サル事情ヲ述ヘ、副ルニ徐庶ヲ詠スル詩ヲ以テス、曰ク
情懷到レ母不堪悲、方寸鬼籌忽亂絲、恩義何邊圖報效、趨歸膝下作嬌兒、
且曰ク先生若シ意ニ適ハサレハ絶交セヨト、言詞嚴正、情意惻怛ナリ、先師大ニ其至誠ニ感シ、再ヒ家大兄ニ寄スルニ左ノ書ヲ以テセラル、

(已未文稿 復子遺ニ同文)

又先師ハ知己難言ノ文ヲ著シテ家大兄當時ノ境遇ヲ掲ケ玉ヘリ、今其數節ヲ抄録ス、

(己未文稿 知己難言ニ同文)

先師是等ノ書ニ由ルモ當時母子ノ衷情ヲ想察スルニ足レリ、

余已ニ國ヲ脱シテ播州龍野ニ到リ、某氏ヲ訪テ大高平島ヲ會スルコトヲ托ス、蓋シ曾テ二子ト密約アレバナリ、時ニ二子已ニ去テ京都ニ在リ、則チ直ニ上京ニ面シ、且大原卿ニ謁シテ伏見要駕ノ事ヲ謀リタリ、然ルニ卿ハ時機可ナラサルモノアリトテ其策ヲ止メ玉ヒ、二子モ亦卿ノ意ニ同ス、余進退維谷リ、去テ大坂ニ至リ萩原廣道翁ノ家ニ潜伏ス、一日京都藩邸吏福井忠次郎、邸監ノ意ヲ承ケ來リ、余ニ説クニ追捕ノ吏已ニ迫リテ復免ルコトヲ得サルカ故ニ、速ニ出テ縛ニ就クノ可ナルヲ以テス、當時余年少ニ力微ニシテ他ノ良策ヲ知ラズ、終ニ其言ニ從ヒ縛ニ就キ護送セラレテ三月廿六日夜萩ニ達シ、揚屋第二室ニ投セララル、鎖鑰深嚴、圍圍暗黒、四顧蕭然、聞トシテ人聲ナシ、偶隣室ヨリ低聲余ノ名ヲ呼フモノアリ、其面ヲ見ルコト能ハサレトモ已ニ家大兄ナルコトヲ知リ、悲哀ノ情言ニ先ツ、家大兄モ亦啼泣嗚咽シ玉ヒ、徐ニシテ曰ク、汝去リシ後三日ニシテ吾レ投獄ノ命ヲ受ケタリ、則チ母君ノ爲ニ切ニ恩貸ヲ乞ヒシトイヘトモ得ルコト能ハス、今汝歸レリ、蓋シ吾レノ赦歸ハ必ス近キニアラム、吾レ誓テ母君ノ意ヲ安ズベシ、汝復之ヲ憂フルコト勿レト、爾後日夜家大兄放免ノ恩命ヲ待チタルモ、嘗ニ之ヲ得ザルノミナラズ、家大兄ヲ他房ニ移シテ復相語ルコトヲ得サラシム、是ニ於テ兄弟屢陳情ノ書ヲ政府ニ上リテ母君ノ爲ニ恩命ヲ乞ヒタルモ皆省ミラレス、此年五月廿五日先師拘ハレテ江戸ニ到リ十月廿七日幕府ニ殺サレ玉フ、抑戊午ノ年救諭汗發シ海内靡然トシ

テ志氣漸ク振ヒシニ、井伊大老志士ヲ驅テ斬流ニ處セシヨリ、天下ノ人心一朝ニシテ沮喪シ、己未ニ至リテハ諸藩大抵幕府ノ意ヲ迎ヘ、再ヒ舊習ヲ墨守シテ太平ヲ假裝ス、吾藩ノ如キモ滿城ノ人士余等ヲ目シテ亂民トナシ、近隣故舊皆奇禍ヲ受ムコトヲ恐レテ近クモノナシ、故ニ母君ハ幼稚ノ壽美子ヲ携テ憐憫タル月日ヲ送り玉ヘリ、

余兄弟ノ獄ニ在ルヤ、官其食ヲ給セサルカ故ニ、藩制疑獄ノ囚ニハ食ヲ給セサルヲ例トス、母君日々獄ニ食籠ヲ贈リ玉フ、家大兄ノ陳情書ニ云ヘルアリ、臣誠哀ニ老母笄々、日饋ニ于岸獄、兄弟之事、寧嘗一日忘之、且家素貧乏、艱苦不レ一、墳墓之洒掃、及春米耘園、母皆親レ之、昔者、楚王英之獄、吳郡陸續對食、以ニ截肉斷蔥、知ニ母來ニ而悲泣、光武聞レ狀、乃赦レ之、臣之惻誠、雖ニ萬々不レ及レ續、而兄弟之獄、則母之憂感、其過ニ于陸母ニ可レ知也、臣每思レ之、食不能レ下咽矣、亦以テ母君ノ艱難ト家大兄カ母君ヲ思ハル、至情ヲ知ルヘシ、

官已ニ衣食ヲ給セズ、皆之ヲ母君ニ仰ク、而シテ牢獄汚穢、塵垢充滿セルカ故ニ母君時々獄ニ來リ兄弟ノ衣ヲ携ヘ家ニ歸リテ之ヲ披クニ當リ、臭氣鼻ヲ衝キ虱蚤坐ニ滿ツ、輒チ之ヲ見テ囚獄ノ苦楚ヲ想像シ涕泣ニ堪ヘ玉ハズ、漸クニシテ手ヅカラ之ヲ洗滌シ玉ヘリ、且家計益貧困ニ迫リ、日用ノ資ヲ缺キ玉フトイヘトモ、親戚故舊之ヲ省ル者ナシ、之ガ爲メ母君ハ平素惱ミ玉ヘル瘰癧及頭痛ヲ忍ビ、勉メテ紡車ヲ賃シ纒ニ若干錢ヲ獲テ以テ其闕乏ヲ補ヒ玉ヒ、家大兄モ亦獄中竊ニ傭書シ賃ヲ獲テ獄費ヲ補ヒ玉ヘリ、獄中茶一瓶三文、其他ノ費用之ニ準ス、余初之ヲ知ラス、一日獄卒ヲ喚テ菜肉ノ稍佳ナルモノヲ購ヒ來ルヘキコトヲ命ス、家大兄之ヲ聞テ余ヲ諭シ、具サニ書シテ家計ノ困迫母君ノ勞苦及日々傭書ノ事ヲ告ケ玉ヘリ、此時余始テ母君及家大兄ハ余ノ尙ホ少ナルヲ愍ミ、未タ曾テ余ヲシテ家計困迫ニシテ母子勞苦ノ狀斯ノ

如キニ至リシコトヲ知ラシメ玉ハサルヲ知り、且感シ且慙チテ大ニ之ヲ家大兄ニ謝シ、爾後余モ亦備書ヲ以テ獄中ノ日課トナセリ、然レトモ家大兄ハ大抵日々十葉以上ヲ寫シ玉ヒ、余ハ纔ニ五葉ニ充タザル日多シ、而シテ楷書ハ一葉五文片假名ハ三文ノミ、故ニ家計ヲ補ヒ母君ノ艱苦ヲ減ズルニ由ナカリシモ母君ハ以テ意トナサス、兄弟カ忠君報國ノ誠意ヲ嘉シ、自ラ慰メ且勵ミ玉ヘリ、家大兄獄ニ投セラレ玉ヒシ後數日ナラスシテ、先師ヨリ母君ニ贈リ玉ヒシ書アリ、左ニ録ス、此書ハ母君歿シ玉ヒシ後余等其手文庫ノ内ニ藏メアルヲ見出セリ、數十年ノ間尙ホ自ラ之ヲ藏シ玉ヒシハ亦以テ能ク先師ノ意ヲ諒セラレタルコトヲ見ルニ足レリ、

(第六卷第六六九號書簡ニ同文)

又先師記事ノ文ニ曰ク

(己未文稿 紀江母事ニ同文)

萬延元年庚申、母君年五十六、三月三日井伊大老櫻田ノ變アリ、閏三月廿日政府余兄弟ヲ放免シ家ニ歸ラシム、回顧スルニ、在獄一年有餘ノ間、政府曾テ一回ノ審問ヲ開カス、而シテ放免ノ命令書ニ曰ク、

御聞込之趣有レ之揚屋ニ被_レ入置候處、御糺明之上ハ屹度被_レ仰附ニ事モ有レ之候得共、御昇進目出度御時節、且數月揚屋へ被_レ入置候間、偏ニ格別之御慈悲ヲ以テ此餘被_レ遂ニ御了簡ニ宿下ケ被_レ仰付ニ候條、向後不心得之儀於_レ有レ之ハ重々可_レ被_レ相答ニ候事

(中略)

文久三年癸亥、母君年五十九、正月廿一日政府家大兄及余ヲ擢シテ士班ニ列セシム、時ニ余ハ京都ニ在リ、家大兄ハ岸見ヨリ萩ニ到リ恩命ヲ拜シ給フ、其命令書中、先年吉田寅次郎ニ令_レ從學一兼而尊王攘夷ノ正義ヲ辨知シ、心得宜敷云々ノ語アリ、己未二月及庚申閏三月、余兄弟ヲ幽囚セシ意ニ比スレハ、前後雲泥ノ差アリ、……………

(以下略)

(東京市榊取三郎氏藏活版本 校合濟)

天野
御民
松下
村塾
零話

杉民治翁手翰(翁は松陰先
生の實兄)

松下村塾零話御垂示一讀愉然往昔を追懷仕候能瑣事迄御記憶詳細御記載被_レ成深く奉_ニ感銘_ニ候一本寫取置度候へ共不_レ得_ニ其暇_ニ候に付一應完璧_(體)仕候頓首

明治三十年九月廿三日

杉民治

天野御民様 梧下

(再版以後のものは杉翁の注意によりて訂正したものである、本書は故らに初版未訂正のものを原本とした、これ訂正の箇所を明かにし、世の傳説を正さん爲である、五四二頁「予又曾て之を聞く云々」参照)

(委員 廣瀬豊)

松下村塾零話

予は幼時水戸の會澤安翁が及門遺範を讀て、其師藤田幽谷先生の事蹟を詳述せられたるに深く感したりき、頃者偶然此事を思出して、松陰先生の松下村塾に於ける事ともを記述せんと思ひ立ちしか、奈何せん、予か先生は從學したるは僅に一年有餘のみ、加之予は此時年甫十七八にして、何事も意に留めず、且先生没後已に殆と四十年、見聞したることも多くは遺亡したり、左れとも今世人の多く知らざることを思ひ出る毎に、左に記載して天下後世に傳へんと欲す、又以て先生の平素と村塾の模範の一斑を伺ふに足らん、豈敢て會翁の及門遺範に倣ふと謂ん哉、

序ては記す、本篇載する所惣て順序次第なし、唯思ひ出るに隨て之を書き列ねたるものなり、且予の文辭は拙きは固より世人の知悉せらるゝ所なり、今更辨する迄もなし、看者幸に之を諒察せられよ、

明治三十年松下村塾の晩生

天野御民謹識

一 村塾は先生の叔父玉木翁〔文之進と稱す〕生徒を集めて教授せられたる時其堂は扁名したるものなり、翁仕に就に及て、先生の外叔父久保翁〔多くは五郎左衛門と云つた五郎右衛門と稱す〕邑の子弟を會し素讀筆札を授けられし時復た其塾號を襲用せり、先生安政二年十二月獄を免されて家は鋼せらるゝ、（安政五年の誤である）翌年七月許されて家學〔山鹿流の軍學〕を門人に教授するを得たり、是に於て來り學ぶ者頗る多し、（安政三年）九月先生松下村塾記を作る、因て其号遂に先生の教場は移轉せり、村塾は掲る松下村塾と書したる額は梅田雲濱翁の筆なり、

一 先生の學固り朱子學を主とすと雖も、敢て一に偏せず、其論語を講するに當ても、諸注一見の便を以て、時としては論語徵集覽を以てし、或は古注或は仁齋又は徂徠王陽明の説を交へ、之に己の發明説を加へ、取舍折衷せられ、其餘考證を主とせり、其發明する所多く之に據れり、

一 國朝の學に至ては、本居翁の古事記傳を主とせらるゝれとも亦一に偏せず、水戸學山陽翁の説も採り、或は野乘に徴せらるゝことあり、

一 西洋の事に至ては、清人魏源の海國圖志を初め、當時有らゆる譯書は悉く讀まれざるなし、

一 先生の書を解釋せらるゝは、専ら文法より入る、經書の如きも講會の時屢々文法を説かるゝことあり、論語學而第二章、其爲人孝弟の章を以て、詩の起承轉合を説き示さるゝ如き類多し、鹽谷世弘曾て先生の著孫子評註を見、其文法より解釋を下されたるに深く感服したりと云ふ、蓋先儒多く意義の解釋を先にして誤謬少なからされはなり、

- 一 先生徹夜讀書せらるゝことなし、然れども經書の講會歴史の會讀等夜に於て爲すときは、往、鷄鳴に達することあり、
- 一 先生睡眠の時間極めて短かし、故に門人書を授るに當り、晝間と雖も疲勞して覺えず眠らるゝことあり、爾るときは暫時机に伏して一睡し、忽ち寤て復た書を授く、
- 一 先生の歴史を讀まるゝには常に地圖を照合し、古今の沿革彼我の遠近を詳す、依て地理を精通せり、毎ねに曰く、地を離れて人なく、人を離れて事なし、人事を究めんと欲せば先づ地理を見よと、
- 一 先生毎に門人を諭して曰く、書を讀む者は其精力の半を筆記に費すべしと、故に先生は詩文稿の外抄録積て數十冊に及べり、其指の筆の當る所固くして石の如し、諺に云ふ「タコ」か出來き居れり、猶ほ裁縫を専らとする婦人の指に所謂豆の出來るが如し、
- 一 先生門人作文は勸奨せらるれども、詩作は強て勵されず、蓋文章を能せざれば己の意を達すること能はずと云ふもあり、詩は多くは風流に屬すべしなり、曾て曰く詩聖と稱する杜子美の句に、穿花蝶蝶深々見、點水蜻蜒款々飛と、是等の閑言語をなすの暇なしと、古人も云たることありと話されたり、
- 一 先生時間を惜み、虚禮を貴はず、曾て門人岡田耕作正月二日書を授る爲め塾に至る、先生特は文を與へて之を賞せられたり、耕作時は年甫めて十歳、
- 一 予は先生に從學する者の中は於て、最も記憶力に乏しき者なり、一日先生は問て曰く、晩生記憶極めて薄し、例へ

は今日讀みたる書も、明日は忽ち遺忘す、如何して可らんや、先生曰く、夫れは至て能きことなり、凡そ讀書は一時は通曉又は記憶せんことを望むべからず、例へば、初は十八史略、次きは綱鑑、又其亞きは通鑑と追ひくゝ繰返し、讀むときは自然意義も解け漸々事實も諸記するに至るなり、始めより記憶力強き者は却て之を恃み、復習を怠り、遂に記憶薄き者にも劣るに至るものあり、學問にあれ事業にあれ決て急ぐ可らずと、

一 舊長州藩學校の級を四等に分つ〔小學校は此外たること勿論なり〕、曰く大學生・入舍生・居寮生・舎長是なり、或時大學生若干名拔擢せられて入舍生を擧る、之は加はらざる者大に不平を抱き、教員を迫て之を論んと欲す、先生之を聞て、其二三人を戒め諭して曰く、足下等將に云々せんとせと、之れ甚た宜しからず、若し教員をして果して不公平あらんか足下等愈々勉強して選り遇ひし者の上に出ることを志すべし、然るときは教員焉んそ其儘を爲し置んや、區々たる等級何ぞ争ふに足らん、且足下等已に學校に入て道を學ぶ、我身は反省することを求めずして騒々しくも教師を逼り議論せんとするは悖れるの甚きなりと、不平の生徒之を聞て大に悟る所あり、其事を止めり、

一 先生絶て書畫骨董の娛樂なし、其未だ塾を建する前、杉の家に在て諸生を教授せらるゝや、壁間常に木原松桂老人の書きたる三餘讀書七生滅賊の一幅を掲たるのみにて、他と取り換へられたることなし、塾中には固り書幅の掲る所たになし、

一 先生酒を飲まず、煙草を喫せず、〔事實上相違がある、丁巳編室文箱折、煙管記参照〕一日門人と煙草の無用にして且害あることを論ず、是に於て高杉晋作等大に感奮し其坐に於て煙管を折り復た用ひず、又深く諸生を戒めて圍碁將棋等を禁せられき、

- 一先生最も婦人教育に熱心し、常に其良教書を愛ふ、時に先生の外叔父久保翁隠居して詩書筆札を以て邑中の子弟を教授す、先生乃ち門人富永有隣をして曹大家の女誡七篇を譯述せしめ、之を翁に致して子女に授けしむ、
- 一先生毎ねに門人に諭して曰く、凡そ學問は一に專にして精通せんことを要す、決て雜駁に涉るへからず、晋の杜預か左氏傳に於る、宋の司馬光か資治通鑒に於る、本居宣長か古事記に於る、皆學生の心力を之に盡せり、故に此三氏は假令他の書を読むも皆其目的たる書の爲めに爲し、又他の著述あるも悉く其の餘力に出るのみ、故に其説明確にして卓越なること後人の得て及ぶ所に非すと、又嘗て經史子集皆を武教全書〔先師の家學山鹿流の兵書なり〕の註釋なりと云はれたるも、蓋又其意なり、
- 一先生毎ねに門生に語て曰く、吾深く弘法・日蓮等の行爲を偉とす、蓋彼等の奉ずる所の佛法を善とするに非らず、唯彼等は其信する所の法を引めんか爲めは奈何なる艱難をも厭はず、又毫も死生を顧す、其勇膽剛氣能く尋常人の企て及ぶ所非ず、是を以て能く一宗を開き、永く後人の尊崇する所と爲れり、惣て一業を成んと欲る者は此勇奮果敢なかる可らずと、
- 一先生常は諸生を諭すに、毛遂の公等碌々人に依て事を成すの語を誦し、之に加るに韓退之か伯夷頌の獨立獨行世の毀譽褒貶を顧さる氣魄なかる可らざるを以てせられたり、
- 一先生嘗て予を謂て曰く、子は冷泉古風大人の男なり、宜しく國學を修めて乃父の遺志を繼へし、然れとも今の和學者なる者か頑固にして奇怪を説くは吾の取らざる所あり、之を矯るには吾に従て漢學を爲すに如かず、博く學て偏

せざるこそ、學者の本領なれと、其公平にして己か學派を異なる者を忌むること此の如し、

一先生嘗て門人に語て曰く、支那の金聖歎の水滸傳を著すや、百餘の人を以て組み立たり、我邦の馬琴か八犬傳を著すには僅か八名を以て編成せり、是れ馬琴の力優れる所なりと、

一先生爲永春水か著す所のいろは文庫を讀て其評を下せり、惜ひ哉、今其原稿を紛失せり、予唯其一を記憶せり、曰く、狂訓之狂何足_レ以爲_レ調と〔春水は狂訓亭と稱す〕、是れ其概評と見て可ならん、先生讀書の該博にして、小説と雖も等閑に看過せざること此の如し、

一友人馬島春海君、予の爲めに語て曰く、吾十六七歳の頃瀧彌太郎氏と共に村塾に詣り、始て先生に見みへ、束修を行ふ、曰く謹て教授を乞ふ、答て曰く、教授は能はざるも、君等共に講究せんと、已よして辭し去る、先生送て昇降口に至る、吾等少年に對して其謙遜なること此の如し、越て二日の夜、瀧氏と塾に至り通鑒を會讀に、已よして寅鐘〔午前四時〕を報す、先生曰く今から寐るも無益なり、君等は詩を作るか、請ふ韻を分んと、時窮陰は屬す、各巨燧に仰臥して詩を按す、暫して先生韻字本を取り數次忽ちよして長篇を賦す、其時を惜み且勉強せらるること此の如しと、

一安政の頃、僧月性萩城より來り各寺に於て説教を爲し、専ら尊王攘夷の大義を講演す、先生予輩年少生徒をして行て聽聞せしめ、以て志氣を鼓舞せしむ、

一先生嚴冬乃候と雖も襦袢袴袴羽織乃外他を襲用せられたる事なし、蓋寒暑に身を馴らし、豫め事ある日を慮れるな

り、
一先生諸生に諭して曰く、書を読んで己か感^(手股カ)る所は抄録して置へし、今年の抄は明年の愚とあり、明年の録は明後年の拙を覺へし、是智識の上達する徴なり、且抄録は詩文を作るに古事類例比喩を索引するに甚た便利なりと、之より由て門生皆先生に倣ひ、讀書の際所感あれば紙を裂て唾を以て本の上欄に貼附し、一冊を讀み了る毎に別冊に抄録するを常と爲せり、

一先生門人の稍々日本外史の如きを讀み至れば勉めて無點本を讀しむ、因て譬を設て曰く、夫れ盲者には勉て自ら杖を突て獨歩せしむへし、常は人より手を引れて行くときは終に獨歩すること能はざるに至らん、今や無點本を讀む者も初の間は難を覺え讀みを誤ることも有らん、然れとも後日力を得ること甚だ多しと、

一先生毎ねは論すらく、人は到底忠孝兩全なること能はずと、蓋密に察^(手股カ)る所先生東北出遊は一跌し、海外航行は再跌し、常は父母兄弟は憂苦を被らしめたるより由るに非らざるか、然も先生の君國は忠にして又其名を天下後世に揚げ、以て父母を顯すのみならず、兄弟親族の名譽をも揚げたるは實は忠孝兩全なりと謂へし、

一予曾て之を聞く、森田節齋翁嘗て曰く、吾門下は於て及はざる者三人あり、吉田寅次郎の膽其一なりと、

一予又曾て之を聞く、先生壯年外出するに當て多く書籍を懐にせり、故に背章毎ねは左肩に偏す、又平素捻紙を以て髻を束ねりと、其邊幅を飾らすして學問に精勵なること慨ね此の如しと、(この上欄に、吉田康三の筆らしく、相違無實と書いてある、以後新版のものはこの項なし、本巻補遺杉民治より吉田康三宛書簡中、この項削除の事あり参照)

一先生門人に書を授るに當り、忠臣孝子身を殺し節^(手股カ)殉^(手股カ)る等の事に至るときは、滿眼涙を含み、聲を顫し、甚きは熱淚點々書に滴るに至る、是を以て門人も亦自ら感動して流涕するに至る、又逆臣君を宥ますか如きに至れば、目眦裂け、聲大にして、怒髪逆立するもの、如し、弟子亦自ら之を惡むの情を發す、

一先生の國事を盡力せらるゝは、天下の同志知己又は門人の各地に遊歴する者と、互は風説事情細大となく通報し之を飛耳長目と題せる書冊を編纂せり、故は身一室を出して京坂江戸其他各地の形勢を詳悉し、隨て之か講策を施さる、其飛耳長目は即ち今の新聞こそ、

一先生の交際極めて廣し、敢て異同を撰はず、故は單に學者は止らず、醫師あり畫家あり武術家あり神官僧侶あり、農工商は熱心又は熟達する者、凡そ一藝一能は秀てたる者は皆先生の家に入らせざるはなく、遠隔の人は常に書信を以て往復せり、

一大津郡に烈婦登波なる者あり、千辛萬苦して父及び夫并は夫の弟妹四人の仇を報す、蓋登波は宮番と稱する者にして往昔は非人と伍を同す、先生其卑きも顧す、招て之を家致し、其節義を賞譽し、爲めは其傳を立つ、門人其高義を感じ、各々競て登波を招き、或は之を饗し、或は之を物を贈り、或は之か書を求むに至る、

一先生獄を免されて其父杉百合之助翁の家を錮せらる、後ち其門人を教授することを許さる、依て其家事を助る爲め米を白す、凡そ萩地方の米を舂く器は臺柄と稱し、中央は鳥居といふものあり、之を持って體を扶く、搗者は鳥居の後方は在り、助手は前に立つ、先生鳥居の上に見臺を拵へ、門人をして助手と爲し書を授く、予も數々助手と爲り

て大日本史を授りたり、「助手は要せざるもあり、先生一人の時と雖も讀書せらるゝは勿論なり」

一杉の邸内に畑多し、春夏の交先生出て草を除く、門人も亦從て之を助く、先生草を除きつゝ、讀書の方法又ハ歴史の談話を爲す、門人愉快ヲ勝へす之を樂みとす、

一先生の詩文稿抄録等は半紙十行廿字の藍色の堅横罫版を用ふ、此板は僧月性の贈る所なり、門人も亦之に倣ふ、由て先生の所用は固り門人自身のものも罫版を摺ることは皆門人之を爲す、其當時は罫紙を賣るもの無し、今は至る所之あるは學生の幸福と謂へし、

一曾て塾の狹隘を感じ新たに一棟を増築す、大躰は大工の作に係ると雖も、壁を塗り坐板を釘する等のことは皆門人集りて之を爲せり、

一村塾に寄宿せる生徒は交番して飯を炊き調理を爲す、薪炭の如きも皆自身市に行て購求す、今の書生賄を命し坐して薪炭を取寄るか如きこと（下脱カ）おし、

右の外先生の嘉言善行枚擧に違あらずと雖も、多くは先生の傳及び先生の著書中に詳かなれば今皆之を省略す、

（送假名の使用法大いに今日と異なるものがあるが、二三註記の外暫くそのままにした）

（東京市吉田茂子氏藏 校合濟堂）

横山 幾太 鷗磻釣餘鈔

解題并凡例

一、故從六位横山幾太幼名重五郎は、安政四年歳十七の時松下村塾に入門し、同五年迄居つた、安政四年十一月廿四日松陰より松浦松洞宛の書中に、松下村塾中松本組と上野組(松本の)とが學問修業の上で互に競争して居る模様が見える、その上野組の頭が横山であつた、

一、彼は明治以後長く山口縣の郡長をして後隠退したが、明治三十九年に六十六歳で亡くなつた、この鳴磔釣餘鈔はその晩年(明治廿四年)子孫の爲に書遺された隨筆であつて、その内から松陰に關するもののみを摘記した、

(委員 廣瀬豊)

一 黒船來リタルヨリ人心洶々ノ際ニ方リ、夫ノ船ヘ乗り込マントシテ其策成ラス、幕府ノ囚人ト為リ藩ヘ預ケラレ、萩ノ野山獄ヘ下ラル、ノ時ニ於テハ、実ニ其膽畧ニ驚カサル者無ク、吉田先生ノ名童孺婦豎モ識ラサル者無シ、余ハ其萩ヘ飯ラル、時ノ狀ヲ見ハヤト唐樋町札場今ノ電信局ノ所ニ至リ居リシガ、薄暮廣柳車(網乗り物、駕籠ノ上ニ網ヲ掛ケタル物)ニ乗り警衛四五人モ副ヒテ通ラレタリ、

○
一 (安政四年)余年十七ノ時松蔭吉田先生其身元杉ノ家ニ預ケ(獄ヨリ出)ラレ居ラレ、近所ノ者私カニ讀書ヲ學フト聞キ、天野御民一日松下ニ遊ヒ、或人ノ紹介ニテ謁ヲ執リタル由ヲ話スル故、余モセメテ先生ノ面目丈ケニテモ見ハヤト天野ニ伴ハレ松下杉家ニ至リシニ、一人ノ面目醜陋ナル人面會シ、仮名交リノ書ヲ授ケ且ツ取り飯リ讀ムヘシト命セリ、余飯路謂フニ吉田先生ハ未タ壯歲ト聞クニ似ス、且ツ鬼神ノ如ク非常人ナル先生ニシテハ、其容良言語一モ人ヲ動カスニ足ル者アルヲ見スト、惟訝千萬ナリ、天野余ノ惟訝ノ狀アルヲ察シテカ、曰ク、今日ノ人ハ先生ニ非ス富永有隣ト云フ人ナリ、先生漫リニ他人ニ會スルヲ嚴禁セラル、故ニ兩三日富永ニ學ヒタル後ニアラサレハ先生ノ室ニ至ルヲ得サルナリ、余ノ先生ニ謁シタリト云フモ則チ今説ク所ノ事ノ如シト、於レ是余謂ラク、余ハ元來讀書ノ為メナラス、只先生ノ面目ヲ觀ンカ為メナリ、其レモ一步モ松下ヘ未タ向ハサレハ已マン、既ニ松下ニ至ル以上ハ先生ニ

謁スル迄往クヘシト、明日又至ル、既ニシテ人アリ、來リ此方へ來ルヘシト報ス、至レハ先生在リ、其容良言語果シテ人ニ異ナリ、先生曰ク勉ムヘシ、〔言語頗ル丁寧ナリ、御勉強被レ成レ〕余拜シテ退キ他ノ室ニテ例ノカナ交リノ書ヲ讀ム、〔七八人モアリ〕先生突然余ノ前ニ坐シ余カ讀ム所ノ書ヲ取り一節ヲ讀ミ且ツ曰ク、此書ハ常陸帶ト名ク、水戸人藤田彪ノ撰ム所云々、由テ諄々藤田ノ為レ人ヲ説キ且ツ余ハ藤田ニ面會シタリ、双髮〔ソーハツ〕〔時俗ハ元服ノ時ナレハ〕ナリシ等ヲ話ス、其慇懃ナル且ツ一モ自ラ英雄ヲ以テ居リ人ヲ見ル虫蟻ノ如クスル狀一点モ無ク、只僅カニ年長ト云フ迄ノ如シ、余大ニ驚キ喜懼措ク能ハス、自ラ謂フ、余ハ小丈夫一乳臭ナリ、然ニ世ノ鬼神視シ豪傑視スル先生ノ主角ヲ設ケス傲慢ノ態ヲ見サル諄々人ヲ導クノ風眞ニ掬スヘク、之ヲ當時ノ苟モ一經一能ニ通スルノ士ニ比スルニ營ニ霄壤ノ差アルノミナラス、如レ此キ先生ノ薰陶ヲ受ケハ樗材或ハ一用ヲ為スヲ得ヘシト、欣然措ク能ハス薄暮家ニ飯リ明日又至ル、時先生武教全書ノ講義ヲ為セリ、余モ亦之ヲ聽クヲ得タリ、此日乞レ暇ノ時先生曰、明朝六ツ時ヨリ外史ノ授讀ヲ為セリ來ルヘシ、且ツ書籍無ケレハ此方ニアリト、明朝至ル、凡受讀者十人許リモヤアラン、書籍ハ三四冊位ナリシ、先生曰、外史ハ平氏ヲ始メトスレバ長州人ハ毛利氏ヨリ始ムヘシ云々、側ラニ地圖ヲ備ヘ置キ一々指導セリ、又假令ハ吉川公ノ愛宕山ニ上ルノ論ト、小早川ノ合力シテ備中ニ會スル論ノ如キニ至レハ、先生必ス卷ヲ措キ人々ヲシテ其意見ヲ述ヘシメ且ツ先生モ亦示ス処アリ、故ヲ以テ毎朝僅カニ拾枚位讀了ルニ過キサレバ、實ニ他ノ先生ニ學ヒ百枚モ素讀スルニ勝サルヲ遠ク益ヲ得ルヲ多カリシ、嗚呼人ヲ教導誘掖スル世ノ及フ者アラサル処アリ、先生ハ兵學師範家ニシテ山鹿流ナリ、故ニ武教全書ハ其家ノ傳書ナリ、

又尤モ子ヲ講スルニ長シタリ、又人先生ト呼フモ師ノ故ヲ以テナルヘシ、〔假令先生ノ如キニアラサルモ師家ナレハ〕一先生毎ニ至誠而不レ動者未レ有レ之也ノ句ヲ服膺セラレタリ、故ニ自ラ反シ自ラ省シ漫リニ大声遽色〔大義ニ關スルヲ〕等ヲ見サス、凡庸人ト語ルニモ必ス彼レヲシテ其云フ所ヲ終ヘシムルノ風アリ、授讀ノ声凛々徹レ耳、必其要領ヲ示シ又人ヲシテ義ノ在ル所ヲ尋釋セシム、

一余ノ如キ樗鷲ノ劣材ヲ以テ今日漸大義ヲ知り得ルニ至リ、又筆硯ヲ弄シテ所懐ヲ陳フルヲ得ルニ至リ、又今日ニ至ル迄叨リニ一郡ノ宰ト為リ得タル者ハ先生授讀ノ賜ト云フモ不當ノ言ニアラサルナリ、然ラサレハ藩内黨議ノ際又維新前後ノ劇變ノ時ノ如キ、余輩カ學生、實ニ大ニシテハ戰鬪〔四境等ノ事總テ包含ス〕小ニシテハ家計〔種々ノ改革〕、其他變亂改革幾多ノ事變ヲ經來リ、猶一郡ノ宰タルヲ得一郡人ノ上ニ列スルヲ得ルヲ得ヘケンヤ、全ク一窮漢一無賴生ニシテ終ランノミ、父母先靈ノ厚庇ハ申ス迄モ無ク之レニ次ク者ハ則チ此賜ナルヘシ、故ニ細縷ヲ顧リミス記載スル如レ此、其年ノ事カトヨ、廉德様御在職中ニ職吏アリ、夫レヲ不注意ニテ檢印ヲ捺シタル過誤トテ同時ニ御同僚五六人モ同時ニ譴責ヲ御蒙リ相成リタリ、其時先生詩ヲ寄セララル、曰ク
殊無俗子擾吾惟、日月容光秋影遲、
幽囚讀書天下樂、即今隨意使君窺、

一久坂ハ兄ヲ玄機ト称シ人材ナリシカ早ク没セリ、故ニ弟ヲ以テ兄ノ跡ヲ襲キ、其頃ハ御医者ハ〔御醫者ニ限ラス醫ハ惣テ剃髮セリ〕剃髮スルヲ以テ制法ナル故ニ幼名秀二郎ヲ改メテ剃髮シ玄瑞ト号セリ、平安湖ニ成長スル故又其幼ナル井ハ平安古ニ吉

松淳藏トテ私塾アリ、之レニ学ヒタルヲ以テ余等ハ其幼ナルトハ能ク知ラサレトモ其名ハ萩中ニ聞エ居タリ、其人ハ君子ノ風アリ能ク人ヲ容ル、性酷タ文才アリ、音吐明晰鐘ノ如シ、一見其風采ノ衆ニ秀出スルヲ知ルニ足レリ、松蔭先生ノ門ニ入ルヤ、実ニ先生ノ之ヲ待ツ高杉ニ同シ、餘子及ハサルナリ、久坂ニ就キテ奇談アリ、久坂ハ幼ヨリ怙恃ヲ喪シタル人ノ由ナリ、單獨ナルヲ以テ先生其妹ヲ妻ハセントスルノ意アリ、先生ノ同庚友ニ中谷正亮ト云フ人アリ、此人頗ル学問ヲ喜ミ性忠懿志趣アリ、曾テ其父ヲ喪シ又其母ヲ喪ス、各心喪三年ヲ服セリ、此人毎ニ先生ノ門ニ遊ヒ先生ヲ師ト敬事ス、其年齢既ニ先輩ナルヲ以テ人舉ナ之ヲ同輩視セス、此人先生ノ意ヲ諭トリ、久坂ニ夫ノ妹氏ヲ妻ハスベキヲ以テス、久坂時尙甚タ壯拒ムニ夫ノ妹氏醜ナルヲ以セリ、中谷儼然容ヲ正ゾ曰、之レハ甚タ君ニ似合ハサル言ヲ聞クモノカナ、大丈夫ノ妻ヲ妻トル色ヲ擇フヘキ乎ト、久坂語塞カリ遂ニ諾スト云フ、當時中谷ノ媒妁ハ妙ナリト傳ヘタリ、中谷ハ松二郎ト云シニ諸葛亮補正成ヲ慕ヒ正亮ト更メタリ、久坂・高杉ハ各同庚ニシテ天保十年カ十一年ノ生レト覺フ、

一余カ松下村塾ニ通学スル時、折々極メテ重厚ナル風ノ人來学セリ、來リタルトハ十日間モ二十日間モ滞学シ、又版ルト久シク來ラス、其人ヲ問ヘハ佐世八十郎ト云ヘリ、書モ政記ノ類ヲ授讀兼講ヲ聽ク位ナリ、或日ノ朝先生曰、昨晚佐世來リ唐紙ヲ澤山持參シ揮毫ヲ乞ヒタル故書シテ與ヘタリ、気カ紛レタリト、余等當時先生ハ固ヨリ英傑ナレト書ハ妙手ノ評モ無シ、唐紙澤山トハ佐世ト云フ人モ田舎漢ナル故ニ流石純樸ナリト謂ヘリ、當時佐世ハ船木辺

ニ住ミ其風俗至テ素樸ニテアリシ、之レ後チニ前原一誠ノ事ナリ、前原彦太郎ト更ム

一松蔭先生嘗テ云ヘリ、曰ク、日本人孔子ノ教ヲ学フハ子路ヨリ入ルヘシ、書ヲ習フニモ其師ノ辭ヨリ入ルハ易シ、則チ子路ノ風其氣象日本ノ武士ニ取リテ実ニ学フヘキノ好手本ナリ、夫ノ日本武士道ノ如キ其氣象甚タ好シ、唯惜ム道ヲ知ラサルノミ、之レヲ道ニ斟酌シ一法ヲ作り度キモノナリト、

一松蔭先生ニ從ヒ日本外史ヲ讀ムノ日、先生曰、外史國除ノ二字ハ山陽ニ於テ不服ナリ、何トナレハ支那ニハ假令ハ伯禽ヲ魯ニ封ス、其後滅スレハ國モ隨ツテ除スルナリ、我国ノ如キハ六十餘州往昔ヨリ定マル所ノ國名ナリ、諸侯ヲ封スルト共ニ名ツケタル國名ニアラサルナリ、然ルニ外史ニシテ國除ノ字ヲ書スルハ研究ヲ欠キタルナリト、

一松蔭先生毎ニ孟子至誠而不動者未ニ有也ノ句ヲ服膺セラレタリシカ、或日ノ話ニ、余昔年江戸獄ニ繫カレ訟庭ニ於テ鞠問ヲ受ケタルト、佐久間象山翁余ノ故ヲ以テ問鞠ヲ蒙レリ、其時幕吏モ豫テ象山ノ名アルヲ忌ミ居タル事ナレハ隨分侮慢ノ說モ吐キタリ、然ルニ象山毫モ争ハス、諄々大義ノ在ル所ヲ論シ已マス、恰モ教師ノ頑生徒ヲ諭ス者ノ如シ、余ハ盛大義ヲ辨明シ諍論抗議セリ、余ハ元ト余ノ故ヲ以テ象山ニ迄連坐セシムルノ気ノ毒ト云フ心モアリタレハ、多少激烈慷慨ニ涉リタルヘケレト、余ハ大ニ象山ノ氣象ニ服シタリ、余ハ穩カニ人ヲ諭シ自ラ悟リ自ラ省ル所アラシムル様ニト心掛クル者ナリ云々ト云ハレタリ、道ヲ見ル真切ナリト云フヘシ、經驗ニ富ミタル実

歴ノ語ト云フヘキナリ、

○

一 中村伊助牛莊ト号ス、右手ニ病アリ、毎ニ右手ヲ袖ニシ君前ニテモ出サス、其病狀ヲ知ル者無シ、其風采実ニ道德
 気韵ノ高キ一見既ニ推服スルニ至ル、人擧ナ先生又ハ翁ト号シ敬礼セサル無シ、左手書ヲ善シ画ヲ善ク世擧ナ之ヲ
 珍トス、其講義字句ニ屑々タラス能ク人ヲシテ向フ所ヲ知ラシム、性酒ヲ嗜ム、余ヲ以テ見ルニ陶淵明一流ノ人物
 ナラン、而シテ慷慨能ク義ヲ断シ又材ヲ愛ス、松蔭先生ノ幽囚スルヤ當時大家交通スル者無シ、牛莊翁ハ特ニ駕ヲ
 枉ケ之ヲ訪ヒ獎勵ヲ加ヘラル、故ニ先生モ亦之ヲ尊敬セラレタリ、余今年五十一(明治廿四年)才是迄面謁シタル傑出家ニテハ德
 望ノ高キハ牛莊翁、気力衆ニ出識見人ニ高キハ松蔭吉田先生、膽識世ニ秀テ英雄ノ風アルハ東行高杉氏、度量衆ヲ
 容レ君子長者ノ風アルハ久坂実甫、入江致遠、才氣煥發ニシテ鋭敏ナル吉田秀実、而シテ長井雅樂氏ノ風采モ亦多
 ク見サル所ナリ、
(入江致遠字は子遠)
(ハ脱カ)

一 松蔭先生ノ論語ヲ説カル、ヤ、論語微ニ據リ専ラ朱説ニ拘泥セラレサリキ、

一 松蔭先生ノ話ニ、羽加台御狩ノ前浮言アリ、曰ク生キタル猪ヲ放チ君前ニテ遂ニ捕ヘ腰刀ヲ以テ斬殺セシメ、各佩
 用セル刀ノ如何ヲ試ミ平生ノ心掛ケヲ審判セラルト、之ヲ以テ各競フテ鋭利ナル刀劔ヲ用意シタル由、云々

一 又曰、日本ハ武国ナリ、支那ハ文国ナリ、其刑罰ノ酷ナル則チ其文人文国ノ證ナリ、日本ノ如キハ否ラス、則チ武
 人武国ノ淳厚淡薄ナル(ムシ)風ヲ視ルニ足レリ、云々、
(東京市横山健堂氏藏 校合濟堂)

關係雜纂

解題并凡例

一、松陰の人物履歴等を窺ふに足る資料中、第三者の書いた詩文・書簡・聞書・序・跋の類を蒐めて「關係雜纂」とした、但しこれ等の主なるものは第九卷關係詩文や、その他は皆夫々關係文獻の原本に附載したから、こゝにはそれに洩れたものを収めた、

一、本書中、松陰關係者から聞き取りたる松陰生前の逸事記録は極めて興味ある貴重な資料である、唯一般に逸事逸話には眞僞の保證し難いものが混入し易いから、他の史料から略ぼ確實性が推定せられ、蓋然性の多い事實のみを抽出したのである、

但し細部に互りて疑はしきものは、その都度註釋を加へて置いた、これは本篇の他の場合にも同様である、

(委員 廣瀬豊)

關係雜纂目次

一 遺言書	天保六年四月	吉田大助……………	五六三
二 神國令(神國由來)	七年以前	玉田永教……………	五六四
三 文政十年詔寫	十年前後	杉百合之助……………	五六五
四 兵要錄跋	弘化三年三月	山田亦介……………	五六六
五 東遊日錄	嘉永四年八月	德富一義……………	五六七
六 送吉田義卿序	四年十二月	小田村伊之助……………	五六八
七 送吉田・宮部・江幡三氏序	四年十二月	鳥山新三郎……………	五六九
八 送宮部君歸肥後州序	五年	鳥山新三郎……………	五七一
九 來原良藏日記附年譜	自嘉永六年 至安政三年	來原良藏……………	五七二
一〇 省譽錄 讀孟子	安政元年	佐久間象山……………	五七五
一一 梧樓日記	自安政二年六月 至同年七月二日	江幡五郎……………	五七六
一二 七月十七夜云々	二年七月十七日	小田村伊之助……………	五七九

一三	吉田一條始末書	安政二年十一月頃	鳥山新三郎	五五九
一四	松陰有送別兼見寄家弟之作云々	三年二月	小田村伊之助	五五五
一五	評義卿壽序	三年四月	小田村伊之助	五五六
一六	題暹羅軍艦圖	三年五月十一日	久坂玄瑞	五五六
一七	送佐世君八十歸鄉序	三年十一月十八日	中谷正亮	五六七
一八	送松浦松洞序	五年正月五日	久坂玄瑞	五六八
一九	送日下玄瑞東行序	五年二月某日	佐世八十郎	五六九
二〇	送松浦松洞東行序	五年三月某日	佐世八十郎	五九〇
二一	六人者上京辭令書	五年七月二十六日	藩府	五九〇
二二	送生田良佐西歸序	五年八月二十三日	久坂玄瑞	五九三
二三	送生田良佐叙	五年八月	中谷正亮	五九四
二四	自記斷片	五年十二月十五日	生田良佐	五九七
二五	所懷	五年十二月	佐世八十郎	五九八
二六	西海轉蓬日錄	五年	關鐵之助	五九八
二七	奮興錄	五年	生田良佐	六〇一

二八	移竹記	安政六年以前	門人某	六〇七
二九	目安箱横目之控	五・六年	横目	六〇八
三〇	送大高・平島二子序	六年正月廿一日	入江杉藏	六〇八
三一	訴吉田寅次郎寃書	六年正月	久坂玄瑞	六〇八
三二	論松陰先生投獄	六年春頃	入江杉藏	六〇〇
三三	松陰東行後書物始末扣	六年六月以後	杉梅太郎	六〇二
三四	井原孫右衛門日記	六年八月十四日	井原孫右衛門	六〇三
三五	續庸書檄	六年九月七日	入江杉藏	六〇四
三六	依田學海日記	六年九月一日	依田學海	六〇四
三七	病尊筆語	六年十月	依田學海	六〇四
三八	風說二條	六年十一月廿日以後	佐世八十郎	六〇五
三九	問三夕條(草案)	六年冬	杉梅太郎	六〇六
四〇	松陰に關する書簡二種	萬延元年正月四日	久坂玄瑞	六〇七
四一	趣意書	元年	杉梅太郎	六〇八
四二	斬奸(長井雅樂)狀原稿	文久二年三月	久保・楠崎・中谷・佐世・久坂	六〇九
		二年六月頃	久坂玄瑞	六〇〇

關係雜纂

四三	追懐古人一詩十首并引	元治元年以前	久坂支瑞	五六〇
四四	和歌四首	元治元年	小田村伊之助	六三三
四五	題「先考手寫新論之帙」	慶應元年十二月九日	杉梅太郎	六三三
四六	和歌二首	二年前及二年	小田村素太郎	六三三
四七	大原三位に差出す書及詩歌の跋	明治七年頃	野村靖	六三三
四八	韻華帖序	十一年八月八日	榊取素彦	六三三
四九	跋「名家手簡後」	十二年四月廿九日	榊取素彦	六三四
五〇	松陰遺稿序	十二年十一月	榊取素彦	六三五
五一	岡部富太郎履歷書	十二年頃	岡部富太郎	六三七
五二	國旅の苞	十五年頃	那珂通高 <small>(江野五郎)</small>	六三六
五三	回顧録序	十六年三月三日	品川彌二郎	六三九
五四	松陰遺文跋	十九年	榊取素彦	六四〇
五五	椿東小學校開校式祝辭	二十二年二月五日	品川彌二郎	六四〇
五六	和歌二首	二十二年二月十一日	榊取素彦	六四三
五七	要駕策稿本跋	二十三年九月	榊取素彦	六四三

要駕策稿本序

五八	要駕策稿本序	明治二十三年十一月	野村靖	六四二
五九	書「吉田松陰手簡後」	二十五年一月	榊取素彦	六四二
六〇	書「松陰遺墨後」	二十六年三月七日	榊取素彦	六四四
六一	小野正朝履歷	二十六年	小野正朝	六四四
六二	懷舊記事	二十七年三月	山縣有朋	六四六
六三	東下雜集跋	三十年以前	默霖	六五〇
六四	惠純自記	三十二年	惠純	六五〇
六五	吉田松陰と松下村塾	三十四年	杉民治正誤	六五三
六六	福原又市談話	三十六年頃	速記	六五六
六七	杉民治談話	三十六年頃	速記	六五九
六八	日野宗春 <small>(惣)</small> 雜談	三十六年頃	速記	六六〇
六九	宍戸璣談話	三十七年頃	速記	六六一
七〇	小幡高政談	三十九年以前	田中眞治	六六三
七一	松陰先生の令妹を訪ふ	四十一年九月	松宮丹畝	六六四
七二	書「松陰遺墨後」	四十四年六月卅日	榊取素彦	六七三

關係雜纂